

令和1・2年度 文部科学省委託事業

「これからの時代に求められる資質・能力を育むための

カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」

カリキュラム・マネジメントの手引き



宮城教育大学附属小学校

◆◆◆◆ 目 次 ◆◆◆◆

はじめに	校長 西城 潔
第Ⅰ章 宮城教育大学附属小学校の教育活動	1
第Ⅱ章 本調査研究に取り組むに当たって	5
第Ⅲ章 研究の概要	9
第Ⅳ章 学校教育目標の具現化に向けたカリキュラム・マネジメント	15
1 学校教育目標と各教科等における指導との関わり 宮城教育大学 名誉教授 横須賀 薫 先生	
2 学習の基盤となる資質・能力の育成を目指した授業の構築	17
1) 資質・能力を基盤とした教科横断的な学習	
2) 各教科等における取組で見えた本質に迫る授業	
3 本質に迫る授業を通して育成した資質・能力と実践上の留意点	87
4 教科横断的カリキュラム・マネジメントの方策 宮城教育大学 吉田 剛 先生	89
第Ⅴ章 教育目標の具現化を目指す附属小の学校行事の在り方	93
第Ⅵ章 現代的諸課題に対応する資質・能力の育成に関する取組	103
1 「からだの学習」の開発 宮城教育大学 名誉教授 数見 隆生 先生	103
2 新教科「コンピュータ・サイエンス」の試行について 宮城教育大学 安藤 明伸 先生	109
3 「小学校外国語教育における指導と評価の一体化」の試み 宮城教育大学 鈴木 渉 先生	117
4 ESD の充実 各教科等との能力関連をどのように仕組んでいくか 宮城教育大学 名誉教授 見上 一幸 先生	121
5 道徳教育の充実 道徳の授業と年間を通じた評価のあり方	124
第Ⅶ章 本調査研究における成果と課題と今後の展望	129
おわりに	副校長 佐々木 誠道



本校の取り組む共同研究と

カリキュラム・マネジメント研究

宮城教育大学附属小学校
校長 西城 潔

宮城教育大学附属小学校では、2019-2020年度の2年度にわたり、文部科学省の委託事業「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」に取り組んでまいりました。本手引きは、この2年間の私どもの研究によって得られた成果や課題について報告することを目的に刊行するものです。

ただしカリキュラム・マネジメント研究の成果と課題を述べるには、本校が現在取り組んでいる共同研究についても触れておく必要があります。本校では昨年度より、カリキュラム・マネジメント研究と軌を一にして、「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して～本質に迫る授業を通して～」という研究主題のもとで、新たな共同研究をスタートさせました。初年度には、各教科等で「本質に迫る授業」の追求と実践に努めてまいりました。その成果と課題を受け、今年度は学校教育目標で目指す望ましい姿と各教科等で育成される資質・能力とを結び付ける方向で研究の進展を図っています。こうした共同研究の取り組みを通して浮かび上がってきたのが、各教科等ならではの学びの大切さとともに、教科間の関連を追及する横断的・総合的な展開の重要性でした。そこで、複数の教科部で構成するチームを母体に研究の横断的展開について取り組む体制を整え、そこでの試みをカリキュラム・マネジメント研究と位置付けた次第です。

したがって、本手引きに述べるカリキュラム・マネジメント研究の成果と課題は、本校の共同研究と不可分の関係となっています。確たる成果が得られた部分もあれば、まだまだ多くの課題を抱えた面もあるというのが実態です。皆様からは、本校の取り組みについて、ぜひとも忌憚のないご批評やご提言を賜りたいと存じます。

最後にカリキュラム・マネジメント研究の遂行にあたり、何度も附属小学校に足をお運びくださり、貴重なご助言・ご指導をいただきましたカリキュラム・マネジメント調査研究検討委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

第 I 章

宮城教育大学附属小学校の 教育活動について

第 1 章 宮城教育大学附属小学校の教育活動

1 歴史

宮城教育大学附属小学校は創設 140 年を超える歴史を刻む県内唯一の国立の小学校である。前身は、明治 7 年 4 月に創設された宮城師範学校附属小学校である。その後、県立宮城師範学校や東北大学教育学部附属小学校などの歴史を経て、平成 34 年 4 月に現在地である「北七番丁」に校舎を構えた。東北大学より移管され宮城教育大学附属小学校となったのは昭和 24 年 4 月。平成 16 年からは、国立大学法人宮城教育大学附属小学校となり、現在に至っている。

2 三つの使命

本校は次の三つの使命を担っており、この三つの使命を有機的に関連させて独自の教育活動を展開している。

1. 児童の心身の発達に応じて、初等普通教育を行うこと
2. 教育の理論及び実際について、実践研究を行うこと
3. 教育実習生について、その指導を行うこと

3 教育目標

本校の学校教育目標は「からだも心もたくましく、しかもしなやかな子供」である。そのため、

次のような具体的な子供像を設定している。

生命を大切にし、体を鍛える子供
心温かい、思いやりのある子供
なぜと考え、真実を追求する子供
互いに力を合わせ、自主的に行動する子供

3 目指す学校像

本校で目指す学校像は次の通りである。

1. 一人一人の子供が、のびのびと楽しく過ごせる学校
2. 一人一人の教師が使命感に燃えて、豊かな発想で日々の授業や行事をつくりだす学校
3. 地域や関係機関との連携の中で、信頼され貢献する開かれた学校

4 本校の教育活動

本校の活動は朝の遊びから始まる。始業前に多くの子供が校庭に出て、学級単位で計画した遊びに取り組んでいる。また、日々の遊びや授業の中でも附属小学校の二大行事である「なかよし運動会」や「合唱の会」をはじめとする様々な行事の企画運営や、給食を中心とした食育の中でも、常に教育目標に戻って、工夫し実践に取り組んでいる。

第Ⅱ章

本調査研究に取り組むに

当たって

第2章 本調査研究に取り組むに当たって

1 学校・地域の実態

本校の児童は、学習に対する意欲が高く、全国学力・学習状況調査においても全国平均を上回っている。また、知的好奇心が強い児童も多く、総合的な学習の時間等では、課題解決に向けて意欲的に取り組み、主体的に学習対象と関わろうとする意識も高まってきている。しかし、学びを活用しようとする意識はまだ高いとは言えない状態である。既習事項を意識的に生かしたり、課題解決のプロセスを自覚的に進めたりするという点については、課題が残る。

また、実践校の学区は仙台市全域となっており、市町村立学校と比べ地域性は弱く、仙台市全体を地域としている。バスや地下鉄などの公共交通機関を利用して登下校する児童も多い。スポーツ少年団に参加している児童も多くいるが、走力や持久力など体力面については、低下してきている実態がある。

本校の本務教員35名は、令和元年度においては平均年齢が32歳となっており、若手教員が占める割合が高くなっている。中堅教員が少ないこともあり、取組に対して熱心に取り組む一方、授業力の向上は、全体で取り組んでいく必要がある。学校教育目標の具現化を研究の柱とし、各教科等の本質に迫る授業づくりに取り組むこ

とは、教員個々人の授業力を向上させるとともに、学校組織としての集団力を高めることにつながるものと捉えている。それは、ひいては、児童へ還元されていくものであり、学校教育全体の充実に結びつくと考えている。しかし、勤務時間の長時間化が課題となっており、現在、働き方改革を進めている。平成29年度から取り組み始めた長時間労働の改善により、労働時間は年々減少している。令和2年度においても、同様に働き方改革に取り組み、限られた時間を有効に活用しながら、本調査研究を展開していくことができるよう留意することが必要である。

地域として、宮城県は令和元年度全国学力・学習状況調査における結果は課題の多く残るものとなっており、授業の見直しが必要である。実践校の取組みを広く地域に還元し、地域とともに考えていく機会を設定していくことで、実践校に閉じられた取組にならないよう展開していく必要がある。

2 これまでの研究の取組

平成27年度から29年度の3カ年において、文部科学省外国語教育強化地域拠点事業の指定を受け、小学校・中学校・高等学校・大学の連携の中で、系統的な指導の在り方を探り、CAN-DOリストにま

とめ発信した。この外国語教育については、地域に開いた外国語教育研修会を開催し、大学教員の講話などを通し、授業の在り方や評価、全体のカリキュラムについて学ぶ場を設けている。

また、ユネスコスクールとして、大学と連携しながら、ESDの充実を目指し、各教科等と総合的な学習の時間との関係を能力関連及び内容関連双方からの視点から整理をし直し、平成30年度にESDカレンダーを各学年で作成した。このESDカレンダーについては、今後とも修正を続け、PDCAサイクルの中でさらなる吟味を続けていく。

他方、新学習指導要領実施に向け、大学と連携をしながら、小学校におけるプログラミング教育について実践を重ねてきている。そこでは、各学年において、プログラミング教育を推進するにあたり、各教科等と関連させながら、カリキュラム編成を行った。また、外国語教育同様、地域に開いたプログラミング教育に関する研修会を開催し、小学校教員だけではなく、中学校や高専の教職員も参加し、ともに学ぶ機会を設け、自校の取組の見直しを図ってきている。

道徳教育の充実についても先進的に取り組んでおり、平成30年度7月には、地域の市町村立学校とともに、道徳教育に関するパネルディスカッションを実施している。

そこでは、特別な教科道徳となり、授業はどのように変わるのか、また、どのように評価活動を展開していけばよいのか考える機会を設けた。そこでは、約100名の参加を得、意見交換の中で、ポートフォリオ的な取組による連続的な見取りの必要性が確認された。また、授業を充実させていくことが、評価につながるという前提があることも再確認した。

さらに平成27年度から平成30年度において「子供が問いを持ち、追究し続ける授業ー主体的に学ぶ姿を目指してー」を研究主題とし、授業研究に取り組んできた。この研究を通し、各教科等における特質を踏まえ、子供が問いをもち、連続的な学びを進めていく中で、深い学びを得ることができるよう検証を重ね、授業成立に必要な三つの要件「対象と関わる必要感を持つこと」「自らの学びを自覚すること」「対話的な学びがあること」を明示し、子供の姿を通して発信してきた。まとめの年度となる平成31年2月に行った公開研究会では、各教科における授業提案に加え、プログラミング、外国語活動、学校図書館活用、食育、いのち、ESDの取組を公開した。

2日間の公開であったが、延べ1300人の参加者を得て、実践を通じた検討及び情報交換を行ってきた。

(文責：主幹 今野 ゆき)

第Ⅲ章

研究の概要

第3章 カリキュラム・マネジメント（教科横断） 研究の概要

本校では、文部科学省委託事業「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」を受け、2年間の研究に取り組んでいる。

本研究では、これまでの研究実績の基、カリキュラム・マネジメントの三つの側面（①児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。）から三つの視点に焦点を当てて研究を行ってきた。

1 研究に当たっての取組の視点

<視点1>

学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究

校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ、授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指してきた。その結果、各教科等における「学ぶ意義」や「役割」とは何かを改めて明らかにし、教科等で目指す授業像を設定することができた。また、各教科授業研究会を設け、全教職員で教科の特質を押さえ、目指す子供の姿の吟味を重ねるとともに、その成果と課題から、カリキュラムの見直しを図り、修正を行うことができた。さらに、カリキュラムの見直しの観点の一つとして、横断的な指導を掲げ、取り組んできた。本年度は、試行的な取組として、資質・能力をベースとした社会科、生活科、家庭科、総合的な学習の時間の関係を整理し、系統立ったカリキュラムの作成の在り方を探ることができた。

しかし、各教科の学びと学校教育目標の具現

化をつなぐところの不透明さが課題として挙げられ、学校教育目標具現化の具体的な検証にまでは至らなかった。そこで、各教科の学びがどのように学校教育目標の具現化につながっていくのかを今後明らかにしていく。そのために、学校教育目標から5つの資質・能力（言語力・問題解決力・活用力・表現力・調整力）にブレイクダウンして、教科横断的な取組とリンクさせながら学校教育目標の具現化を目指していく。

<視点2>

学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

学校教育目標の具現化を目指し、副題に掲げているように、各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。年間を通して研究授業を行い、互いに見合い、検討を重ねていくことで、各教科等及び教材の持つ本質を明確にしていくとともに、児童に各教科等における見方・考え方を働かせながら本質に触れさせていくことで、問い（課題意識）を明確にもたせ、主体的な学びを展開させ、深い学びの実現を目指すことができた。教材研究や授業構築に当たっては、本大学の教員と連携し、大学教員の専門的な知見と実践校の教員がもつ実践知とを生かしながら検証を重ねることができた。

しかし、授業研究におけるPDCAサイクルの確立が課題として挙げられる。特に、P（評価）からA（改善）に向けた取組を強化していくことで、更なる学習の基盤となる資質・能力の育成が図られると考える。そこで、授業の評価・改善の方法を検討し実施していく。

<視点3>

現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

① 小学校外国語教育における

指導と評価の一体化

今年度から、新しい3観点に基づく「主体的に

取り組む態度」「知識・技能」「思考力、判断力、表現力」での指導と評価に取り組んだ。指導を行いながら、評価場面や評価の方法について検討を行ってきた結果、「知識・技能」は、Unitの前半部分で、「思考力、判断力、表現力」は、後半部分で評価が可能であることが明らかになった。また、主体的に取り組む態度については、複数のUnitで子供の取組の様子を見取ることが必要であることが明らかになった。学期の最後に取り組んでいるALTと1対1で行うパフォーマンステストでは、評価する観点を「思考力、判断力、表現力」に絞り、評価規準をもとに担任が評価を行うことで、子供の成長をじっくりと見取ることができた。また、高学年でノートを活用し、ノートを用いた指導の在り方について探ってきた。ノートを活用することで個人のレベルに合わせて書く活動に取り組ませることができ、有効に活用することができた。また、子供の学びの足跡を確認しやすくなり、子供の学びを見取りやすくなった。

本校は1年生から英語活動として、英語に親しんでいるため、中学年での教科化も可能であると考える。そのため、中学年での教科化の在り方について検討してきた。

② CS (コンピュータ・サイエンス) の

カリキュラム化

全学年10時間のCS (コンピュータ・サイエンス) の時間を設定し、カリキュラム化を図ってきた。その結果、コンピュータへの理解を深めさせるための授業について実践を重ね、コンピュータ・サイエンスの体系表を整備することができた。また、プログラミングだけではなくCSの授業が必要であることについて、公開研究会の場で提案し、多くの同意を得ることができた。さらに、CSの授業を作る上での方向性が明らかになった。CSでは、どの要素を扱う授業なのか、何を身に付けさせる授業なのか明確となった。

しかし、情報活用能力との関連性を明らかにする必要性や教科化に伴う根拠の必要性、5年後を見据えたときのハードウェア整備が課題として

明らかとなった。そこで、本校で育成したい情報活用能力の体系表を作成し、CS体系表と関連付け、今行っていることがどこに位置付くものなのか可視化していく。また、カリキュラム化に向けて、教科学習の根拠となる指導要領を整備している。

③ 道徳教育の充実

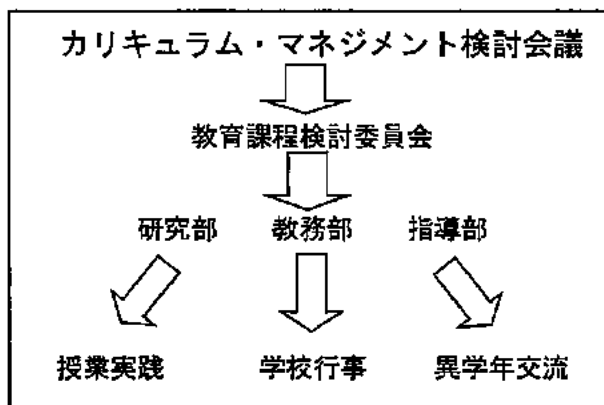
道徳の特質は何か、子供の実態はどうかを根拠にして考え、計画→実践→評価→再実践のサイクルにより日常の授業を重ねてきたことで、道徳科の特質、「本質に迫る授業」の具体像、価値に迫るための手立てが少しずつ明らかになってきた。また、p4cの取組を積み重ねてきたことで、安心安全に話し合える雰囲気醸成と聞く(聴く)力が高まり、道徳的価値について自分の生活経験を振り返りながら、自他と対話して考え、よりよい生き方を探究していこうとする姿が見えてきた。さらに、学習状況(横)と成長の様子(縦)を1年間の中でじっくりと見取ることを共通理解できた。

しかし、道徳科の授業が1時間の授業で終わってしまっている。道徳科の授業を、1時間で終えるのではなく、次の道徳科の授業や他教科、領域に関連させて継続的に指導していくことが必要である。また、評価するための「道徳ノート」であってはならない。道徳科で評価するのは、学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子についてである。「書いてあることが、子供の本音」だと決めつけるのではなく、「書いてある事実」のみを評価するのではなく、子供の記述の裏側を見ることや、授業での発言、学校生活での子供の様子と関連付けて評価していくことを検討している。

2 研究体制

本調査研究を進めるに当たり、研究体制については、実践校である宮城教育大学附属小学校教育課程検討委員会を主体とする。また、カリキュラム・マネジメント検討会議を設置し、随時、取組

に対して協議し、指導・助言を行う。さらに、実践校は大学附属学校であり、大学との連携が取りやすい環境にある。そこで、カリキュラム・マネジメント検討会議では勿論であるが、随時、カリキュラム・マネジメント検討会議委員以外の大学教員と連携を図り、学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた実践研究に取り組んできた。



3 研究スケジュール (令和元年度)

月	取組内容
4月	カリキュラム・マネジメント検討会議設置、研究の取組の方針確認
5月	学校教育目標の具現化に向けた実践研究(～12月) 研修会①「教育研究の検証について」
7月	研修会②「情報教育・プログラミング教育の進め方」、取組の検証Ⅰ
8月	研修会③「道徳教育の推進について」
9月	実践の中間まとめ、カリキュラム・マネジメント検討会議②
10月	研修会④「小学校外国語教育の推進について」
11月	研修会⑤「特別活動の充実について」
12月	研修会⑥「ESDの充実について」、取組の検証Ⅱ、カリキュラム・マネジメント検討会議③

1月	「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成開始
2月	公開研究会、カリキュラムの見直し・修正
3月	カリキュラム・マネジメント検討会議④、調査研究完了報告書等提出

(令和2年度)

月	取組内容
5月	研究の取組方針確認、カリキュラム・マネジメント検討会議① カリキュラムによる実践研究Ⅰ(～9月) 「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成
6月	研修会①「カリキュラムを巡る問題と実践研究が向かうべき方向」
7月	研修会②「CS(コンピュータサイエンス)のカリキュラム化」、取組の検証Ⅰ
8月	研修会③「ESDの充実について」
9月	実践の中間まとめ
10月	カリキュラム・マネジメント検討会議②、取組の検証Ⅱ カリキュラムによる実践研究Ⅱ(～11月)
11月	研修会④「資質・能力の育成について」
12月	取組の検証Ⅲ
1月	公開研究会、「カリキュラム・マネジメントの手引き」吟味・修正 カリキュラム・マネジメント検討会議③
2月	カリキュラムの見直し・修正
3月	カリキュラム・マネジメント検討会議④、調査研究完了報告書等提出

4 カリキュラム・マネジメントのあゆみ

<研究1年次>

平成元年度、共同研究の新たな研究がスタートしました。新研究は、原点に戻り学校教育目標を見直していこうと、学校教育目標を核として研究でした。また、各教科を中心とした研究を進めるために、主題を『学校教育目標「体も心もたくましく、しかもしなやかな子供」の育成を目指して～本質に迫る授業を通して～』とし、研究を進めました。4月の研究全体会では、各教科で考える『たくましさ』と『しなやかさ』について意見を出し合い、授業を通して目指す子供の姿を確認し合いました。研究1年目、各教科等での研究は、本質に迫るものとして追究されましたが、進むにつれ、学校教育目標とのつながりが見えにくくなっていきました。そこで、教育課程検討委員会の中で話し合い、学校教育目標で目指す子供の姿からブレイクダウンする形で「言語力」「問題解決力」「活用力」「表現力」「調整力」の5つの資質能力を設定しました。また、この5つの資質能力の具現化を目指し、教科横断的な視点にも目を向けられるようにするために、複数の教科で行うチーム研究にも取り組むこととしました。

<研究2年次>

始めは、これまで取り組んできた、各教科等との研究と、チーム研究の棲み分けについて議論されました。ただし、この研究は、別のものではなく、どちらも学校教育目標の具現化を目指して、教科の本質的な授業を求めていくことを通して資質能力を培っていくのだということ、共通理解を図りながら研究を進めてきました。一人1授業の各教科の授業研究と同時並行で、チームでの授業研究を行ってきました。コロナ禍の下、学校のスタートが2か月遅れとなり、始めに行ったのは、

8月25日の問題解決力の資質能力を検討する生活科での授業研究でした。生活科、社会科、家庭科の研究を担当してきた先生方がチームとなって行った話し合いの中では、問題解決力の定義から、具体的な子供の事実に即して話し合いが進みました。しかし、最終的には、「生活科の本質とは何か」「生活科の授業の中で大切にしなければならないことは何か」という内容に集約されていきました。現在は、5つの資質能力についての授業研究を終え、課題が見えてきているところです。資質・能力の関係性や、学習指導要領で示された三つの柱「知識・理解」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」との整理など、これから取り組むべきことが多く見えてきました。これも成果と受け止め、少しずつ研究を進めていきたいと思えます。

<カリキュラム・マネジメントの進め方>

<1年目>

研究主題の設定

授業を通して、学校教育目標に迫る

↓

研究全体会

「たくましさ」「しなやかさ」の共通理解

↓

授業研究・実践

「たくましさ」「しなやかさ」を育むため、授業の本質に迫る各教科での実践の積み上げ

<2年目>

5つの資質能力の設定

↓

研究全体会

資質能力について、実践を通して具体的にしていくことを確認

↓

授業研究・実践

実践の積み上げ、資質能力の具現化

(文責：主幹 今野 ゆき)

第Ⅳ章

学校教育目標の具現化に向けた カリキュラム・マネジメント

- 1 学校教育目標と各教科等における指導との関わり～小学校における教育目標のあり方～・・・15
宮城教育大学名誉教授 横須賀 薫 先生
- 2 学習の基盤となる資質・能力の育成を目指した授業の構築・・・17
 - 1) 資質・能力を基盤とした教科横断的な学習
 - ①教科を資質・能力を基盤として5つに分類したチーム研究の試み
 - ②各チーム研究
 - ③資質・能力を基盤とした教科横断的な学習の成果と課題
 - 2) 各教科等における取組で見えた本質に迫る授業・・・49
- 3 本質に迫る授業を通して育成した資質・能力と実践上の留意点・・・87
- 4 教科横断型 カリキュラム・マネジメントの方策
～幼稚教育、生活科、社会科、家庭科・「総合的な学習の時間」の場合～・・・89
宮城教育大学 吉田 剛 先生

学校教育目標と各教科等における指導との関わり
～小学校教育における教育目標のあり方～



宮城教育大学名誉教授
横須賀 薫 先生

1 目的と目標

目的と目標の語義はどちらも「めあて」で、日常の会話ではその違いはあまり意識されない。しかし、厳密な議論や文章ではその違いは大切になる。

国語辞書の『大辞泉』（小学館）は「目的」の項で、わざわざ用法の違いを以下のように解説してくれている。

◇「目的」は、「目標」に比べ抽象的で長期にわたるめあてであり、内容に重点を置いて使う。

「人生の目的を立身出世に置く」

◇「目標」は、目ざす地点・数値・数量などに重点があり、「目標は前方三〇〇〇メートルの丘の上」「今週の売り上げ目標」のようにより具体的である。

このことは教育目標を考える上で大切になる。だが逆に言えば「目標」のことを考えるためには、「目的」を念頭に置いておくことが大切になることも忘れてはならない。現行の教育法でもこのつくりに従っている。

教育基本法では第一条が「教育

の目的」であり、第二条が「教育の目標」になっている。学校教育法でも第四章小学校で、第二九条が「教育の目的」、第三〇条が「教育の目標」である。教育課程編成の一般方針を示す小学校学習指導要領はこうした構造を受けて成立している。

したがって小学校における教育目標のあり方を考えるには具体的である必要があるとともに、その上位概念である目的にも十分に留意する必要がある。教育基本法が示す教育の目的「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」はいずれの課題を追究するにせよ忘れてはならないことになる。

2 教師としての願い

一番大事なことは教育課程の主体はあくまでも実践する教師その人にあるということである。なぜなら教師の仕事の基本は担任する、

あるいは担当する児童と文化財から選択した教材とを統合することだからである。

だから教師は児童一人一人の現実と教材の構造や価値について熟知していなければならない。さらにその統合を実現するためには教師に強い熱意がなければならない。そしてそれを可能にするのが教師の「願い」である。

教師は目の前の児童をどう育てるのか、どう育ててほしいのか、10年後20年後にどういう大人に、社会人になっていてほしいと願うのか、そういう「願い」があるかどうか教育目標の達成の鍵となる。

もちろん学校は教師集団によって構成されている。また児童の背後には親や家族があり、その人たちにも「願い」がある。教師の実践はそういう状況において成立する極めて困難な仕事である。

教師が児童という存在について、文化という存在について死に物狂いになって研究しなければならないのはそれだけの要求に応えなければならないからである。

社会や時代が落ち着いているときは、各人に同調圧力が強く掛かるものである。しかし、実践は本来個性的なものであり、俗に言えば「とんがっている」ことが必要である。周囲に迷惑かけるような

ことは別であるが。

3 パンデミックを超えて

新型コロナウイルスによるインフルエンザの世界的蔓延は、ついにWHOがパンデミックを宣言する事態になった(2020年3月11日)。今に至るもその状況は終息するどころか、むしろ悪化している。日本もその例外ではない。

悪疫の流行は、大勢の人々の健康を害し、精神的不安を増長することは当然として、パンデミックとなればさらに人間と社会のさまざまな面での弱点をあらわにし、その克服への努力が次の時代への課題を提出する。そのようにして人類は種の保存に成功し、文明をより豊かにしてきた。今回のパンデミックもやがて終息するものと信じられるが、大事なことはその経験を歴史にどう刻み、後世への教訓をどう整理し、それをどう伝えていくかである。

教育の仕事は医療の仕事のように感染症に直接対峙するものではないが、次の時代に生きる人類や国民を育てる仕事に従っているという観点からは、単に個人の経験としてやり過ごしてはならないことがらである。その意味では、世紀の疫病に際会してしまったことは不幸であるが、歴史に立ち会った幸運も思いみるべきである。

資質・能力を基盤として 教科を五つに分類したチーム研究の試み

宮城教育大学附属小学校

研究主任 三浦 秋司

1 本校で中心に据えて育成を

目指す五つの資質・能力

令和元年度末の教育課程検討委員会で、次年度の教育課程や共同研究の方向性について話し合った。その中で、カリキュラム・マネジメントを一層進めるために、本校の学校教育目標をブレイクダウンし、中心に据えて育成を目指す資質・能力を具体的に設定することが決まった。第IV章2-1の文章でも挙げたように、学校教育目標を基に育成を目指す資質・能力を具体化・鮮明化する作業である。そこで欠かせないのが、本校の学校教育目標から強調点や独自性を見いだすことである。話し合いによって、学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」の具現化を目指す上で必要な資質・能力として、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として小学校学習指導要領で挙げられるものから次の五つが適当であると決定した。

言語力 問題解決力 活用力
表現力 調整力

もちろん、本校で掲げる五つの

資質・能力以外にも、子供たちが変化の激しい時代を生き、よりよい社会を切り拓いていく上で必要なものもあるだろう。しかし、学校教育目標で目指す望ましい子供の姿を考えたとき、本校ではこれら五つを中心に据えることを選んだ。これらが有意に結び付いて発揮できる子供こそが、「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」だと考えている。

2 五つの資質・能力に

各教科等を紐付けたチーム編成

令和2年4月の研究全体会で、本校で中心に据えて育成を目指す五つの資質・能力を確認し、その具体と育成に欠かせない授業づくりのポイントを明らかにしていく研究のアプローチを次のように提案した。

① 五つの資質・能力に各教科等を紐付け、チームを編成する

言語力：国語科、英語科
問題解決力：社会科、生活科、家庭科
活用力：算数科、理科、CS科
表現力：音楽科、図画工作科、体育科
調整力：道徳科、特別活動、食と健康

※「チーム」を編成して研究に取り組む手法
(以下、チーム研究)は本校で初の試み

② 5回の全校授業研究会の中で各チームの授業提案を基に、五つの資質・能力について全職員で協議する

この提案に職員は賛否両論であった。前年度まで各教科等ならではの学びを大切にしながら本質に迫る授業を追究してきたことで、教科部ごとの研究を更に推進したいという考えが根強く、チームで研究を進めることと教科部研究の両立に懐疑的な意見もあった。

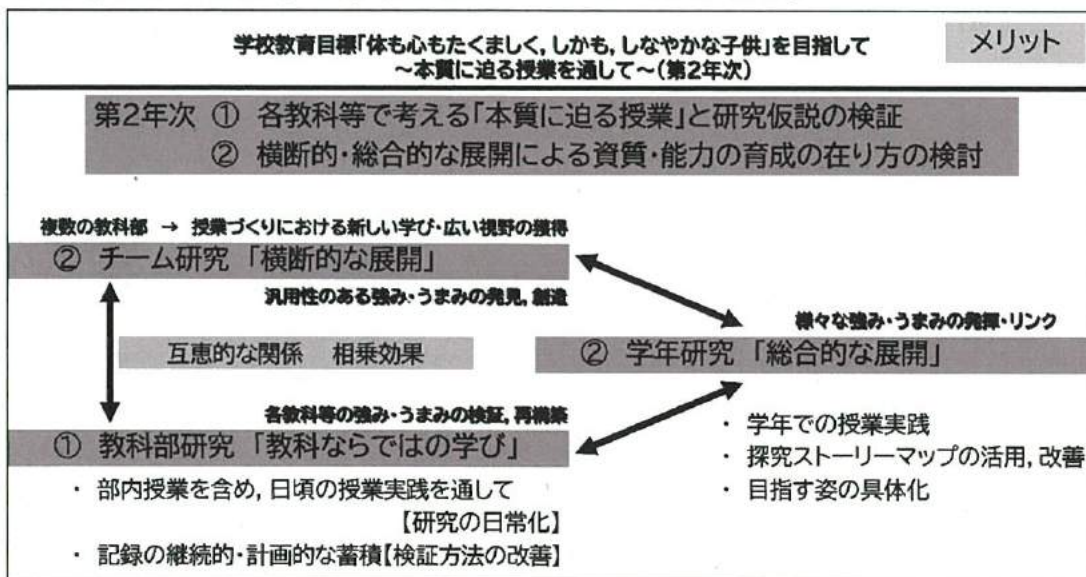
一方で、「教科部研究とチーム研究、更には学年研究を相互に関連付けて研究を進めることで、互恵的に成果を生み出すことにつながる」と、チーム研究に取り組むメリットを呼び掛けた（資料1）。そうしたことで、五つの資質・能力について全校授業研究会で議論することを通して、教科等を越えた横断的な視点で目の前の子供の育ちを考えられるようになると前向

きに賛同する意見も多く出された。

また、「各教科等ならではの学びを踏まえたとき、紐付く資質・能力は真に適当なのか」「そのチームに属する教科等は、その資質・能力の育成のみを目指すのか」という声もあった。

しかし、どの教科等も、五つの資質・能力を様々な場面で育成しているはずであり、ある資質・能力の育成にのみ特化する教科等はない。フォーカスを当てる資質・能力を設けて取り組むのがチーム研究ということである。職員の視野を広げる意味でも、やはりチーム研究の必要性を感じた。

このように、紆余曲折ではあるが、チーム研究が始まり、チームの話し合いが本格的に行われた。全5回の全校授業研究会の中で、各チームの授業提案を基に五つの資質・能力について全職員で協議することとなる。



資料1【研究全体会で呼び掛けた 本校初となるチーム研究に取り組むメリット】

チーム研究実践例①

【チーム研究の概要】

言語力 小池美幸(国語) 村上和司(国語) 加藤千佳(国語) 尾形尚子(英語) 阿部一矢(英語)

言語力

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

言語力

問題解決力

活用力

表現力

調整力

<本校で育成を目指す「言語力」>

自分の考えを深めたり、
よりよく伝え合ったりする際に言葉を使う力

本校で育成を目指す「言語力」を「自分の考えを深めたり、よりよく伝え合ったりする際に言葉を使う力」と設定し、言葉を通して深く思考したり、判断したり、表現したり、相手を意識して言葉を使ってよりよく伝え合ったりする子供の育成を目指す。

各教科等の中で、特に言語に関わる教科である国語科と英語科における言語力を発揮している子供の姿として以下のような姿が挙げられる。

国語科・・・文中にある言葉に着目し、そこから筆者の意図や登場人物の心情を読み取り、読み取ったことを伝えるように言葉にして表す姿

英語科・・・新たに知った英語の表現と、既習の表現を関連させながら、相手によりよく伝えるように言葉にして表す姿

他教科等においても、学習課題に対して思考、判断、表現しながら考えを深めたり、深めた考えを相手に伝えるように言葉で表したりする姿が考えられる。

<「言語力」が育つ・発揮される授業づくり>

以下の点に留意して授業づくりを行い、子供の言語力を育み、子供が言語力を発揮できるようにしていきたいと考える。

○ 言語力を育成することができる学習課題や発問を設定する

子供が意欲的に学びに向かうことができ、且つ、何を学習したり考えたりすればいいのか明確になる学習課題を設定する。また、獲得させたり活用させたりする言葉に子供が着目することができるような発問を投げ掛けていく。

○ 対話する場面を意図的に設定する。

子供が使う言葉を意識して伝え合うことができるようにするために「自分の考えを明確にする」「自分の考えをより深める」「自分にはなかった新たな考えに気付く」「よりよく伝えるためには何が必要か考える」など、様々な目的に合わせて意図的に対話する場面を設定する。

(小池 美幸)

第3学年3組 国語科学習指導案

日時 令和2年10月23日(金) 5校時
 場所 3年3組教室
 授業者 加藤 千佳

1 単元名 想ぞうしたことをつたえ合おう 「モチモチの木」(東京書籍 3年下)

2 単元について

本教材は、「ペロ出しチョンマ」(斎藤隆介・作 滝平二郎・絵 理論社1967)を底本として、本教科書のために書き下ろされたものである。夜、一人でしょんべんにも行けない豆太が、じさまが病気になったときには半道もの夜の道を一人泣きそうになりながら駆けていき、その結果、灯がついたモチモチの木を目にすることができる様子が描かれている。

本教材の本質は、じさまのために医者様を呼びに行く豆太の行動を境に、豆太に対する語り手の見方が変わるという人物の行動と話の展開が作り出す「人物像の変化」にあると考えた。じさまの腹痛を知った豆太は、じさまが死んでしまうかもしれないという怖さから必死に走ったのであり、豆太自身、勇気を出して怖さに立ち向かったとは思っていない。だからこそ、最後までじさまをしょんべんに起こすのである。それに対して、じさまは、医者様を呼びに行った豆太の行動を「勇気」「優しさ」と価値付け、語り手は、じさまに寄り添って、「弱虫だけどやさしけりゃ」と、豆太の行動を優しさと捉え、第一場面の「おくびょう豆太」からの見方を変容させている。また、語り手の語り口により、読者には共感的に読み取ることができるようになっており、その語り手の豆太への見方を意識しながら読み進めることで、豆太の人物像を深めていくことができる。このことから、中心人物の人物像を想像する学習に適した教材であると考えられる。

3 児童について

子供は、3年「サーカスのライオン」において、中心人物を見付け、その人物がどのような人物かを想像する学習を行ってきた。物語全体を通して中心人物を捉え、その人物に同化したり寄り添ったりしながら心情を読み取ることができたが、その人物がどのような人物なのか、他の場面と関係付けたり、自分の経験と関連付けたりしながら想像を広げていくところまでには至っていない。また、他の登場人物や語り手が中心人物をどのように捉えているのか、他の立場に立って中心人物を捉える読み方を経験していない。

4 単元で育つ・発揮される「言語力」の具体

語り手やじさまの豆太の見方に着目したり、他の場面の叙述と関係付けたりしながら、豆太の人物像を具体的に想像し、互いに伝え合う子供。

5 指導に当たって

本単元では、語り手や他の登場人物の中心人物の見方に着目させながら、叙述を根拠に場面の移り変わりや関係付けて想像したことを伝え合う活動を通して、中心人物への理解を深めていけるようにしたい。

そこで、まず【見通す】段階で、これまでの学習を振り返らせた上で、「モチモチの木の中心人物はどのような人物か」と投げ掛け、学習感想を書かせる。全体で共有する際に、板書で豆太について「臆病」と「勇気」「優しさ」を比較してまとめていくことで、「豆太はどんな男の子か」という学習課題につなげ、人物像を追究していきたいという意欲をもたせていく。また、語り手の存在を理解させ、語り手が中心人物をどう捉えているのかを見ていくことを確認させる。【学ぶ】段階では、豆太の行動や会話、様子が分かる叙述に着目させ、自分の経験と関連付けながら豆太の性格について想像を広げさせる。一つの言葉を手掛かりに、言葉と言葉を比べたり、複数の叙述を結び付けたりしながら具体的にイメージさせていく。また、地の文やじさまの言葉に着目し「語り手やじさまは、豆太のことをどう思っているのか」を考えさせていくことで、語り手やじさまからの豆太への見方を捉えさせる。それを自分の考えと比較をさせることで、豆太の人物像について考えを深めさせる。【生かす・広げる】段階では、文章全体を通して自分が想像した豆太の性格についてまとめさせ、考えを交流させる。他者との交流を通して、自分自身の叙述の解釈を再認識させたり、再構成させたりしていく中で、豆太の人物像を具体的に捉えさせていく。

6 単元の構成

教材	段階	時数	ねらい	主な学習活動	評価の観点			【「言語力」が育つ・発揮される授業づくりにおける留意点】
					知技	思判表	態度	
モチモチの木	見通す	1	これまでに読んだ物語を振り返り、中心人物がどのような人物かを考えることができるようにする。 「モチモチの木」の全文を読み、学習課題を明らかにする。	<ul style="list-style-type: none"> これまで学習した教材文を振り返り、中心人物の変容を捉える。 「モチモチの木」を通読し、感想を書く。 豆太の性格について「臆病」「弱虫」と「優しさ」「勇気」で比較する。 「豆太はどんな男の子か」という学習課題を理解する。 			○	【学習課題】 ○初発の感想において、板書で豆太の性格を「臆病」「弱虫」と「勇気」「優しさ」で分類し比較させることで、単元全体の学習課題「豆太はどのような男の子か」という学習課題を設定する。 (終末で期待する子供の姿) ・しょんべんに行けない臆病な子。 ・じさまに甘えるの甘えん坊な子。 ・医者様を呼びに行く勇気がある子。 ・じさまを助けた優しい子。 ・臆病→勇気→臆病な子。
		2	課題解決に向けた学習計画を立てることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題に迫るため、みんなで考えていきたいことを話し合う。 人物の行動や話した理由を考えたり、語り手が中心人物をどのように捉えているのかを考えたりしながら読み進めていくことを理解する。 			○	
	ぶ	3	「語り手」の叙述から、豆太の臆病さを読み取り、人物の関係や豆太の性格を捉えることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 「語り手」を理解する。 「おくびょう豆太」に着目し、豆太のどのようなところが臆病なのかを読み取る。 豆太を見守るじさまの思いを考える。 豆太はどのような男の子なのかを考えをまとめる。 	○	◎		【発問】 ○語り手は、豆太のどのようなところを「臆病」と言っているのか。 ○じさまは、豆太のことをどう思っているのか。 (終末で期待する子供の姿) ・夜のモチモチの木をお化けだと思い込んで怖がる臆病な子。 ・夜を怖れている子。 ・じさまに愛されていて、じさまのことも大好きな子。
		4	モチモチの木に対する昼と夜の豆太の様子を比較しながら、豆太の様子や性格を捉えることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> モチモチの木に対する豆太の昼と夜の違いを読み取る。 豆太はどのような男の子なのか考えをまとめる。 	○	◎		【発問】 ○昼間と夜、豆太はモチモチの木をどう思っているのか。 ○語り手は豆太をどのように思っているのか。 (終末で期待する子供の姿) ・昼は威張って偉そうだけど、夜になるとモチモチの木を怖がる昼と夜で気持ちの強さが変わる子。 ・モチモチの木のように、いいところもあれば、弱いところもある子。
		5	灯がともるモチモチの木の話の聞いた豆太の様子や行動から、豆太の性格を捉えることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 「モチモチの木に灯がともる」と聞いた時の豆太の気持ちを読み取る。 豆太はなぜ初めから諦めて寝てしまったのか考える。 豆太はどのような男の子なのか考えをまとめる。 	○	◎		【発問】 ○豆太はどのようにして初めから諦めて寝てしまったのか。 (終末で期待する子供の姿) ・自分の弱さを認めている子。 ・怖いことから逃げる子。 ・あきらめの早い子。
		6	医者様を呼びに走る豆太や灯がともっているモチモチの木を見た豆太の気持ちを考え、豆太の性格を捉えることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 医者様を呼びに走る豆太の気持ちを読み取り、何が豆太を走らせたのか考える。 モチモチの木に灯がともっているのを見た豆太の気持ちを考える。 豆太はどのような男の子なのか考えをまとめる。 	○	◎		【発問】 ○何が豆太を走らせたのか。 ○灯がついているモチモチの木を見た豆太はどう思ったか。 (終末で期待する子供の姿) ・じさまのことが大好きな子。 ・じさまのことを助けようと必死になる子。 ・夜は怖いけれど、じさまのために一生懸命頑張る子。
		7	医者様を呼びに走る豆太の様子やじさまの言葉から、じさまの言う「勇気」を読み取り、豆太の性格を捉えることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> じさまの言う「勇気」とはどのようなものか読み取る。 豆太はどのような男の子なのか考えをまとめる。 	○	◎		【発問】 ○じさまの言う「勇気」とはどのようなものか。 (終末で期待する子供の姿) ・弱虫だけど、大好きな人を助けようという優しさがある子。 ・人を思う優しさがあるときには怖くても勇気を出して動ける子。 ・一人でしょんべんには行けないけれど、いざという時には優しさや勇気が出せる子。
	生かす 広げる	8 9	豆太はどのような人物なのか、自分の考えをまとめることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習を振り返り、豆太はどんな男の子なのか、自分の考えをまとめる。 	○	◎		【対話場面】 ○豆太はどのような男の子か、自分の考えをまとめて伝え合おう。 (終末で期待する子供の姿) ・豆太は夜のモチモチの木を怖がって一人でしょんべんにも行けないくらい弱虫で臆病な子だけれど、大事な人のためなら優しさや勇気を出せる強さも持っている子。
		10	学習を振り返り、物語の登場人物について考えを深めることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 豆太の人物像について考えたことを振り返る。 前時にまとめた文章と初発の感想を比べさせ、中心人物に対する理解がどうなったか感想をまとめる。 			○	【発問】 ○最初と最後の感想を比べて、「豆太はどんな男の子か」考えが変わったところを見付けよう。 (終末で期待する子供の姿) ・豆太は臆病だと思っていたけれど、ただ臆病だけではなかった。 ・弱虫や臆病な面もあるけれど、人を助けようという優しさが出る時に勇気も出せる子だった。 ・語り手やじさまの言葉からも豆太がどんな男の子か考えることができた。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

じさまの言葉や医者様を呼びに行く豆太の様子を基に、じさまの言う「勇気」を読み取ることができる。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (//:留意点, ※:評価の観点)
<p>1 本時の学習課題を知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・灯がともるモチモチの木を見た豆太は勇気があると思う。 ・一人でしょんべんに行けないから、勇気があるとは言えないよ。 	<p>1 灯がともったモチモチの木を見た豆太の姿から「豆太には勇気があるのかな」と問い掛け、本時の課題へつなげていく。</p> <p>2 じさまの言葉に着目させながら範読を聞かせ、どのようなところから勇気があると言えるのか考えさせる。</p> <p>3 じさまの言う「勇気」を捉えさせるために、以下のように発問をする。</p>
<p>じさまの言う豆太の勇気とはどのようなものか。</p>		
<p>2 本時の学習場面の範読を聞く。</p>		
<p>(P54L9～P55L8)</p>		
<p>3 じさまの言う勇気を読み取る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で医者様を呼びに行くところ。 ・夜に外に出て行くところ。 ・はだして、痛みに負けずに走って行くところ。 ・半道もあるふもとまで、一人で走って行くところ。 	<p>【発問】 「豆太の勇気が分かるころはどこか」 これまでの学習を振り返り、豆太の行動で勇気を感じるところを挙げさせることで、自分自身の「勇気」の捉えを明らかにさせる。</p>
<p>○豆太の勇気が分かるころはどこか。</p>		
<p>◎じさまの言う勇気とは、どのようなものか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・じさまを助けたいという思いから動くことができる勇気。 ・じさまを助けようという優しさが出た時に出来る勇気。 ・誰かのピンチをなんとかしようとする、いざというときに出る勇気。 ・いつでも出せる勇気ではなくて、人を助けようという優しさが出たときに出来る勇気。 ・しょんべんに行く時は自分のための勇気で、医者様を呼びに行く時は、誰かを助けようという人のための時。人のために思った時に出来る勇気。 	<p>【中心発問】 「じさまの言う勇気とは、どのようなものか」 豆太がじさまをしょんべんに起こす部分に着目させ、「勇気を出せる豆太なのに、じさまをしょんべんに起こすということは、勇気がないのではないか」と揺さぶりをかける。その上で中心発問を投げ掛け、じさまの「やさしささえあればと、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ」という言葉や、しょんべんに行く行動と医者様を呼びに行く行動の違いを考えさせることで、じさまの「勇気」の具体を問い、「勇気」の捉えを深めさせる。</p>
<p>《予想される補助発問》</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・しょんべんに行く勇気と、医者様を呼びに行く勇気は何が違うのか。 ・豆太の勇気はいつでも出せるものか。 ・豆太のやさしさとはどんな姿か。
<p>中心発問を投げ掛けた後、ノートに考えを書かせ、ペアで考えを交流させることで、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付かせたりする。</p>		<p>※ 医者様を呼びに行く豆太の様子やじさまの言葉を基に、じさまの言う「勇気」を読み取ることができたか。(思・判・表;発表・ノート)</p>
<p>3 語り手の豆太への見方の変容を確認し、本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・豆太は一人でしょんべんには行けない弱虫な面はあるけれど、大切な人を助けようとする優しさが出た時には、勇気を出せて行動できる子だと思う。 ・普段は弱虫だけど、いざという時には出せる勇気をもっている子です。 	<p>3 語り手は豆太をどのように見ているのか、見出しに着目させて、語り手の見方を捉えさせる。これまでの学習を振り返り、語り手の見方がじさまに寄り添って変容していることを確認させた後、「あなたは、豆太はどんな男の子だと思うか」を問い、読み取ったことを基に人物像を書かせる。自分自身の捉えを言語化させ、自分の解釈を表出させる。</p>
<p>○あなたは、豆太はどんな男の子だと思うか。</p>		

授業（国語科【言語力】）を振り返って

◇3年3組国語科◇授業者：加藤 千佳

◇単元名「想ぞうしたことをつたえ合おう モチモチの木」

		内容
1	【言語力】 研究の概要について	<p>○研究討議での主な意見 ・質問や意見に対するチームの考え ＊いただいた御指導</p> <p>○自分の中で思考したことを相手に伝えるときに言葉を用いる。どんな相手にどのように伝えるのか、相手意識によって選ぶ言葉も変わってくる。そこで発揮される力が言語力なのではないか。</p> <p>○アウトプットする時にだけ発揮されるのが言語力ではない。自分の中で思考する時にも、言葉を使って考えている。</p> <p>○言葉も生活に結びついている言葉もあれば、知っているだけの言葉もある。言葉のそのものの理解を拡張していくことが大切。</p> <p>○伝える言葉と考えるための言葉は別物ではない。どう伝えるのかを考えることによって、深まっていくこともある。</p> <p>○言葉は、自分の思いを表出するものもあれば、自分の中で使っていくものもある。日常的に使っているものであるからこそ、「考えを深める」姿や「よりよく伝え合う」姿がどのようなものなのか、具体的な姿が分かるようにしたい。</p> <p>・「自分の考えを深める」際に、言葉そのものへの理解も必ず深まっていくと思われる。その上で、相手を意識してどう言葉を使っていくか考えさせていくことを意識させていきたいと考える。</p> <p>○子供が自覚的に言葉を使っていることが大切。実感を伴った理解の上で言葉を使わせたい。子供自身が気付かせるための教師の働き掛けが必要。</p> <p>○各教科で言語力が発揮される場面を考えていくと、教科によって「言葉」の捉えが異なってくる。それでいいのか。</p> <p>・各教科の言葉がどのようなものか捉えることよりも、教科の特質と照らし合わせて使わせていくことに重点を置いていくべきと考える。</p> <p>*各教科で言語力を鍛えるやり方は変わってくる。教科の特性を踏まえながら考えていくことが大切。</p>
	授業について	<p>○本時の学習課題は、子供から出たものなのか、教師から提示するものなのか。子供たち自身が出した学習課題のほうが実感を伴ったものになるのではないか。</p> <p>・子供たちが追究していきたい課題を本時の学習課題に設定することで、主体的な学びにすることができる。しかし毎時間、子供たちに学習課題を設定させていては、読みを深める時間を確保できなかったり、そもそも子供たち自身が考えたいという内容が本時のねらいに合致しなかったりすることもある。そこで物語文における学習では、単元の前半で人物や出来事などのストーリーを中心に読ませ、後半で全文を読み深めていくという構成を工夫する。単元の前半で全文を押さえたうえで、深く考えさせたい内容について考えを出させることで、読み深める課題につながり、主体的に取り組めるようになると考えられる。</p> <p>○授業の導入の段階で、「勇気がない」と言っている子供がいたにも関わらず、「勇気がある」という視点で授業を進めていた点に矛盾を感じた。</p> <p>○子供たちが本当にじさま目線で考えることができていたのか。自分はどう思ったか、読者の立場から離れられない子供もいたのではないのか。誰の立場で考えるのか、その立場に子供をおくことが必要。</p> <p>・「登場人物」「語り手」「作者」「読者」どの立場から考えるのかを明確にさせる必要がある。本時で言えば、「じさま」の立場から豆太を見ることがねらいだったため、最初から「じさま」の豆太の見方を追っていく必要があった。じさまが何を見たのか、じさまの思いを考えさせる発問を入れるべきだった。</p>

	<p>○「勇気」について、実感を伴った理解が難しい。勇気を出す経験が子供たちにどの程度あったのか。</p> <p>○「じさまの勇気とは何か」という発問で、子供たちの「勇気」への解釈が本当に深まったのか。</p> <p>○「勇気がなくなったのでやさしさが出る」という発言があった。勇気の捉えをどうするのか。</p> <p>○じさまは勇気よりも、やさしさが大事だと述べているのではないか。やさしさがすべて勇気につながるわけでもないと思う。</p> <p>・「勇気とは何か」子供たち自身の体験から考えさせることは、道徳の内容になつてしまう。国語としては、本文の叙述からの読み取りで「勇気」を考えさせていかなければならない。どの叙述から何が分かるのか、教材研究を深めていくことが大切である。</p> <p>○子供たちの意見がわれている時こそ、子供たち自身に議論させて授業を進めるとよかつたのではないか。教師の見取りにより、意図的指名で進めていたが、二つの意見がぶつかり合い、自分の思いを伝えようとするので言葉の力が育つのではないか。</p> <p>○子供たちが出した言葉を教師が受け止める、それを大切にしながら授業を組み立てていくことが大事。</p> <p>○教師がねらっている言葉だけでなく、子供の豊かな言葉を拾って授業を組み立てていく必要がある。</p> <p>○教師は、子供たち同士の言葉をつなぎ、子供たちの言葉と叙述を結びつけさせることが大切。本時で言えば、「大事になった時だけで勇気」と捉えた子供の考えを、じさまの言葉の「さえ」や「きっと」と結び付け、さらに豆太の行動と結び付けると、より考えが深まったのではないか。</p> <p>・教師が授業のねらいに迫ることができるように、教師の意図的指名で進めてしまう場面があったが、子供たちが使う言葉を教師がつかない限り、子供たち同士の対話で深めていくことも大切である。</p>
<p>2 研究協力者の先生からの御指導</p>	<p>【研究協力者・宮城教育大学 国語教育講座 児玉忠先生】</p> <p>*付きたい力と教科や教材の特性、言語活動との関連を考えなければならない。</p> <p>*子供の解釈と本文を結び付けることが大切。子供がどこまで結び付けていたのかを見取る必要がある。</p> <p>*今回の授業では、豆太の成長について、道徳的な内容に近づけようとしていけない。</p> <p>*「腹痛が起こった当日、じさまが見たものはなんだろう」と問うことで、じさまの視点に立たせることができる。そうすることで、じさまが豆太をどうとらえているのか、その根拠を明らかにしながら議論ができる。</p> <p>*解釈を交流する3つのポイントについて</p> <p>① 一人一人の解釈の結果の交流</p> <p>② 一人一人の解釈の根拠の交流</p> <p>③ 一人一人の解釈の理由の交流</p> <p>→「モチモチの木」におちて、交流の質を高めるには、「解釈の結果」を選択させたり固定したりして、「解釈の根拠」や「解釈の理由」を交流させてはどうか。</p> <p>*文学は、作者、語り手、登場人物が出てきて、それぞれに役割がある。語り手を扱うことに価値がある。</p> <p>*文学において、単元の前半は徹底的にテキストの中から考えさせ。後半で読みの深まりを踏まえた「考えの形成」と交流をしていく構成にすることで、読みが深まるのではないか。</p>
<p>3 今後の方向性 (研究や授業の改善)</p>	<p>・授業づくりポイントの一つ目である「学習課題や発問の設定」については、教師が一方向的に与える学習課題にならないように、単元構成を工夫することで子供たちが主体的に取り組むことができる学習課題を設定していく。発問については、子供の思考の流れに沿って、言葉に着目して考えを深めていけるようにする。</p> <p>・授業づくりのポイントの二つ目である「対話する場面」については、目的に合わせて子供たち同士の対話が生まれるように教師が意図的に設定していく。その際、教師の思いで進めようとしすぎたり子供の多様な考えを狭めたりしないように気を付けていかなければならない。</p>

チーム研究実践例②

問題解決力

前田かおり (社) 千葉 廣 (社) 遠藤宏紀 (生) 高橋大地 (家) 大村奈央 (家)

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

言語力

問題解決力

活用力

表現力

調整力

問題解決力

<本校で育成を目指す「問題解決力」>

事象を自分事とし、自らのめり込んで問題を解決する力

学校教育目標の具現化を目指すために求められる「問題解決力」は、「事象を自分事とし、自らのめり込んで問題を解決する力」と考えている。「事象を自分事とし」とは、自分から遠く見える事象でも自分に関わりのある部分からアプローチすることで事象を自分事として捉えること、「自らのめり込んで問題を解決する」とは、自分の興味関心に沿って問題解決への見通しをもち、自ら追究プロセスを考え、見直しながら問題解決に向かうことであると押さえている。

本校の子供は、前研究を通して自分事として問題を見いだす力が高まり、学習問題・課題に対して教科特有の方法を生かしながら意欲的に追究している。ただし、事象が自分から遠いものであればあるほど追究意欲が低下する子供の姿も見られる。子供が事象とどのように向き合っているか、授業の事中・事後の姿を大切にすることで、さらに子供の追究意欲を高めることができると考えている。

以上の実態を踏まえて、例えば社会科では資料などの調査、家庭科では生活における実践、生活科では生活の中の気づきを通して多面的・多角的、そして多様に追究していく中で、子供が事象を自分事として捉えて問題を見だし、主体的に解決に向かう姿を6年間で育てていきたいと考えている。

<「問題解決力」が育つ・発揮される授業づくり>

以下の点に留意することで、本校で育成を目指す「問題解決力」が育つ・発揮される授業づくりが実現できると考えている。

・ 教科の本質を捉えながら、子供の興味関心に寄り添った単元・題材の構成

教師は教科や教材の本質を押さえた上で、子供が自らの興味関心に基づいて追究していけるように、子供の思考を事前に想定したり、授業の事中・事後の様子を受けて今後の授業の方向や手立てについて検討したりすることが必要である。

・ 子供自身に学びのプロセスを自覚させる働き掛け

何が分かって何が分かっていないのかをその都度立ち止まって振り返らせることが、より事象を自分事としたり、さらに自らのめり込んで問題を解決したりしていく上で必要だと考えている。発達段階や子供の実態に応じて「どのような方法をとれば問題を解決できそうか」「まだ解決できていないことは何か」などと、自身の問題解決の方法や成果について客観的に振り返らせ、今後の見通しをもたせていくことが大切である。

(前田 かおり)

第2学年1組 生活科学学習指導案

日時 令和2年8月25日(火) 5校時
場所 北駐車場隣接広場(大豆畑)
授業者 遠藤 宏紀

1 単元名 大きくなあれ わたしのやさい ~広がる つながる もくせいファーム~

2 単元・教材について

本単元の主なねらいは、大豆の栽培を通して、大豆の変化や生長の様子に関心をもって働き掛け、生育状況に合った世話の仕方があることや生命をもっていること、生長していることに気付き、大豆への親しみをもち、生き物を大切にすることができるようにすることである。

大豆は、栽培から加工まで様々な事象が起こり、直接体験を通して働き掛けることができるだけでなく、生活圏である地域の環境を生かす発展的な学びへと広げていくことができる素材である。子供は、栽培の中で起こる様々な事象を通して、これまでの栽培経験を想起したり、本や図鑑で調べたりしながら、自分なりの世話の仕方を考えていく。そして、友達考えに触れたり、実際に行動することで見えてきた事実について振り返ったりすることで、次第に大豆の成長や変化の様子に関心をもつようになり、子供自ら継続してかかわることのできる学習活動を設定することができる考えた。

3 児童について

子供は、これまでアサガオ等の栽培活動を通して、栽培や収穫の喜びを味わってきた。つるが伸びて隣の友達のアサガオと絡まるなどした時には、その対策について真剣に考えを出し合い、解決していく姿勢が見られた。このように主体的な活動や体験の充実を通して気付いたことを共有し合い、自ら対象に働き掛けられるようになってきている。しかし、これまで栽培してきたものは比較的育てやすく、子供の働き掛けが少なくても生長するため、親しみをもつまでには至っていない実態も見られた。

4 単元で育つ・発揮される「問題解決力」の具体

大豆の栽培や観察を通して、大豆の生長に働き掛け、大豆の様子とともに自らの働き掛けについて振り返ったり、共有したりする中で、収穫の意欲が高まり、大雨や雑草、虫害の中で大豆をどのように育てるのかを自分なりに見いだしていく。

5 指導に当たって

まず、本単元の【見通す】段階で、「大豆の育ち方」について理解させることで、畑で起こっている事象に気付き、生育状況を比較できるようにする。加えて収穫への思いを高めるために「加工して作りたいもの」を絵で表現し、共有させる。また、給食に出てくる大豆食品について関心をもたせたり、大豆栽培の成長過程や加工した食品を示した掲示をしたりすることで、収穫への期待を膨らませていく。

次に、【学ぶ】段階では、雑草や大雨、虫害等の事象に基づいた世話の必要性に気付かせる。その際、観察や世話で必要とする道具を子供と一緒に準備し、常に使えるように環境を整えておく。自分なりに働き掛け、考えた世話に取り組ませ、自分の世話が有効であったかどうか、事実から実感させていくようにする。どうしても解決できない事象については、生産者と出合わせる機会を設定し、生産者の工夫、努力に触れたり、教えてもらったことを実践しても結果が伴わず、試行錯誤したりする経験を通して、自らの大豆への働き掛けについて見つめ直し、収穫に向けた気付きの質を高めていけるようにする。

最後に、【生かす・広げる】段階では、大豆の栽培活動を通して学んだ成果や過程を歌や絵、劇等で表現することで、これまで世話を続けることのできた自分について振り返り、達成感や満足感を改めて実感させる。また、収穫の喜びを学年全体で共有する機会を設定することで、「加工」への意欲を高めていくとともに、「人」「もの」「こと」とより良い関係を築こうとした自らの成長を自覚できるようにする。

6 単元の構成 (20 時間扱い 本時 13/20)

単元の目標		大豆を栽培する活動を通して、大豆の変化や生長の様子に関心をもって働き掛け、生育状況に合った世話の仕方があることや生命をもっていること、生長していることに気づき、大豆への親しみをもち、生き物を大切にすることができるようにする。	
知識及び技能の基礎		思考力・判断力・表現力等の基礎	
大豆を栽培する活動を通して、生育状況に合った世話の仕方があることや生命をもっていることに気付いている。		大豆を栽培する活動を通して、生育状況や生長の様子に関心をもって働き掛け、世話の仕方を考えたり、様々な方法で共有したりしようとしている。	
学びに向かう力・人間性等		大豆を栽培する活動を通して、大豆への親しみをもち生き物を大切にしようとしている。	
ねらい・評価の観点	時数	主な学習活動	「問題解決力」が育つ・発揮される授業づくりにおける手立て
野さいを そだてよう 【見通す】			
野菜を育てたいという思いをもち、栽培する時期や場所などの条件で分類しながら、育てたい野菜を決めようとするようにする。 【思判表】【主体的に学習に取り組む態度】	2	<ul style="list-style-type: none"> ・動画配信で学んだ視点を生かし、学級で栽培する野菜を決める。 ・絵本の読み聞かせを通して、大豆の育て方を理解する。 ・大豆をどのように加工したいか思いや願いを絵に表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動画配信を踏まえ、学びの連続性を意図的に取り入れた導入。 ・大豆の加工品の掲示。 ・実際に触れることのできる大豆コーナーの常時設置。
野さいのおせわをしよう 【学ぶ】 本時 11/12			
既習や経験を基に、大豆の様子を思い描きながら世話の仕方を考え、生育状況に応じて聞いたり調べたりして世話の仕方を変えていく中で、生育状況に合った世話の仕方があることや生命をもっていることに気付くことができるようにする。 【知技】【思判表】【主体的に学習に取り組む態度】	12	<ul style="list-style-type: none"> ・観察や世話で必要なものについて話し合い、道具等を準備したり、世話の仕方について調べたりする。 ・生育状況の変化に気づき、自分なりに働き掛けて、世話をする。(虫害、長雨等) ・夏休み前までの大豆の成長の様子や世話の様子等をワークシートにまとめる。 ・夏休み後の生育状況の変化に気づき、世話の仕方について考える。 <p>【常時活動】大豆の様子を観察し、必要に応じた世話をする(水やり、間引き等)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆の生育状況の過程を記した掲示。 ・ワークシートやドキュメンテーションを活用した子供の変容や気づきの蓄積。 ・何かを借りたり、もらったりする際に、相手に許可をもらう場の設定。 ・観察や作業しやすい環境の整備。 ・自分の世話や働き掛けを振り返る場の設定。
野さいのようすをつたえよう 【学ぶ】			
大豆の生育がよくなるために必要な世話の仕方について農家さんに聞き、自分なりに働き掛け、世話することができるようにする。 【知技】【思判表】	2	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆の成長を報告したり、必要なお世話について聞いたりする機会を設け、気付いたことをワークシートにかく。 ・教えてもらった世話を実行する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドキュメンテーションやワークシートの作成・活用した変容や気づきの蓄積。 ・ゲストティーチャーとの授業連携や状況を伝えるための表現方法の工夫。
野さいをしゅうかくしよう 【生かす 広げる】			
生命を育てることのよさを実感し、継続的に大豆と関わろうとすることができるようにする。 【主体的に学習に取り組む態度】	4	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで大豆の活動を振り返り、劇や歌、サイト等に表現し、友達とこれまでの活動や収穫の喜びを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉、作文、劇、サイト等の子供の思いや願いに寄り添った発信方法の確保。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

観察を通して、生長に対してより関心をもち、これから大豆が元気よく育つために必要な働き掛けについて気付くことができるようにする。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿 (学習の進捗点・課題)	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 大豆の生育状態を観察し、問題に気付かせる。</p> <p>○観察をして気付いたことはありますか。</p> <p>2 本時の学習課題を知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・花がたくさん咲いたね。 ・先生が世話したから、元気に生長した感じがするよ。 ・やっぱり虫食いがあって、葉に虫が付いているね。 ・雑草が伸びてきたな。 	<p>1 夏休み前との生育状態を比較しやすいように、教師に頼んだ世話の観点(畝を高くすること/葉を取ること/間引きをすること)を振り返るとともに、これまでの生育過程のドキュメンテーションを掲示することで、観察の気付きを促すようにする。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>どうしたら大豆は (さらに) 元気になるのかな。</p> </div>		
<p>3 自分が工夫したいことについて取り組む。</p> <p>○大豆を (さらに) 元気にするために、みんなができることは何でしょうか。</p>	<p>【虫食い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葉っぱに付いている虫を手で取ってあげよう。もしかして殺虫剤で一気に虫を追い払うことも必要かもしれないな。 <p>【土 (硬さ/畝の高さ/雨対策)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・土が硬いし、まだ畝が低いから柔らかい土を入れよう。 <p>【雑草】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雑草があると、栄養の取り合いにもなってしまうから、草取りをしよう。 	<p>3 事前までの見取りから、子供が主に虫食い、土、雑草に対して、世話している実態を把握しているため、子供が考えている世話が実行できる道具や場設を整えておく。また、同じ道具を使っている、使い方や目的の違う子供たちに着目し、「どちらの方法がいいの?」と聞いたり、「この世話で本当に元気になるのかな?」と揺さぶりをかけて問いをもたせたりしながら、子供がどのような根拠をもって世話をしているのかを見取るようにする。</p>
<p>4 大豆が元気に育つために、必要なことについて共有する。</p> <p>◎これから大豆をもつと元気よく育てるために、あなたが一番困っていることや知りたいことは何ですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水やりは上からかけた方が良いでしょう。<u>葉っぱにかけないといけませんから。</u> ・いや、下にかけるべきだよ。<u>根っこから水を吸収するんだよ。</u> ・虫食いをなくすために、虫除けスプレーをかけないといけないよ。<u>スプレーよりも虫食いの方が大豆にとって悪いはず。</u> ・いや、だめだよ。<u>薬の方が大豆の生長に良くないに決まっています。</u> ・<u>図鑑やインターネットで調べたり、それか農家さんに聞いたりするしかないと思うよ。</u> ・間引きの方法について聞きたいなあ。<u>本当はどのくらいの間隔ですれば良いのだろう。</u> ・実は、他にも聞いてみたいことがあるよ。 	<p>4 3の子供の見取りから、同じ世話をしながらも道具の使い方が違う子供たちを取り上げて方法を比較させる。</p> <p>また、子供たちが最も興味を示している虫害の対応について話し合ったりすることを通して、自分たちだけで判断することができないことに気付かせ、解決方法の一つとして、生産者(人)の存在を引き出せるようにする。</p> <p>全体での対話の中で、子供自身が一番知りたいことや困っていることを整理させる。「生産者に聞きたいこと」について話し合わせることで、これまでの栽培の過程で起こった事象や経験を振り返りながら、より切実感や根拠をもって発言できるようにする。</p> <p>※ 大豆が元気よく育つために必要な働き掛けについて気付くことができたか。 (愚・判・表:発表, ワークシート)</p>

授業（生活科【問題解決力】）を振り返って

◇2年1組生活科◇授業者：遠藤 宏紀

◇単元名「大きくなあれ わたしのやさい」

		内 容
1	【問題解決力】 研究の概要について	<p>○研究討議での主な意見 ・質問や意見に対するチームの考え ＊いただいた御指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ○6年間で問題解決力を育てていくとき、子供が解決の見通しをもてない場合にどのような手立てを講じるかは発達段階ごとに違いがある。本校における問題解決力の段階を示せるとよい。 ○これまでは問題解決におけるプロセスや段階、解決方法を考えることに重きを置き、問題を捉える部分が不十分であった。そういった意味でも、育みたい問題解決力として問題を自分事に捉えるところに焦点を当てているところは共感できる。特に、「のめり込んで」の文言には納得である。 ・研究の方向性は間違っていないと確認できた。今後は、問題解決力について、発達段階における整理を進めていきたい。 ○問題を捉える部分に難しさがある。問題を「自分事」にするための手立てが大切になってくる。自分事とは、「何かを身に付けたい」という意欲、「何ができる、できない」の把握であると思う。そこを意識付けるための手立てがもう少し必要。 ・最初に「自分事」にしてから問題を解決することもあるが、問題を解決していくうちに自分事になるものもあると思う。子供の興味・関心は学習を進めるにつれて変容したり深まったりすると思う。問題を自分事にする手立てを導入だけでなく事中にも見えるように考えていきたい。
	授業について	<ul style="list-style-type: none"> ○子供が大豆との関わりを「自分事」にするために、授業者にできることを広い視野で考える必要があるのではないか。 ・発達段階に合わせた見通しの持たせ方の工夫が必要であった。例えば、子供の切実感を引き出すために、大豆を一人一株にして責任感を持たせる等の場を設定したり、生産者の存在を教え、課題解決のための交流の機会増やしたりすることで、目の前で起こっている事象がより自分事として捉えるようになり、更に大豆に働き掛けることで、問題を発見する力が育まれると考えられる。 ○子供の課題意識と授業者（大人）の課題意識の乖離が見られたのではないかと。 ・「土がかたい！」と子供たちがのめり込み、土のかたさを解決しようと協働的な活動に取り組んでいたのにも関わらず、「水は上からかける？下からかける？」と教師が問い掛けたことで、のめり込む子供の姿が引いてしまった。事後の検討から本時を想定するだけでなく、事中の具体的な子供の姿を見取り、課題設定を的確にしたり、問いを持たせたりしていくことで、個の課題を学級全体の課題として共有させ、協働的に追究していくことが重要であった。 ○生活科の「本質に迫る授業」の中で問題解決力を育てることを忘れない。 ・土はどれだけかたいのか、水のかけ方の違いで枝葉の様子は変わるのか、五感を使った気付きを促す必要があった。子供がもっていた課題意識は土がかたいことであり、土をやわらかくしたいという思いが強い子は最後までやり続けており、単元を通して自分の知りたいことを追究しながら、学級全体の課題として共有していけるようにしていく必要があった。 ○観察の際に、ブルーシートにある道具を取りに走る子供の姿に違和感があった。また、せっかく大豆畑で授業しているのに、離れて話し合いする姿にも違和感があったのではないかと。 ・熱中症予防の観点もあり、テントでの話し合いになってしまったが、大豆を囲んで話し合わせ、「土がさらさらだ！」という気付きを促すことができたはずである。課題解決することがねらいではなく、「どうした

	<p>い」という「自分事」に事象を引き寄せる課題解決のプロセスの前段階の「働き掛け」をもっとやっていくことで、課題発見能力にもつながることが分かった。</p>
<p>2 研究協力者の 先生からの御指導</p>	<p>【研究協力者・宮城教育大学教職大学院：吉村 敏之先生】 *遠藤先生が意図した進み方とは違ったが、子供は確実にのめり込んだ姿があった。そもそも問題に値するのか。小林秀雄は、問題を作ることを鍛えた。「天皇とどう付き合えばいいか」と考えた学生に「切実感がないからこんな問いを立てるんだ」と言った。「考える」というのは、「対象と真剣に向かい合うこと」「土が硬いからなんとかしなないといけない」という思い、ものを育てるときに比較が大事になる。植物の育て方には正解がある。校長先生の大豆は茎が太い→土の質が違うことに気付いた子供たちが本質である。</p> <p>【研究協力者・宮城教育大学教職大学院：齊藤 千映美先生】 *生き物を教材とする観点から、動植物の飼育栽培は特殊であり、取り返しが付かない。何度も繰り返せない。一連の流れの中でしかできない。ゴールに向かって進んでいかなければならない。正解がある中で試行錯誤していく必要がある。授業は場の整備から始まる。クラスごとに分かれていると良かった。中に入っていけないことも気になった。予想外のところが多かったため、先生も手探りだったが、子供たちは頑張っていた。</p> <p>土が硬いのは問題なのか。どうして土が硬いとだめなのか。本当に問題があったのか。問題を解決するにはどうすればいいのか。最後に結論として水が上げられなかった。早く専門家に来てもらうべき。話を聞く中で、自分たちの大豆はこれでいいのか、と考えることができるようになるはずである。</p> <p>【研究協力者・宮城教育大学 学校教育講座：本田 伊克先生】 *一つの授業の事実在即して深い議論がなされていた。問題というのは何なのか、子供同士、子供と教師の相互作用で問題が見つかることもある。問題をそれぞれがどう見だし、どう変わっていくか。問題発見も大事。チームの垣根を越えて、自分のチームと関連づけて考えてくのが大事。生活科の本質...気付かせる。子供が知りたいことに対しては答えを与えていいのではないか。</p>
<p>3 今後の方向性 (研究や授業の改善)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な事象に働き掛け、解決しようと、のめり込んで活動する具体的な子供の姿を事前、事中、事後などでの的確に見取ることで、子供の興味・関心に寄り添った単元・題材の構成が可能になる。子供の姿を適切に見取り、授業に生かしていけるよう、教師の子供を見る目も育てていきたい。 ・子供たちの思考に沿った課題設定を行ったり、問いを持たせたりすることで、協働的な学びへと発展させていきたい。

チーム研究実践例③

【チーム研究の概要】

活用力

三井雅視(算) 玉手英敬(算) 平井孝(算) 渡部智喜(理) 吉田航也(理) 上杉泰貴(GS) 新田佳忠(GS)

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

言語力

問題解決力

活用力

表現力

調整力

<本校で育成を目指す「活用力」>

経験や既習などを生かしながら、学びを連続させる力

本校では、「活用力」の育成を通して迫る「たくましく、しかも、しなやかな子供」の姿を次のように考える。

これまでの経験や既習内容、各教科等の見方・考え方を多面的に働かせながら、問題や課題を見いだしたり、解決したりしようとする子供

また、算数科、理科、CS科における「活用力」が生まれ、発揮された子供の姿は、次の通りである。

算数科	何か一つのこと分かったなら、その仕組みや既習内容とのつながりを明らかにしながら新たな問題を見だし、既習内容を基に問いを追究することで、新たな知識や技能を創り出す子供。
理科	生活に見られる事象を科学的に見たり考えたりすることで問題を見だし、これまでの生活経験や既習内容を基に予想を立てたり、解決方法を立案したりするなど、科学的手続きを経て問題を解決しようとする子供。
CS科	コンピュータを用いた活動や生活の中から課題を見だし、情報の科学的な理解を基に事象を捉え直すことで、生活を見つめ直したり、コンピュータやプログラミングを問題解決の選択肢にしたりすることができる子供。

<「活用力」が育つ・発揮される授業づくり>

上述の子供の姿を目指すために、次の点に留意する。

- 問題や課題を見いださせるために、生活経験や既存の知識・技能と事象とのずれを生じさせたり、友達と自分の考えが異なることに気付かせたりすること。
- 問題や課題の解決に向けて、生活経験や既存の知識・技能を基に、自分の考えをもたせるために、問題や課題の解決に向けたプロセスの振り返りを行い、思考の変容を自覚させること。
- 問題や課題を解決させる際、例えば、理科では「実証性・再現性・客観性」など、教科の本質的な学びの観点の基で、個々の思考を交流させること。

活用力

(渡部 智喜)

第2学年3組 算数科学習指導案

日時 令和2年10月7日(水) 4校時

場所 多目的教室3

授業者 平井 孝

1 単元名 たし算とひき算のひっ算(東京書籍 2年)

2 単元について

本単元は、十進位取り記数法による数の表し方や、数を十や百などを単位として数の大きさを捉える数の相対的な大きさについての理解の上に、既習の筆算の学習に帰着して、数範囲を3位数まで拡張した筆算の仕方について考えていく。

本単元の本質は、数範囲を3位数まで広げた新たな筆算の問題に対し、既習の十進位取り記数法による数の仕組みや、十の位への繰り上がりや十の位からの繰り下がりの仕組みに着目し、既習の筆算と同じものとして捉えて解決していく、問題解決過程の遂行にあると考えた。

3 児童について

子供は、「たし算のひっ算」、「ひき算のひっ算」では、2位数の加減の筆算について、10のまとまりの個数と端数という数の仕組みに着目することで、既習の1位数の計算に着目して考えることができ、その考えを基にして筆算ができることを学習した。「3けたの数」では、1000までの数についての数の仕組みの理解を深めるとともに算数ブロックや数カード、模擬貨幣などを使って数の相対的な大きさについて学習してきた。また、「長さのたんい」では、長さの計算で「cmの位」「mmの位」と考えて、筆算形式にして計算したり、「水のかさのたんい」の大きなかさを表す単位について調べる学習では、「長さと同じようにdlを10こ集めて大きいかさを作る」と予想したりするなど、既習を生かして問題を解決しようとする姿も見られている。一方で、「なぜそのように考えることができるのか」について既習と関連付けて論理的に説明できる子供は少ない。

4 本単元における「活用力」が育まれ、発揮される子供の姿

違いを明確にした新たな問題に対し、既習内容とのつながりを明らかにすることで、これまでの問題と同じものとして捉え、数範囲を広げた筆算の仕方を創り出そうとする子供。

5 指導に当たって

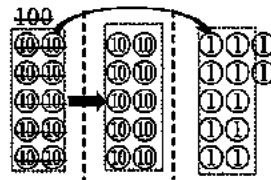
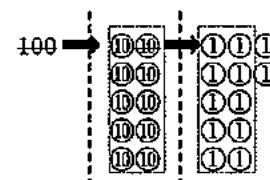
そこで、本単元では、子供が活用力を育み、発揮していけるために「既習との違いを明確にする姿」「既習と同じものとして捉える姿」を問題解決過程でいかに引き出していかんかということに重点を置いて指導していく。百の位への繰り上がりでは、子供が既習の「一の位の計算が10を超えたら十の位に1繰り上げる」という学習から、「十の位の計算が10を超えたら百の位へ1繰り上げる」と類推することが予想される。既習を活用して新たな問題を解決しようとする姿を認めながらも、「そうしてよいのはなぜか」「そうしようと思ったのはなぜか」と考えの根拠や意図を考えさせる。数カードの図と関連させながら繰り上がりの仕組みを考えることで、「10を超えたら1繰り上げる」という考えはどの位でも同じであり、繰り上がりについて「10個まとまったら一つ大きい位に1繰り上げる」と捉え直す。また、百の位から十の位への繰り下がりでは、「十の位から1繰り下げて、被減数に10足す」という既習と、前時までの繰り上がりの学習の経験から類推し、「百の位から1繰り下げて、被減数に10足せばよいのではないか」と考えられるようにしたい。そして、図と関連付けて考えることで、繰り下がりの仕組みはどの位でも同じであることを捉えさせていく。数範囲が広がった筆算の問題でも、繰り上がりや繰り下がりの仕組みが同じであることから、既習の筆算の学習と同じものとして捉え、既習を活用しながら問題解決していこうとする姿に焦点を置いて、本時の振り返りやまとめとして授業の中で価値付けていく。

6 本時の学習

(1) 本時のねらい

波及的な繰り下がりについて、繰り下がりの仕組みに着目することで、既習の繰り下がりの筆算と同じものとして、図と関連付けながら捉えることができる。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿 (大字下線は「活用力」が発揮される姿)	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 問題場面と出会う。</p> <p>ひっ算で計算しましょう。 ① 112 ② 102 $\underline{-65}$ $\underline{-65}$</p>	<ul style="list-style-type: none"> ②も①と同じように筆算できるかな。 十の位が0だから隣の位から繰り下げられない。 百の位から繰り下げられないのかな。 	<p>二つの問題を段階的に提示することで、既習とは異なり、②の問題の十の位が空位であることに着目させる。十の位が0であることから、このままでは十の位から一の位に繰り下げられないことに気付かせる。「どうすれば筆算で計算できるのか」と問い、学習課題を捉えさせる。</p>
<p>2 学習課題を捉える。</p> <p>十の位が0のときのひっ算のし方を考えよう。</p>		<p>自己解決では、百の位から一の位へどのように繰り下げているのか(数を移動させているのか)に着目して子供の考えを見取るようにする。</p>
<p>3 解決の見通しをもち、自己解決する。</p>		<p>既習の繰り下がりの問題では、被減数に10を足して計算していたことから、十の位の計算を10-6とし、答えを47とする考えが予想される。既習を活用しようとした姿を価値付けるとともに、この考えの妥当性について考えさせる。その際、検算、引き算のきまりや、図と関連付けた話合いを通して、既習の繰り下がりの仕組みを根拠に十の位の計算について考えさせていく。</p>
<p>ア. 一の位へのみ繰り下げた</p> $\begin{array}{r} 10 \\ 102 \\ \underline{-65} \\ 7 \end{array}$	<p>イ. 一と十の位へ繰り下げたが、十の位の数を10として計算した</p> $\begin{array}{r} 1010 \\ 102 \\ \underline{-65} \\ 47 \end{array}$	<p>ウ. 波及的に繰り下げた</p> $\begin{array}{r} 9 \\ 1010 \\ 102 \\ \underline{-65} \\ 37 \end{array}$
<p>4 互いの考えを発表し、話し合う。</p>		<p>最初に十の位へ繰り下げた考えでは「なぜ、まず十の位へ繰り下げようと思ったのか」と問い掛け、「これまでも繰り下げるときは隣の位だったから」「十の位に繰り下げれば、これまでと同じように計算できると思ったから」といった既習の繰り下がりの問題と同じ状況を作り出そうとした考え方を引き出し、板書にそれらを残して価値付けていく。</p>
 <p>【イ. 十の位の数を10として計算した】</p>	 <p>【ウ. 波及的な繰り下がり】</p>	<p>板書を基に、同じものとして捉えようとした子供たちの姿を振り返り、「今日の学習を使えば、次にどのようなことができるか」を問い掛ける。本時の学びが今後の学びに繋がるように、振り返りの場を設定する。</p>
<p>5 本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 繰り下げるときは、これまでも一つ大きい位から10もらってきた。 百の位からの繰り下がりには、十の位にしかしたことがなかったから、まず、十の位に繰り下げた。 一の位の計算ができないときは、十の位からしか借りたことがなかったから、まず十の位へ繰り下げようと思った。 十の位へ繰り下げれば、これまでと同じように十の位から一の位へ繰り下げて計算することができると思った。 いつも隣の位から繰り下げている、一つのまとまりが10個にばらけることは同じだね。 十の位や百の位が「0」になっている問題でもできるよ。 	<p>※波及的な繰り下がりについて、繰り下がりの仕組みに着目することで、既習の繰り下がりの筆算と同じものとして、図と関連付けながら捉えることができたか。(思・判・表：発表、ノート)</p>

活
用
力

6 単元について

単元名「ひっ算のしかたを考えよう」(6/10時間)

<単元の目標>	既習の筆算を基に、数範囲を3位数まで広げた加法及びその逆の減法の筆算の仕方について理解し、筆算の仕方を図や式を用いて考える力を養うとともに、計算方法を数学的表現を用いて考えた過程を振り返り、そのよきに気づき今後の生活や学習に活用しようとする態度を養う。
(1) 知識及び技能	2位数の加法及びその逆の減法の計算について、1位数などの基本的な計算を基にできることを知り、それらの筆算の仕方について理解し、筆算の手順を基に確実に計算することができる。
(2) 思考力・判断力・表現力等	既習の筆算を基に、数の仕組みに着目し、2位数の加法及びその逆の減法の筆算の仕方を、図や式などを用いて考え表現している。
(3) 学びに向かう力・人間性等	2, 3位数の加減の筆算の仕方について、図や式などを用いて考えた過程や結果を振り返り、数理的な処理のよきに気づき今後の生活や学習に活用しようとしている。

時	主なねらい	評価規準	活用力が育つ・発揮される授業づくりにおける手立て
1	・10のまとまりが10個できたら一つ大きいくらいである百の位へ1繰り上げるといふ、十の位から百の位への繰り上がりの仕組みを捉えたとともに、2位数+2位数=3位数(百の位への繰り上がりあり)の筆算ができる。	【態度】既習の加法との違いをとらえ、既習の筆算の仕方に基づき、2位数+2位数=3位数(百の位への繰り上がりあり)の筆算の仕方を考えようとしていたか。【発表・ノート】	既習との違いが明確になった問題を同じものとして捉えたり、捉えようとしたりする精神こそ、活用力が育ち、発揮される姿であると捉えた。本単元では授業づくりにおける手立てとして以下の三つに重点を置く。
2	・一の位から十の位への繰り上がり、十の位から百の位への繰り上がりの仕組みを同じものとして捉え、2位数+2位数=3位数(十、百の位への繰り上がりあり)や、2位数+1, 2位数=3位数(百の位への波及的繰り上がりあり)の筆算の仕方を説明することができる。	【思判表】一の位から十の位への繰り上がり、十の位から百の位への繰り上がり、図と関連付けながら比較することで、位が変わっても繰り上がりの仕組みは同じであることを捉えることができたか。【発表・ノート】	○既習との違いを明確に捉えられるようにするために問題提示の仕方を工夫する。【問題提示の工夫】
3	・学習内容を適用して問題を解決する。	【知技】既習を基に問題を解決することができたか。【発表・ノート】	
4	・十の位の計算ができない場合は、一つ大きい位の百の位から、一つ小さい位の十の位へ1繰り下げるといふ、繰り下がりの仕組みを捉えたとともに、3位数-2位数(百の位からの繰り下がりあり)の筆算ができる。	【態度】既習の減法との違いをとらえ、既習の筆算の仕方に基づき、3位数-2位数(百の位からの繰り下がりあり)の筆算の仕方を考えようとしていたか。【発表・ノート】	○新しい問題でも、既習と同じものとして捉えようとする精神を育てていくために、同じものとして捉えようとした問題解決の姿に焦点化し、本時の振り返りや、まとめとして授業の中で価値付けしていく。【振り返りとまとめの工夫】
5	・百の位から十の位への繰り下がり、十の位から一の位への繰り下がりの仕組みを同じものとして捉え、3位数-2位数(十、百の位からの繰り下がりあり)の筆算の仕方を説明することができる。	【思判表】十の位から一の位への繰り下がり、百の位から十の位への繰り下がり、図と関連付けながら比較することで、位が変わっても繰り下がりの仕組みは同じであることを捉えることができたか。【発表・ノート】	
6 (本時)	・一つ大きい位(十の位)から直接繰り下げてくることができない場合でも、二つ大きい位である百の位から十の位へ、更に十の位から一の位へと、一つずつ小さい位へ繰り下げてくれば、これまでと同じような繰り下がりのある筆算として計算できることを捉え、3位数-1, 2位数(十、百の位からの波及的繰り下がりあり)の筆算の仕方を説明することができる。	【思判表】波及的な繰り下がりについて、繰り下がりの仕組みに着目することで、既習の繰り下がりの筆算と同じものとして、図と関連付けながら捉えることができたか。【発表・ノート】	○百の位への繰り上がりや、百の位からの繰り下がりの仕組みが、十の位への繰り上がりや、十の位からの繰り下がりの仕組みと同じであると捉えられるように、図を用いた表現と関連付けながら問題解決していけるようにする。【表現の関連付け】
7	・学習内容を適用して問題を解決する。	【知技】既習を基に問題を解決することができたか。【発表・ノート】	
8	・数範囲が広がっても筆算の繰り上がり、繰り下がりの仕組みは同じであることを捉え、3位数+1, 2位数(百の位への繰り上がりなし)や3位数-1, 2位数(百の位からの繰り下がりなし)の筆算の仕方を理解し、その計算ができる。	【思判表】数範囲が広がっても筆算の繰り上がり、繰り下がりの仕組みは同じであることを捉え、筆算の仕方を理解し、計算できたか。【発表・ノート】	
9			
10	・学習内容の定着を確認するとともに、繰り上がりと繰り下がりの仕組みに着目し、数が変わっても同じものとして捉えて問題解決していく態度を振り返り価値づける。	【態度】単元の学習を振り返り、価値づけたり、今後の学習に生かそうとしたりしていたか。【発表・ノート】	

授業（算数科【活用力】）を振り返って

◇ 2年3組算数科◇ 授業者：平井 孝

◇ 単元名 「たし算とひき算のひっ算」

		内 容
		○研究討議での主な意見 ・質問や意見に対するチームの考え ＊いただいた御指導
1	【活用力】 研究の概要について	<p>○本校で育成を目指す「活用力」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目指す子供の姿に関して納得できた。 <p>○「活用力」が育つ・発揮される授業づくりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ただ振り返りだけ行えばよいわけではなく、それぞれ育成を図る資質・能力に即した振り返りがあるとよい。活用力がさらに育まれる振り返りの在り方が今後明らかになるとよい。 ・事活用していく姿が見られた。既習事項と生活経験だけではなく、時中にもあるのでは。 ・どのような姿が「生かしている」姿と言えるのかが不明瞭である。
	授業について	<p>○子供が活用できた場面を授業者が見取って価値付けることこそ大切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業者の見取る力が重要であった。子供が無自覚的に活用している姿を授業者が「活用している」と捉え価値付けていければよかったが不十分であった。 ・「活用している」ことを自覚させるためにも、「なぜそうしようと思ったのか」と発想の意図を問い掛けていく発問が大切になると考えていたが、適切なタイミングで問い返すことができなかった。 <p>○算数の本質に迫る授業を通して「活用力」を育てていくべき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「活用力」ありきで授業を考えるのではなく、算数の本質に迫る授業を大切にしていくなかで、「活用力」を育てていくべきであり、育てていくはずだと考えている。問題解決過程での子供の素直な考えや発想の中に「活用している」姿を見取る必要がある。子供の素直な姿にいかに向き合っていくかが今後も課題である。
2	研究協力者の 先生からの御指導	<p>【研究協力者 宮城教育大学 算数教育講座・市川 啓 先生】</p> <ul style="list-style-type: none"> *算数科における「数学的な見方・考え方」を働かせると、単に筆算の仕方を教えるだけに留まらないことが大切。 *根拠を基に発展的に考えることが算数では大切であり、筆算における根拠（原理・原則）は何が分かっているなければ発展的なことはできない。 *本時の問題を出す前に被減数が10大きいものを出す。新たな文脈で知識を活用するとき、結果の妥当性を自分で吟味できるとよい。答えは37でよいのか、自分で確かめられる数値設定にしていた。 *本時の授業では、位取り記数法の原理を活用して計算の仕方を考え出すことができた。形式化は教師の手を借りなければならないこと。形式化された知識を崩して活用させることが大切になってくる。
3	今後の方向性 (研究や授業の改善)	<ul style="list-style-type: none"> ・算数の本質に迫る授業の中では、問題を解決する子供たちの素直な考えや発想に「活用力」は発揮されている。それを授業者が瞬時に見取り、価値付けていくことで、無自覚的に活用していたものが自覚的になっていくと考える。そのためにも、授業者が子供たちのどのような姿や言葉を活用していると捉えるのかを明確にする必要があるとともに、子供たちの素直な考えや発想の中に「活用している姿」を見取る力を付けていく必要がある。 ・「根拠を基に発展的に考えることが算数では大切であり、筆算における根拠（原理・原則）は何が分かっているなければ発展的なことはできない」と御指導いただいたように、子供が問題解決するために根拠（原理・原則）にできるものは何かを授業者が十分に把握しておくことが必要であり、日々の教材研究を大切にしていく。

チーム研究実践例④

【チーム研究の概要】

表現力

黒田栄彦 (体) 本郷真哉 (体) 早坂英里子 (音) 宮澤莉奈 (音) 奈須野かなえ (図) 日野暢 (図)

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

言語力

問題解決力

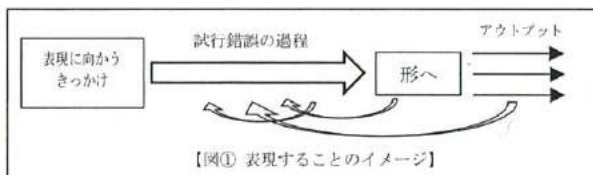
活用力

表現力

調整力

＜本校で育成を目指す「表現力」＞

自分の思いや考えをよりよく表す力



表現という言葉からアウトプットの場面に着目されることが多いが、図①のようにアウトプットするまでの場面も含めて本校では表現として捉えている。

「表現に向かうきっかけ」「試行錯誤」「形へ」「アウトプット」それぞれの要素に十分に子供が取り組めることで、自分の思いや考えを自分の成果物としても、他者に向けてよりよく表すこともできると考えている。このように、上記の4つの要素を中心に、表現力を育成することで、次のような子供を目指す。

「たくましさ」＝自分の思いや考えを形にするために試行錯誤を繰り返すことに立ち向かう子供

「しなやかさ」＝多様な考え方や方法を受け入れて、よりよい表現方法を柔軟に思考できる子供

《各教科等の具体的な姿》

《体育科》

自分の動きを運動の特性と照らし合わせながら練習に取り組み、理想の動きを体現している子供

《音楽科》

音楽を構成する要素に着目して様々な表し方を試す中で、音を通して考えて伝えたり、聴き合ったりしながら思いを膨らませ、その思いにあった表し方を見出そうとする子供

《図画工作科》

「描きたい」や「作りたい」という思いを形にするために、自分が納得いくまで形や色などにこだわったり、他者や造形物などのよさを味わって作品づくりに生かしたりする子供

＜「表現力」が育つ・発揮される授業づくり＞

以下の点に留意することで、本校で育成を目指す「表現力」が育つ・発揮される授業づくりが実現できると考えている。

◎意欲をもたせ、「表現に向けたきっかけ」を作るための導入

「自分たちでも取り組めそうだ」「面白そうだ」と意欲をもたせるために、本時や単元で行うことへの見通しのもとせ方や子供との出合わせ方を模索していく。

◎目的に沿った「試行錯誤」ができる環境作り

思いや考えを学びに沿って形にし、アウトプットできるように、試行錯誤させる観点の示し方や多様な考え方や方法を受け入れ、よりよい表現方法を探る場の作り方を模索していく。

(黒田 栄彦)

第2学年4組 音楽科学習指導案

日 時 令和2年9月28日(月) 3校時
場 所 多目的教室3
授業者 早坂 英里子

1 題材名 ようすをおもいうかべよう (教育芸術社 2年)

2 題材について

本題材は、歌詞や音楽が表す様子を想像し、曲に合った歌い方や演奏の仕方を工夫したり、音楽の表す様子の変化を感じ取って聴いたりすることが主なねらいである。

本題材の本質は、子供たちにとって親しみのある動物や情景が表された曲を扱い、楽しみながら音楽と関わる中で、歌詞や音楽から様子を思い浮かべ、曲に合った歌い方や演奏の仕方について思いをもって表現の工夫を考えたり、曲の楽しさを見いだしながら聴いたりできることにあると考えた。

3 児童について

2年題材「ドレミであそぼう」の中で扱った「ぶっかりくじら」では、雲の様子を表した歌詞の違いに自ら着目し、「ぶっかり」の強弱を変えて歌いたいと考えた児童がいた。このように歌詞を基に歌い方を工夫しようとする力が身に付いている児童がいる一方、どの曲でも同じように元気いっぱい歌おうとする児童も多くいる。また、表現の工夫の幅についても強弱の工夫に留まっている児童も多い。

4 題材で育つ・発揮される「表現力」の具体

歌詞や音楽に表された情景や動物の様子、気持ちに合った声の音色や強弱、速度などを考えながら試す中で、「このように歌いたい、演奏したい」という思いに合った表し方を見いだす力

5 指導に当たって

【第1次】では、『あのね、のねずみは』を教材とし、動物の様子がより伝わるようにするための歌い方の工夫を考えさせる。工夫する箇所を自分で選択させることで、工夫したいという思いを引き出し、その思いを持続させながら学習に取り組ませる。声は強弱以外に音色でも工夫ができることを示し、どう歌ったらよいかについて思いをもたせながら色々な歌い方を試させる。歌い方を変えることで歌詞の様子をより表せること、そしてその面白さを感じ取らせる。【第2次】では、『たまごのからをつけたひななどのバレエ』を教材とし、曲の表す様子が途中で変化することを感じ取らせ、その変化の楽しさを感じながら聴くことができるようにしていく。そのために、ひな鳥の踊る様子を想像させ、曲に合わせて体を動かしながら聴かせることで、曲想と音色、旋律の反復や変化との関わりに気付かせていく。【第3次】では、『夕やけこやけ』を教材として、夕方の家への帰り道の様子が表された1番と、帰宅した後、時間が経ち、月や星が夜空に輝く様子が表された2番の情景との違いが伝わるような歌い方を考えさせる。情景が想像できるそれぞれの場面を写真で見せ、声の音色や旋律、速度、強弱を考えながら試させることで、情景に合った歌い方になるよう聴き合いながら考えを交流させていく。【第4次】では、『小ぎつね』を教材として、1～3番の小ぎつねの気持ちを想像させ、それぞれの場面での気持ちが伝わるような表現を考えさせる。また、鍵盤ハーモニカでも演奏させることで、歌唱表現で明確になった考えを器楽表現にも活用させる。曲の特徴を生かした表現にするための工夫について、これまでの学習を振り返らせ、どの要素をどのように工夫して表現するかを総合的に考えさせ、自分なりの思いを明確にもたせながら表現させる。これらの学習を通して、歌詞や音楽が表す様子を想像し、曲に合った歌い方や演奏の仕方を工夫したり、音楽の表す様子の変化を感じ取って聴いたりすることをねらっていく。

6 題材の構成

段階	時間	ねらい	教材名 (領域) 主な共通事項	主な学習活動	評価の観点			表現力」が育つ・発揮される 授業づくりにおける手立て
					知・技	思 判 表	態 度	
第一次	1 (本時)	歌詞の表す様子や旋律のリズムの特徴に合った声の音色や表現の仕方を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつことができる。	あのね、 のねずみは (歌唱) 音色、リズム	歌詞の表す感じや旋律のリズムの特徴を感じ取り、声の音色やリズムの特徴を生かした歌い方を工夫して歌う。		○	○	歌詞の様子を想像させながら、声の音色やリズムを基に、様々な歌い方を試させることで、歌い方を変えると、より歌詞の感じを表せることに気付かせる。
	2	音色や旋律、強弱、速度などを聴き取り、ひな鳥の様子との関わりについて考え、曲の楽しさを見いだして聴くことができる。	たまごのから をつけたひな どりのパレエ (鑑賞)	ひな鳥の踊りを思い浮かべ、体を動かしながら曲を聴き、音楽の楽しさを見いだしながら、曲全体を味わって聴く。		○	○	ひな鳥の踊りを思い浮かべ、体を動かしながら音楽を聴かせることで、曲想と音色、旋律の反復や変化などとの関わりに気付かせる。
3	曲想と音色、旋律の反復や変化との関わりについて気付くことができる。	音色、旋律、 反復、変化	曲想を感じ取ったり、音色、旋律の反復や変化を聴き取ったりし、それらに関わらせながら聴く。	知				
第三次	4	声の音色、旋律、強弱や速度を聴き取り、1番、2番の情景に合った表現を工夫し、自分の歌声に気を付けて歌う技能を身に付け、歌うことができる。	夕やけこやけ (歌唱) 音色、旋律、 速度、強弱	1番と2番で変化する夕焼けの情景を想像し、その様子が伝わるような歌い方を、声の音色や旋律、速度、強弱を基に考え、様々な表現の仕方を試しながら工夫して歌う。	知 技	○		曲想を感じ取らせた上で声の音色や旋律、速度、強弱を様々試させ、考えさせることで、情景に合った歌い方にするためには、どのように歌ったらよいか思いをもたせる。
	5	小ぎつねの気持ちを想像し、声の音色、旋律の反復、強弱や速度を聴き取り、場面の様子に合った表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつことができる。	小ぎつね (歌唱・器楽) 音色、旋律、 強弱、反復	1～3番の小ぎつねの気持ちを想像し、その気持ちが伝わるような歌い方を、声の音色、旋律の反復、強弱などを基に考え、表現の仕方を考えて歌う。		○	○	歌詞から小ぎつね気持ちを想像させ、その気持ちに合った表現にするために声の音色や旋律の反復、強弱などを考えさせることで、このように歌いたいという思いを膨らませる。
第四次	6	音色や旋律の反復、と曲想との関わりに関心し、音色に気を付けて鍵盤ハーモニカを演奏する技能を身に付けて演奏することができる。		旋律を階名で歌ったり、音色に気を付けたりしながら鍵盤ハーモニカで演奏したりする。	知 技			鍵盤ハーモニカでも演奏させることで、歌唱表現で明確になった考えを器楽表現にも活用させる。
	7	音色や旋律の反復、強弱の違いを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、どのように表現するかについて思いをもつことができる。		歌唱表現での工夫を生かし、音色、旋律の反復、強弱などの変化による違いを感じ取りながら、どのように表現するかを考え、表現を工夫して鍵盤ハーモニカで演奏する。		○	○	曲の特徴を生かした表現にするための表現の工夫についてこれまでの学習を振り返らせ、どの要素をどのように工夫して表現するかを総合的に考えさせ、自分なりの思いをもって表現させる。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

歌詞の表す様子や旋律のリズムの特徴に合った声の音色や表現の仕方を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつことができる。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿 (太字下線は「表現力」が発達される姿)	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
1 範唱を聴き、「あのね、のねずみは」を歌う。	<ul style="list-style-type: none"> 動物のことを紹介する歌なのだね。 のねずみが出てきたよ。 のねずみは臆病者で人見知り。 でもとびきり優しいのだね。 弾んだ感じのリズムだから、弾ませて歌いたいな。 	1 「先生のお友達の動物を紹介するね。」と前置きして範唱する。動きを付けながら歌うことで動物を紹介している様子であることをつかませる。出てきた動物の性格などを問いながら範唱することで、歌詞に着目させ、歌詞の内容を捉えさせる。歌いにくい付点のリズムや見逃しやすい休符を取り上げ、繰り返し歌わせることで、正しく歌うことができるようにする。
2 本時の学習課題をつかむ。	<p>「<u>優しいんだ</u>」は優しい感じの<u>声で歌った方が</u>いいのではないかな。</p>	2 「動物のことがもっと伝わるようにするにはどう歌ったらよいかな。」と投げ掛けることで、歌詞やリズムの特徴に合わせて歌い方を工夫したいという思いをもたせる。1番を例にして、同じ歌詞でいくつかの歌い方を試させ、色々な歌い方が考えられること、歌い方によって感じが変わることを全体で確認する。
どうぶつのがもつとつたわるようにうたおう。		
3 歌詞や曲の感じに合った歌い方を考え、試す。	<ul style="list-style-type: none"> 1回目の「あのね」はワクワクした感じに聴こえたよ。 2回目の歌い方だともじもじしているように聴こえたね。 同じ言葉でもいろいろな歌い方ができるのだね。 <p>私はふくろうを紹介したいな。 <u>「うふふ」は笑うような感じに歌うともっと伝わるかな。</u> <u>「おちやめ」はかわいらしく動きも付けて歌いたいな。もっとおちやめな感じにするにはどうしたらいいかな。</u> <u>「ひみつ」は小さな声で歌おう。小さくするだけでなくひそひそ声で歌ってみようよ。</u> <u>小さな声で歌っていたから本当に秘密の話をしているように聴こえた。</u> <u>「あわてんぼう」は急ぐように駆け足をしながら歌っていたのがいいと思ったよ。</u></p>	3 動物のことがより伝わる表現にするために、「声の音色やリズムの特徴を生かした歌い方を工夫する」と活動を焦点化した上でいろいろな歌い方を試させる。自分なりに思いをもって表現できるようにするために、1～3番の中のどこを工夫したいかを選ばせる。同じ箇所を選んだ友達と考えを交流したり、伴奏に合わせて歌って確かめたりする場面を設定する。歌い方を統一させるのではなく、いろいろな思いや歌い方の交流を目的として活動させる。1～3番の中で、自分が考えた箇所をリレーでつないで歌わせ、聴き合う場面をつくることで、互いの思いや表現のよさを認め合ったり、表現への思いを膨らませたりさせる。 ※ 歌詞の表す様子や旋律のリズムの特徴に合った声の音色や表現の仕方を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつことができたか。 (思・判・表：演奏聴取、発言内容)
4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> 歌い方を工夫すると、動物の様子がもっと伝わって楽しかった。 一つの言葉でもいろいろな歌い方ができることが分かりました。 	4 歌い方を工夫することで動物の様子をより伝えることができたかを振り返らせることで、声の音色やリズムを生かした歌い方を工夫することでより様子を表すことができるという学びを価値付ける。

表現力

授業（音楽科【表現力】）を振り返って

◇2年4組音楽科◇授業者：早坂 英里子

◇単元名 「ようすをおもいうかべよう」

		内 容
1	【表現力】 研究の概要に ついて	<p>○グループでの試行錯誤について。中心となって話し合いを進める子供がいるグループは試行錯誤が進むが、そのような子供がいないグループは難しい。</p> <p>・中心となって話し合いを進める子供を育てることも大切である。普段の授業からそのような子供を育てることを意識していかなければならない。同時に、今回はグループの子供に試行錯誤を任せっきりになってしまったことも原因と考えられる。どの子供も考えを言ったり、意見を受け入れたりできる場を設定することも忘れずに行っていく。</p> <p>○「アウトプット」の後にまた「試行錯誤」させるための手立てがなかった。</p> <p>・チームとしても一度アウトプットしたものを、再度、試行錯誤することも含めて研究は進めていたが、上手く行うことができなかった。明確な目的をもたせることで、何度も試行錯誤を繰り返す状況を作り出していきたい。</p> <p>○表現に向けたきっかけ作りは、もっと練ることができたはず。振り返りの時間なども視野に入れてはどうか。</p> <p>・導入という考え方が大きく、導入場面をどのように行うかばかり考えていた。前時の振り返りが次時につながっていることは事実。振り返りの時間を次時につながるように考え、練ったきっかけ作りをしていきたい。</p> <p>*表現できるということは、人の表現も受け入れることができるということ。表裏一体の関係だからこそ、アウトプットだけでなくインプットも大事にしてほしい。アウトプットの素地を作るインプット。</p> <p>*今日の授業の中では、1人でもみんなの前で堂々と歌える子供の姿が見られた。そういった姿こそ、本校で目指したいたくましい姿といえるのではないか。</p>
	授業について	<p>○教師が例示した「優しい感じ」「可愛い感じ」などの歌い方を試す姿は見られたものの、グループ活動の中での歌詞の様子に合った歌い方の工夫を考える姿にまでは至らなかった。</p> <p>○子供たちが試行錯誤する際の道具をどれくらいもっているのかが疑問である。参考になるキーワードがあり、それと歌詞が結び付けばもっと豊かな表現が見られたのではないか。</p> <p>・どんな歌い方をすれば歌詞の様子を表すことができるかについてつかませることができなかったためだと考える。このことから、導入場面では、こう歌いたいという思いを引き出すと共に、その思いを実現するための手段や方法にまで見通しをもたせる必要があることが分かった。</p> <p>・チームの話し合いの中でも、何度も「ツール」「道具」という話が出てきた。音色、強弱、速度などの共通事項を子供たちが「道具」として意識し、必要な場面で取り出して使えるようにするための積み重ねも大切である。</p> <p>○一人でも他者と関わったり、自分で何度も試行錯誤したりしている児童がいた反面、試行錯誤する姿が見られなかったグループもあった。</p> <p>○試行錯誤には、アウトプットさせるだけでなく、子供たちが自分たちがやっていることを振り返り、改善策をもたせるための別な手立てが必要であった。</p> <p>○1番、2番、3番の中や違う歌詞の同じ旋律を歌う人同士でさらに関わられるとよかった。</p> <p>○パートを固定せずにグループを自由に行き来させ、いろいろな表現の工夫を考えさせてもよかった。</p> <p>・歌詞の分け方、リレー唱のさせ方、グループ活動のさせ方にさらに工</p>

	<p>夫が必要であった。一人だけになってしまった箇所や、なかなか自分の考えをもてない、伝えられない子供に対する手立て、試行錯誤を深めさせるための手立てが必要だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試行錯誤を促進するためには、アウトプットだけではなく、表現したものから、よさや改善点を見出し、さらにどうするかを考えられるような場を設定することで、そのサイクルを回すことが必要であることが分かった。 ・一人一人の思いのたせ方と他者との関わりの中での思いのたせ方の両方を考える必要がある。一人一人の試行錯誤、集団での試行錯誤の両方を促進させ、そのバランスを取って授業を作っていく必要があることが分かった。
<p>2 研究協力者の先生からの御指導</p>	<p>【研究協力者・宮城教育大学 音楽教育講座：小塩さとみ先生】</p> <ul style="list-style-type: none"> *密度の濃い時間だった。ぼうっとしている時間がない。 *広い空間で表現できることは贅沢。空間の使い方が良かった。 *「あのね」の歌い方のテンプレートをいくつも出して学習→自分で考えた。学んだことをとりあえずやってみる。という学習になっていた。 *他の人がやっていることをどう受け止めるか。受け止めたことが最後の感想に表れていた。 *先生が表現をすべて管理するのは鬱陶しい。目が届かない所があってもいい。 *表現には正解（こうやると効果的、伝わる）がたくさんある。子供たちを長い目、広い目で見ていくことで、今日種をまいたことでどう育っていくのか、子供の表現を刺激しているからこそ突拍子もないことが出る、と余裕をもって見取っていくことができる。 *めあてとして近付いてほしい姿に今日は近付けなかったとしても、今日の授業の後、どう変化するかを長期的に見る。表現していないからといって学んでいないわけではない。 *めあてからはみ出た表現をおおらかに受け止め、次への糧としてほしい。授業を進める時には切り捨ててしまうが、めあてから外れた時には「もうけもの」と前向きに思うくらいがいい。 *「思い」はそう簡単に言語化できるものではない。最初からもったり、表現しながらもったりするもので、思いも、思いのもちかたも人によって違う。違うものを「違うって面白い、どうしてそうしたんだろう」と価値付けてあげること。違うから面白いと思える子をどう育てるか。「私はそう思わない」ということは自分の思いに気付くチャンス。 *リレー唱の際の歌詞の切り分け、バランスは確かに悪かった。けれど、いろいろなやり方がある。1年間の音楽の授業の中で、今日は「表現から入るパターン」、今日は「歌えるようになってから表現するパターン」などのようにいろいろなパターンをやれるとよい。子供によっても得意不得意があるので、いろいろな学び方に触れさせていけるとよい。時には表現の技術を教える時間があったりとどこに重点を置くかを変えていくとよい。 *表現力には、友達や先生からの考え方など、他者の表現を受け取る力も含まれている。 *中学年で表現することから遠ざかっていく姿を見るが、それまでにどれだけ表現力を厚くするかが求められる。 *最終的にどこを目指すかという視点で見ると、音楽の学習は、豊かな体験の積み重ね。（知識の積み重ねではなく。） *表現を評価するのは難しい。表現の技術（曲が違えばプロセスは違う）を増やすために、新しい表現方法をどう教えるか。何をどう教えるか。
<p>3 今後の方向性 (研究や授業の改善)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業作りのポイント一つ目にある「表現に向けたきっかけ」を作るための導入においては、導入場面をどのように行うかばかりではなく、前時の学習をどのように振り返らせるかも工夫することを視野に入れて行うことで、きっかけ作りをより練られたものにしていきたい。 ・授業作りのポイント二つ目にある「試行錯誤」ができる環境作りにおいては、何のために試行錯誤をするのかの目的を明確に設定していく。そのことにより、一度試行錯誤すればよいのではなく、何度も試行錯誤を繰り返す状態を作り出す。また、友達のアウトプットを受け入れるインプットも育てることで、自分勝手な試行錯誤ではなく、目的に向けて、自分以外の考えも活用できる子供を育てていきたい。

チーム研究実践例⑤

【チーム研究の概要】

調整力

阿部辰朗(道) 牧野裕可(道) 鹿内隆世(特) 安倍彰人(特) 齋藤裕子(食健) 大場亜珠(食健)

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

言語力

問題解決力

活用力

表現力

調整力

＜本校で育成を目指す「調整力」＞

自他との対話や関わりを通して、考えや行動を調整する力

本校で育成を目指す「調整力」を「自他との対話や関わりを通して、考えや行動を調整する力」と設定した。自己及び集団の課題に向き合い、対話や関わりを通して自他の多様な考えや行動を受け入れて生かし、よりよく解決する子供の育成を目指す。

特に、道徳科、特別活動、食と健康において、調整力を発揮している子供の姿として以下のような姿が挙げられる。

道徳科	道徳的価値について、自他との対話を通して多様な考えを受け入れ、心の中にある思いと合わせて思考している姿
特別活動	生活上の課題について、自他との対話を通してよりよい主張をしたり、自分の立場を変えたりしながら合意形成に向かう姿
食と健康	食と健康に関する課題について、正しい知識を得て自他との関わりや自己内対話を通して、よりよい生活習慣を形成していく姿

他教科等においても、学習課題について、自他との対話を通して多様な考えを受け入れて生かし、よりよく解決する姿が考えられる。

＜「調整力」が育つ・発揮される授業づくり＞

以下の点に留意して授業づくりを行うことで、子供の調整力を育み、子供が調整力を発揮できるようにしていきたいと考える。

○ 自分事として自他との対話に向かう学習課題と発問

子供の調整力を育み、子供が調整力を発揮できるようにするためには、子供に問題や課題を自分事として捉えさせることが必要だと考えた。そこで、子供が自分事として捉えることができる学習課題を設定する。また、多様な考えが出されるような、ねらいに迫る発問や子供に新たな気づきや思考を促す問い返しを投げ掛けていく。

○ 学びを自覚させる振り返り

子供に、他者の考えを受け入れて自分の考えと合わせて思考することが、新たな気づきや解決方法、学びを獲得していけるのだという実感をもたせる。そのために、事前・事中・事後における自他の考えを可視化することや自己と他者の考えを関連付けて、獲得した学びを自覚させる振り返り場面を単元を通して設定する。

(阿部 辰朗)

第6学年3組 特別活動学習活動案

日時 令和2年11月11日(水) 5校時
場所 6年3組教室
授業者 鹿内 隆世

1 題材名 決めよう！僕らだからこそできる卒業イベント！

2 題材について

本題材は、6月に決めた学級名である「スパークリング学級」だからこそできる卒業に向けたイベントの内容を考え、実践活動を通して、自分たちが目指す学級の姿の実現を目指す題材である。

本題材の本質は、子供たちが目指す学級の姿を基に、卒業に向けた自分たちだからこそできるイベントを考えることを通して、話し合う議題について自分事として捉え、実践活動に向けて前向きに話し合わせるができることであると考えた。

3 児童について

子供は、これまで経験してきた学級会において、互いに意見を話しながら、合意形成をしてきた。その際、自分が支持している意見や立場を実現させたいという思いから、他の意見や立場の短所に目を向けて話し合いを進めることがあり、互いの意見や立場の短所をぶつけ合うような話し合いになってしまうことがあった。

また、自分の意見が周りの人にどう思われているかということに気になってしまうあまり、積極的に挙手をすることや意見を話すことができない子供の姿も見られた。しかし、意見を出し合い合意形成を求めない話し合いについては、積極的に自分の意見を話す姿も見られた。このことから、合意形成を図るための収束を図る学級会などの話し合いにおいては、自分の意見や立場を表明できず、納得のいく合意形成が図られないことがある子供の姿が見られることが分かった。

4 題材で育つ・発揮される「調整力」の具体

様々な意見が出される中で、「スパークリング学級」だからこそできるイベントを考えることを通して、自分の立場を変えたり、更なるメリットを主張したりしながら合意形成することができる姿

5 指導に当たって

まず、本単元の【見通す】段階で、スパークリング学級だからこそできるとは、どのようなことか考えさせる。その際にスパークリング学級とは、どのような目指す学級の姿から生まれたのかを改めて確認する。そして、スパークリング学級だからこそできる卒業に向けた企画を出し合う活動をするを捉えさせ、次時の議題をつくり上げていく。

次に【学ぶ】段階では、子供がつくり上げた議題について学級会を開く。学級会の前に企画についてアンケートを実施し、前時に出し合った企画から五つ程度に集約しておく。その中で自分はどの企画を支持するのかということを決めておき、学級会に臨むようにする。学級会では、前時の「スパークリング学級だからこそできるとは何か。」という問いの答えを話し合う際の観点とし、話し合いを進めていく。

「提案された企画について意見を出し合う時間」「それぞれの企画の心配な点を出し合う時間」「心配な点の解決策について意見を話す時間」「どのような決め方をするのか確認をする時間」を設定することで、話し合う内容を整理していく。

最後に【生かす・広げる】段階では、決めたことを実践に移していく。そして、実践したことを振り返り、本当に、「スパークリング学級」だからこそその企画だったのか、この実践活動から学んだことについて整理をし、今後の企画開催に向けて成果と課題を確認する。

6 単元の構成

段階	時間	ねらい	主な学習活動と 教師の関わり	評価の観点			「調整力」が育つ・発揮される 授業づくりにおける手立て
				知・技	思判表	主	
見通す	1	「『スパークリング学級』だからこそ」とはどういうことなのか考え、考えたことを基に実現可能な企画について出し合う。	「『スパークリング学級』だからこそ」ということについて考え、やってみたい企画を出し合うことを通して、学級会に向けた議題をつくり上げる。		○	○	まず、卒業までに残された期間を提示し、卒業が近くに迫っていることを意識させる。その後、「スパークリング学級」だからこそとは、どのようなことなのか話し合わせることで「卒業」と「スパークリング学級」という限定された企画になるということに気付かせる。
学ぶ	2 (本時)	「『スパークリング学級』だからこそできる」卒業に向けた企画の内容について合意形成を図ることができる。	いくつかの提案のメリットについて話し合い、スパークリング学級だからこそできる卒業に向けた企画は何かということを確認しながら話し合う。	○		○	話し合いの中で提案についてのメリットを中心に話をさせる。それぞれの提案についてのメリットが出揃ったところでそれぞれの企画の心配な点についても話をさせる。そうすることでそれぞれの提案の良い点と心配な点が比較でき、自分の支持している提案が本当に「スパークリング学級」だからこそできる企画なのかということを考えさせる。
生かす・広げる	3	合意形成を図り、決まった企画を実践することができる。	計画を基に、企画を実践し、「スパークリング学級」だからこそできる企画になったかどうかについて振り返る。			○	子供たちの中で役割を決めて計画や準備をさせる。そうすることで準備段階の中でも話し合いや議論が生まれ、折り合いをつけたり、多様な立場や意見を認めたりすることが企画の成功につながることに気付かせる。
	4	実践を振り返り、「スパークリング学級」だからこそできる企画になったかどうか、話し合い、次の活動に向けて意欲を持つことができる。	次の活動へ向けて、どうしたら更に自分たちにしかできない企画になるのか 共有し、次の活動に向けて意欲を高める。		○	○	今回の実践活動について振り返り、良かったことと改善点について話し合わせる。そうすることで次回の企画に向けて、どのようにすれば「スパークリング学級」だからこそできる企画になるのかということについて考えさせ、次回の実践活動に向けて見通しをもたせる。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

- ・「スパークリング学級」だからこそできる卒業に向けた企画の内容について話し合い、合意形成を図ることができる。
(集団のねらい)
- ・様々な立場の意見を聞き、卒業のイベントとして妥当なものを支持することができる。
(個人のねらい)

(2) 学習過程

主な学習の流れ	子ども達の姿 (学習活動の様子)	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 議題について確認する。</p> <p>「スパークリング学級」だからこそできる卒業に向けた企画の内容を決めよう。</p>	<p>・今日はこの議題について話し合うのだったな。</p>	<p>1 前時までの学習を基に議題を提示し、学習への見通しをもたせる。</p>
<p>2 提案理由を確認する。</p> <p>3 話し合いをする。 ○提案された企画について意見を出し合う。</p> <p>○それぞれの企画の心配な点について意見を話す。</p> <p>○心配な点について解決策について意見を話す。</p> <p>○どのような決め方をするのか確認する。</p>	<p>・「スパークリング学級だからこそ」というのはポジティブということだったな。</p> <p>・企画に「ポジティブ」に取り組むためには、「みんなが楽しいこと」と「みんなが参加できること」が大切だったのだな。</p> <p>・この二つを話し合いの柱にするのだったな。</p> <p>・おもしろい動画の作成をしたいです。動画作成ならみんなが参加できると思うよ。</p> <p>・映画は役割がたくさんあるので映画に出演するのが苦手な人も参加しやすいのではないかな。</p> <p>・<u>おもしろい動画を作成するのは、楽しいとは思いますが、何度も振り直しをしないといけないよ。諦めないでできるかな。</u></p> <p>・<u>本当に映画を作ることはできるかな…。</u></p> <p>・<u>学級の土台を大切にすれば、助け合えると思います。失敗しても「ポジティブ」に取り組むことが大切ではないかな。</u></p> <p>・<u>その言葉を聞いたら安心できたな。ポジティブを大切にしている私たちだからこそできる動画作成をしたいな。</u></p> <p>・<u>撮影計画を作れば卒業までに完成させられそうだよ。</u></p> <p>・<u>映画は、みんなに役割が割り当たるからみんなが楽しいし、みんなが参加できそうだよ。</u></p>	<p>2 提案理由を「学級のみんなが準備段階から卒業イベントにポジティブに取り組むためには、『みんなが楽しい』『みんなが参加できる』卒業イベントを決める必要があるから。」と設定し、合意形成に向けた話し合いの必然性をもたせる。</p> <p>3 まず、話し合う内容によって時間を区切るようにする。そうすることで話し合う際に意見を話す子供が安心感をもてるようにし、多様な企画のメリットが提案されるようにする。次に、今回の話し合いの柱になる「スパークリング学級だからこそ」ということがどういうことだったのかを全員で確認をする。そうすることで全員が一つの目的について話し合いができるようにする。また、話し合う際にはそれぞれの企画の良い点に視点を向けるために賛成意見を中心に話をさせるようにする。</p> <p>さらに、それぞれの企画の心配な点についても話し合わせる。そうすることで自分の支持している企画の心配な点についても目を向けられるようにさせる。その後、解決策についても提案させることでスパークリング学級の一人一人が前向きに参加できるような企画へと改善させていく。</p> <p>最後に決め方について、確認をすることで全員が納得した決め方の上で合意形成を図らせる。</p> <p>※ 企画の内容について合意形成を図ることができたか。 (知・技：発言、学習感想)</p> <p>※ 様々な立場の意見を聞き、卒業のイベントとして妥当なものを支持することができたか。 (知・技：発言、学習感想)</p>
<p>4 決まったことを発表する。</p> <p>5 話し合いの振り返りをする。</p>	<p>・この企画の内容ならみんなが前向きに取り組めそうだ。</p> <p>・<u>自分の支持していた企画は、意外に心配な点があったので途中で意見を変えました。そのおかげでみんながポジティブに取り組める企画になったと思います。</u></p>	<p>5 「今日の話合いで最終的に自分の意見が決まった決め手は何か。」と投げ掛けることで、話し合いの中での子供の思考の流れを読み取るようにする。</p>

調整力

授業（特別活動【調整力】）を振り返って

◇6年3組特別活動◇授業者：鹿内 隆世

◇単元名 「決めろ！僕らだからこそできる卒業イベント！」

		内 容
1	【調整力】 研究の概要について	<p>○研究討議での主な意見 ・質問や意見に対するチームの考え ＊いただいた御指導</p> <p>○授業づくりの観点が広すぎるので、調整力とのつながりをもった観点があると良い。</p> <p>○調整するということがどのようなことなのか具体で示していく必要がある。</p> <p>○どうなったら調整したと言えるのか。授業づくりに関しての部分には、調整の基準が示されていると伝わるのではない。</p> <p>○調整後の姿に価値を置くのではなく、多様な考えや行動を受け入れようとする姿から調整が始まっているのではない。</p> <p>○調整する際によりどころが必要である。「受け入れて生かす」ということをもっと考えていく必要があるのではない。</p> <p>・本時の授業では、意見を変更することに焦点を当ててしまったが、調整力チームでは、「対話や関わりを通して、自他の多様な考えや行動を受け入れて生かし、よりよく解決すること」を調整力と捉えている。例えば、Aという考えをもっていた子供が、Bという考えを受け入れてBにするだけでなく、Aのよさに改めて気付いたり、Bの考えを取り入れたA' にしたりする姿である。</p>
	授業について	<p>○本当に自分事として捉えていたのか疑問だった。</p> <p>○「みんなが楽しい」「みんなが参加できる」となったときに、そこに自分が入っていなかったのではない。</p> <p>○発達段階に合った議題だったのか。</p> <p>○最高学年であるということ自分事で捉えられていないのに卒業という話題は早いのではない。</p> <p>・本時では、自分事として捉える姿がなかなか見られなかった。遊ぶ企画を決めるのではなく、その企画の中で直面した問題点を議題にするなどの工夫が必要であったと考える。</p>
2	研究協力者の 先生からの御指導	<p>【研究協力者・田端健人先生・本田伊克先生】</p> <p>*見取りは長いスパンで見えていく必要がある。</p> <p>*自分事でなければ調整する必要性がなくなってしまう。</p> <p>*のめりこむとそこにドラマが生まれる。今回も子供の姿に表れている瞬間があったのではない。</p>
3	今後の方向性 (研究や授業の改善)	<p>・調整が生まれる根拠には、人・もの・ことなどの要素が考えられるが、具体的にどのようなものが根拠となり得るのか、また、子供が調整をする具体の姿はどのような姿なのか、今後も引き続き検証していきたい。</p>

資質・能力を基盤とした教科横断的な取組から見えたもの

宮城教育大学附属小学校
研究主任 三浦 秋司

1 五つの資質・能力の具体と授業づくりのポイント

<p><言語力> <u>自分の考えを深めたり、よりよく伝え合ったりする際に言葉を使う力</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 言語力を育成することができる学習課題や発問を設定する ◎ 対話する場면을意図的に設定する
<p><問題解決力> <u>事象を自分事とし、自らのめり込んで問題を解決する力</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 教科の本質を捉えながら、子供の興味・関心に寄り添った単元・題材の構成 ◎ 子供自身に学びのプロセスを自覚させる働き掛け
<p><活用力> <u>経験や既習などを生かしながら、学びを連続させる力</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 問題や課題を見いださせるために、生活経験や既有的知識・技能と事象とのずれを生じさせたり、友達と自分の考えが異なることに気付かせたりすること ◎ 問題や課題の解決に向けて、生活経験や既有的知識・技能を基に、自分の考えをもたせるために、問題や課題の解決に向けたプロセスの振り返りを行い、思考の変容を自覚させること ◎ 問題や課題を解決させる際、教科の本質的な学びの観点の下で、個々の思考を交流させること
<p><表現力> <u>試行錯誤しながら自分の思いや考えを形にする力</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 意欲をもたせ、「表現に向けたきっかけ」を作るための導入 ◎ 目的に沿った「試行錯誤」ができる環境作り
<p><調整力> <u>自他との対話や関わりを通して、考えや行動を調整する力</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 自分事として自他との対話に向かう学習課題と発問 ◎ 学びを自覚させる振り返り

表1【五つの資質・能力の具体と（上段）授業づくりで大切にしたいポイント（下段）】

※令和2年11月末時点

令和2年度に実施した5回の全校授業研究会の中で、各チームによる授業提案を基に本校で中心に据えて育成を目指す五つの資質・能力について全職員で協議した。それにより、表1のように五つの資質・能力の具体を捉えるとともに、それぞれの資質・能力を育てたり、発揮させたりする授業づくりで大切にしたいポイントを整理することができた。

協議の具体例を挙げると、3年国語科「モチモチの木」の実践を通して、第4回全校授業研究会では言語力について検討した。授業後の研究討議では、叙述を基に考えを深めた子供の発言を起点にして、対話の中で他の子供が「言葉」に着目して考えを深められるようにする手立てについて話題が上がった。それにより、対話場面の設定だけではなく、対話におけ

る言語力の育成につながる授業者の働き掛けも探っていく必要性が見えた。この働き掛けは、3年国語科「モチモチの木」の実践に限らず、どの学年のどの教科等でも、それぞれの授業を通して言語力を育成する上で欠かせないことと言えるだろう。

このように、資質・能力を切り口に子供の姿や授業者の働き掛けを観察・分析することで、他の教科等の子供の姿や授業者の働き掛けと関連させながら「資質・能力を育てたり、発揮させたりする授業づくりのポイント」を検討することができるが見えた。これこそが、資質・能力を基盤として教科横断的に授業実践を重ねるといことなのではないか。

資質・能力の捉えや授業づくりのポイントについては、今後も全校授業研究会や研究全体会などの授業実践や全体協議を通して、適宜見直しを進めていく。



【調整力チーム（特別活動）の提案授業の一場面】

令和2年度 第5回全校授業研究会

学級での話し合い活動で、個人意思決定と全体の合意形成の間で調整しようとする子供の姿が見られた。事後の全体協議では、「まだ話し合いが不十分だ」と意思表示した子供の姿を基に、よりよい合意形成に向けて調整力を働かせられるようにする手立てについて議論した。

2 前進と不足

複数の教科部で取り組むチーム研究のアプローチは、経験や知見が異なる職員が集まることで、実践前の授業構想や模擬授業、実践後の振り返りと授業改善において“広がりや深まり”をもたらした。そして、授業づくりや授業改善に他の教科等の視点をもち込むことで、その教科等ならではの学びを鮮明化することにつながることも見えた。

また、教科横断的に子供の資質・能力をどのように育成していくかを全職員で話し合うことで、子供の育ちについての考えを共有することができた。

その一方で、五つの資質・能力の具体と各教科等で考える本質に迫る授業のつながりを考えることについては、十分ではなかった。教科等ならではの学びの中でそれぞれの資質・能力の育成を目指すことを確認することはできたが、そのつながりを検討するまでは至らなかった。

チーム研究のアプローチは令和2年度に始まったものであり、まだ1年のみの実践である。研究に深まりが見られるのは先である。ここでは「見えたもの」を整理しただけであり、資質・能力を基盤とした教科横断的な取組（チーム研究）を継続することで、成果や課題を明らかにしていきたい。

各教科等における取組で見た本質に迫る授業

宮城教育大学附属小学校

研究主任 三浦 秋司

1 学校教育目標と各教科等ならではの学び

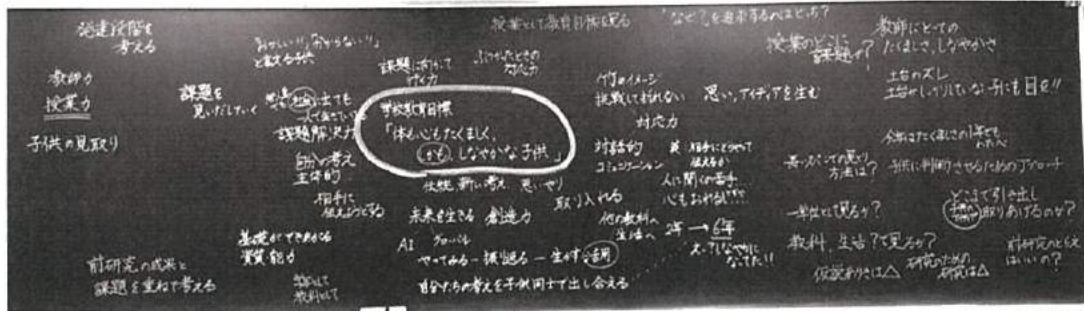


写真1【研究全体会での議論を板書で視覚化】

平成31年4月、研究全体会で本校の新研究がスタートした。新研究では、学校教育目標の具現化を目指し、各教科等の本質に迫る授業を追究していくことを全体で確認した。その上で、写真1にあるように、具体的な子供の姿を例に挙げながら「学校教育目標で目指す望ましい姿とはどのようなものか」を全体で議論した。

小学校学習指導要領（平成29年解説）総合的な学習の時間編（主に24ページを参照）では、学校教育目標で実現を目指す子供の姿を校内で議論し、強調点や独自性を明らかにしながら、育成を目指す資質・能力として具体化・鮮明化することの大切さが述べられている。このことから、研究全体会でこのような議論をしたのである。

議論の中で職員は、教科や発達段階など、多面的・多角的な視点

で学校教育目標について大いに考えた。このような議論は、全職員で学校教育目標を具現化するためには欠かせないものであり、学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連付けて新研究を進めていくスタートとして有効であったと振り返る。

その上で、議論を踏まえ、学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連させながら、各教科等で考える本質に迫る授業を具体化することを目指した。研究全体会後まもなく、各教科部で話し合う時間を設定した。

社会科を例に挙げる。本校社会科では、問題解決的な学習を通して、人々の営みについて考えを深め、主権者として主体的に社会と関わっていく資質・能力の基礎を養っていくことにこそ、社会科ならではの学びがあると考えた。そ

調整力

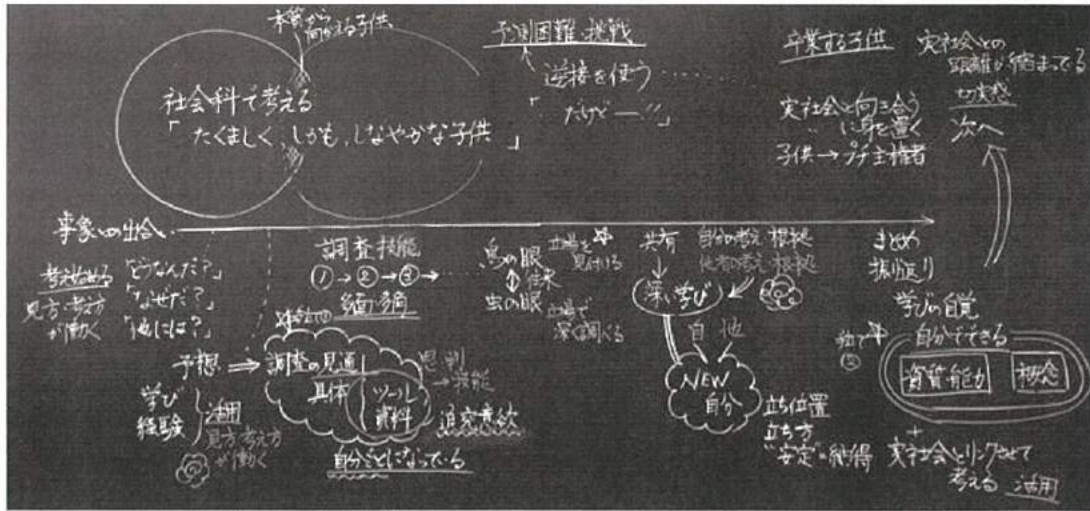


写真2 【学校教育目標と社会科ならではの学びを関連付けた社会科部の話し合いを板書で視覚化】

の学習プロセスを軸に、学校教育目標を具現化した子供がいたとしたら、その子供はどのように社会科の学習を進めるのかについて話し合った(写真2)。そして、その姿に本校の子供の実態を照らすことで、本校の子供の満足できる姿と課題である姿を明らかにすることができた。満足できる姿はそれまでの研究の成果として今後も継続・向上させることを目指し、課題である姿は改善に向けて研究の視点を当てることとした。

このように、「全体での議論→各教科部での話し合い」を通して、目指す子供の姿を具体化しながら、学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連付けて各教科等の本質に迫る授業を設定した。

2 実践を通じた検証

令和元年度からの2年間、授業実践を通して各教科等の本質に迫る授業と研究仮説の検証を進めた。その中で、授業検証シートの

作成・活用に取り組んだ(資料3)。本校では、授業準備に真摯に向き合う文化があるものの、それに比べて授業後の振り返りが浅く、次の授業改善につながっていかないケースが残念ながら散見された。それを解消するべく、このシートでは、各教科等ならではの学びに合わせて検証方法と検証基準を具体的に検討し、授業づくりと同様に授業者が丁寧に実践を振り返ることを求めている。まだまだ十分とは言えないが、授業改善につながる兆しも見えている。今後、検証シートの更なる改良を目指す。

1 本実践における仮説の検証方法の妥当性

①妥当ではなかった。映像を観賞する際の観点を具体化させることができず、用いた映像からは良い動きのイメージはもたせられなかった。これは、子供たちの中で『すばやくバス回し』というものがどのようなバス回しを指すのか、共通認識をもたせられなかったことが原因であると考え、各後は、動きに対する価値付けを丁寧に行い、共通認識をもたせたと上で観賞する際の観点を具体化させることができるようにしていきたい。

②妥当ではなかった。本時の試合動画をもとに、「2秒以上ボールを保持しての停止または守備側の数減少」として具体的な観点を設定し、観賞を促した。結果は左記の【表1】の通りである。前時と本時の回数と比較すると、結果は左記の【表1】の通りである。前時と本時の回数を比較すると、結果は左記の【表1】の通りである。前時と本時の回数を比較すると、結果は左記の【表1】の通りである。前時と本時の回数を比較すると、結果は左記の【表1】の通りである。

【表1】	2秒保持		観賞パス	
	前時	本時	前時	本時
青A	2	2	2	1
青B	1	1	3	0
白A	1	1	0	0
白B	1	3	2	1
白A	4	0	2	0
白B	0	0	1	0
緑A	4	3	1	1
緑B	3	1	0	0
桃A	4	2	1	0
桃B	7	1	0	1

②妥当ではなかった。カウントする内容を変更し、数値化した結果は下記の【表2】の通りである。タスクゲームに取り組んでいる様子や学習意欲の向上を見ることができ、子供たちはすばやくバスを回すために、よく仲間を見て動いていたことが確認された。

【表2】	すばやくバス		意欲的なパス	
	前時	本時	前時	本時
青A	2	2	2	1
青B	1	1	3	0
白A	1	1	0	0
白B	1	3	2	1
白A	4	0	2	0
白B	0	0	1	0
緑A	4	3	1	1
緑B	3	1	0	0
桃A	4	2	1	0
桃B	7	1	0	1

資料3 【体育科の授業検証シートの一部】

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校国語科で考える「本質に迫る授業」>

自ら言葉と向き合い、表現に生かす授業

国語科では、日常生活に必要な国語の知識・技能を身につけて、言葉を正確に理解しようとしたり、筋道を立てて考えたり想像したりしながら、自分の考えを広げ表現しようとする子供の姿を目指している。「主体的に学ぶ姿」を求めて実践を重ねてきた前研究を通して、言葉と向き合い、よりよい表現をしようとする主体的に課題解決に取り組み、活発に意見を交流させる子供の姿が見られるようになってきている。しかし、自ら言葉に着目し、目的に応じて文章を解釈しようとしたり、学習内容を基に他者の考えと関連付けて自分の表現に生かそうとしたりすることには課題が見られた。これらは、一単位時間内や単元の学習において、必要感を持って言葉と向き合うことができていなかったり、母語である言葉を感覚的に捉えているため、言葉を意図的に用いることができていなかったりするためと考える。また、これらの課題は指導面での課題とも言える。つまり、教材を扱う際に内容の理解が中心の授業になってしまうことで教材への依存度が高くなることや、単元の中で子供が何を学ぶのか、何ができるようになったのかを自覚する場面が少なくなっているなど、「言葉の力」を伸ばすための手立てを授業者自身が意識していくことが十分ではなかったことも挙げられる。

そこでこれらの課題を解決するために、学習に対する必要感を持たせること、自他の解釈や表現を関連づけるための発問構成が重要であると考えた。よって本研究では、国語科で目指す子供の姿を具現化していくために、以下の視点を設定し、国語科の本質に迫る授業を追求していくこととする。

主に「読むこと」領域の学習において、次の二つの視点から手立てを講ずれば、子供は日常生活に必要な国語の知識・技能を身に付けて、言葉を正確に理解しようとするなど、自ら言葉と向き合い、自分の考えを広げて表現に生かそうとするであろう。

【視点1】自ら言葉に向かうための課題意識の設定

「読むこと」領域の学習過程に自分の考えを表現する言語活動を位置付けるとともに、教材を読むことを通して解決したい課題を設定し、何のために読むのかという目的と学ぶ見通しをもたせることを通して、子供が言葉についての見方・考え方を働かせながら自ら言葉に着目していくことができるようにする。

【視点2】言葉の力を鍛えるための発問構成

話合いの観点を焦点化及び意識化させる発問を構成する。話合いの際には、教師の的確な問い掛け（切り返し）や子供の思考の流れに合わせた補助発問を行う。そうすることで、子供は話し合っている内容や考えるべきことが明確になり、自他の解釈や表現を関連付けることができるようになる。書かれていることを正確に理解させる発問とともに、生きて働く言葉の力を鍛える発問を授業の中に設定していく。

(小池 美幸)

第6学年4組 国語科学習指導案

日 時 令和2年10月9日(金) 3校時
場 所 6年4組教室
授業者 小池 美幸

1 単元名 筆者の主張を基に仙台の未来について考えよう 「町の幸福論」(東京書籍 6年)

2 本時のねらい

本論1にある益子町と三田市の事例を読むことを通して、住民が主体的・継続的に町作りに参加することの重要性を主張する筆者の考えを読み取ることができるようにする。

3 本時の学習過程(本時4/9)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 コミュニティデザインを行う上で必要なことを確かめる。</p> <p>2 学習課題を確かめ、学習範囲を読む。 (P142,L2~P144,L13)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">コミュニティデザインに重要なことは何だろうか①</p> </div> <p>3 二つの事例について読み取る。<視点2> ○二つの事例のどういったところが「住民たちが主体的に町作りに取り組んでいる」と言えるところなのか。 ○二つの事例の共通点は「主体的」だけか。 ◎益子町の事例で、この写真が使われているのはなぜだろうか。</p>	<p>・二つあった。 ・住民が主体的なことで、未来のイメージを描くこと。 ・バックキャストिंगと言った。</p> <p>・住民が主体的に活動している取組を確かめていこう。</p> <p>・土祭は、祭りの企画、準備、運営に市民が中心となって取り組んでいるところ。 ・有馬富士公園は、地元のグループが公園で活動しているところ。</p> <p>・人々のつながりが広がっているところ。 ・活動している人が増えているところ。 ・一回きりでなく、主体的な活動が続いているところ。</p> <p>・住民が主体的に参加していることを伝えたかったから。 ・人と人とのつながりを伝えるため。 ・子供から大人まで様々な年代の人が参加していることを伝えるため。</p>	<p>1 前時までに押さえた文章構成図で確認させる。</p> <p>2 「なぜ、コミュニティデザインには住民の主体的な活動が重要なのだろう」と問い掛け、本時の学習課題を全員で共有できるようにする。</p> <p>3 益子町と三田市の事例は、住民が主体的に活動したことで、人々のつながりが生まれ、活動が継続的に行われていることを説明している。このことを読み取らせるために、以下の順で発問を投げ掛ける。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>①どんなところが主体的なのか。</p> <p>②二つの事例の共通点は「主体的」だけか。</p> </div> <p>また、資料(写真、表、グラフ)がそれぞれの事例の「主体的」と「継続的」を裏打ちしている。「主体的」「継続的」と必要な情報を関連付けて読ませるために、中心発問を投げ掛ける。</p> <p>※ 文中の語句と資料を関連付けながら、筆者の主張を読み取ることができたか。 (思・判・表現：発表・ノート)</p> <p>4 第7時から、仙台の未来について考えていく。そこで「住民の主体的な活動」に対してどう思ったか、一人一人に意見を書かせる。</p>
<p>4 二つの事例に対する自分なりの意見をまとめる。</p>	<p>・町づくりに主体的に参加すると、その町への思いが強くなり、もっとこうしたいと活動も続いていくと思う。</p>	

第1学年4組 国語科学習指導案

日 時 令和2年11月10日(火) 3校時
場 所 1年4組教室
授業者 村上 和司

1 単元名 のりものずかんをつくろう 「いろいろなふね」(東京書籍 1年下)

2 本時のねらい

「つんでいます」などの言葉に着目しながら漁船の「つくり」部分を読み取ることで、説明のための基本的な文型を捉えることができる。

3 本時の学習過程(本時5/12)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
1 本時の学習課題を知る。	・これまで客船とフェリーポートについて学習してきたから、今日は漁船のことだ。	1 前時までの学習を振り返り、客船やフェリーポートについて読み取ってきたことを確認した後、本時の学習課題「ぎよせんは、どんなふねだろうか。」を提示することで学習の見通しをもたせる。
2 本時の学習部分を読む。(P47L1~L8)		2 学習課題について考えさせながら範読を聞かせる。
3 漁船について書かれている内容を読み取る。		3 4 漁船について書かれている内容を読み取らせるとともに、説明の仕方に目を向けさせていくために以下の発問を構成していく。
<p>ぎよせんは、どんなふねだろうか。</p> <p>○漁船では、どれくらい魚がとれるのでしょうか。</p> <p><予想される補助発問> ・「たくさん」はどの言葉からわかりますか。 ・なぜ「あみ」が必要なのですか。</p> <p style="text-align: center;">【視点2】</p>	<p>・たくさんとれる。</p> <p>・教科書の写真を見ると、船が大きいからたくさんとれる。</p> <p>・「あみ」でとるからたくさんとれる。</p> <p>・「むれを見つけるきかい」とあるから、数え切れないくらいたくさん。</p>	<p>発問①【記述内容(言葉)に着目させるための発問】 「漁船では、どれくらい魚がとれるのでしょうか。」 「多いこと」を表す言葉である「むれ」や、装備を示す「あみ」「きかい」という言葉に着目させることで、たくさんの魚が獲れるという漁船の魅力を具体的に想像させていく。</p>
4 漁船の説明の仕方を読み取る。		発問②【書き方(構成)に着目させるための発問】 「客船やフェリーポートの「つくり」の説明と比べて、違うところはどこですか。」 説明の仕方に焦点化させるために「つくり」部分のみ(③⑥⑨段落)を一斉音読させた後、中心発問を投げ掛ける。その後、「つんでいます」などの言葉に着目させることで、設備と装備の違いを捉えさせるとともに、用いる言葉は違っていても「つくり」について説明していることは同じであることを確認させる。
<p>◎客船やフェリーポートの「つくり」の説明と比べて、違うところはどこですか。</p> <p><予想される補助発問> ・「あります」と「つんでいます」はどのように違いますか。 ・なぜ「つくり」部分に「あみ」と「きかい」が書かれているのでしょうか。</p> <p style="text-align: center;">【視点2】</p>	<p>・これまでは「このふねの中には」だが、漁船は「このふねには」と書いてある。</p> <p>・これまでは客室や食堂などの部屋のことだったが、漁船は「あみ」「機械」などの物のことが書いてある。</p> <p>・「部屋」は船にあるものだが「物」は船に積んであるもの。書いてある言葉も「あります」ではなくて「つんでいます」になっている。</p>	<p>※漁船の「つくり」部分を読み取ることで、説明のための基本的な文型を捉えることができたか。 (思・判・表・発表・ノート)</p>
5 本時の学習を振り返る。		5 本時の学習を振り返り、説明の仕方について振り返りながら一斉音読させることで、次時以降の「乗り物図鑑づくり」につなげさせていく。

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校社会科で考える「本質に迫る授業」>

人々の営みについて考え、主権者意識を高める授業

○ 人々の営みについて考える

→ 社会的事象（以下、事象）を言い換えるならば、実社会を生活している人々、または過去の実社会を生活してきた人々の営みであると言える。そこには多くの立場の人々が存在し、営みは様々な側面をもつ。だからこそ、多面的・多角的に追究することが欠かせず、それにより人々の営みの意味や価値について考えられるようになり、グローバル化する国際社会を主体的に生きていく資質・能力が高まると考える。

○ 主権者意識を高める

→ 選挙権年齢が18歳に引き下げられたものの、若者の政治参加・社会参画が乏しい。それゆえに学校教育において、実社会に見られる課題を発見し、その解決策を構想することが求められる社会科の意義は大きい。社会科の学びを活用することによって、未来の実社会を生きていく人々（主権者）の一人として「私はどのように実社会と関わっていくか」「一人では難しいが、私たちは力を合わせて何ができるのか」を見出すことができるようになり、政治参加・社会参画に向かおうとする主権者意識が高まると考える。このように、“過去”や“現在”の人々の営みについて考え、“未来”の主権者としての関わり方を探っていくことが、社会科における「本質に迫る授業」であると考えられる。そのために授業では、多面的・多角的な追究に適した事象や実社会に見られる課題を内在する事象、子供が社会との関わりを見だしやすい事象を教材として取り扱う必要がある。

「主体的に学ぶ姿」を求めて実践を重ねてきた前研究を通して、子供は問題解決的な学習の中で調査を基に社会的事象に対する認識を深めながら、実社会に関わろうとする意欲をもつようになった。しかし、本校社会科で考える「本質に迫る授業」を通して学校教育目標の具現化に迫るとき、次のような課題点も見られている。

- ・ 多面的・多角的に追究していく上で、見通しをもつことが不十分である。

【子供の姿の例】 必要な資料の具体的なイメージがもてない

社会的事象から浮かび上がる複数の立場を想起することができない

- ・ 自分の変容（資質・能力の変容）を、実社会と結び付けて考える機会が少ない。

【子供の姿の例】 報道に関する関心が高まったことや、実社会に見られる他の問題についても考察することができるようになったことの実感が乏しい

このような課題点を踏まえて教師の授業づくりを改善した昨年度の研究では、見通しをもつことで子供自ら問題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られるようになってきている。また、学びを実社会と結び付けて考える機会を多く与えたことで、学びが自分たちにも直接結び付いていることを実感する様子も見られた。さらに主権者意識を高めるために、実社会と自分を近付けて考える機会をもつことで、より学びを実社会で活用しようとするのではないかと考える。

<研究仮説>

問題解決的な学習の中で次の二つの視点から手立てを構ずれば、「人々の営みについて考え、主権者意識を高める授業」に近付き、学校教育目標の具現化に迫ることができるだろう。

【視点1】多面的・多角的に追究するための見通しの明確化

多面的・多角的に追究するためには、調査の観点や社会的事象から浮かび上がる立場を明らかにすることが必要である。また、調査方法を子供自身が選んでいくことで、多面的・多角的な追究に必要な調査の在り方を探っていくこととなる。これらによって、問題解決に必要な追究の過程を子供自身が見通せるようになり、教師が導かずとも、子供自身で多面的・多角的に追究することが可能となるはずである。

【手立ての例】

- ・ 予想を基にした調査の観点の共有
- ・ 調査方法（見学や取材、資料）の選択場面の設定
- ・ 社会的事象から見える立場の明示
- ・ メリット、デメリットを考えさせる問い掛け など

【視点2】学びの活用を促す実社会へのリンク

主権者意識を高めるためには、実社会と自分を近付けて考えたり、学びを実社会と結び付けて考えたりする機会が重要となる。学習を通して得たり変容したりした資質・能力は、実社会に生かされてこそ意味がある。そこで、ローカルな事例とグローバルな事例を往来したり、地域課題に出合ったりすることで、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、子供は学びを自覚しつつ資質・能力を実社会に生かそうとすると考える。そして、“未来”の主権者の一人として子供は実社会との関わり方を考えていくであろう。

【手立ての例】

- ・ ローカル（ミクロ、身近な地域）とグローバル（マクロ、他地域）を往来させる働き掛け
- ・ 新たな事例地や地域課題に関する資料の提示 など

(前田かおり)

第5学年1組 社会科学学習指導案

日時 令和2年9月29日(火) 3校時
場所 5年1組教室
授業者 前田 かおり

1 小単元名 これからの食料生産とわたしたち

2 本時のねらい

食料自給率を上げるための取組について学習問題を立て、関わる立場を明らかにしながら学習の見通しをもつことができる。

3 本時の学習過程(本時 1/5)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 資料を基に、小単元の学習問題を立てる。 ①宮城の食料自給率を知り、食料自給率を上げる取組について考えを交流する。 ②日本の食料自給率を知り、食料自給率を上げるために日本も何取組しているのかと予想もつ。 ＜視点2＞ ローカルからグローバルへの段階的な資料提示</p>	<p>1 食料自給率が74%だと高いのではないかな。 ・でも東北の他の所より低いね。 ・食料自給率が低いのはだめだと思う。宮城県の食材の良さをPRすれば食料自給率が上がるのではないかな。 ・生産者だけでなく、売る人もPRするとたくさん買ってもらえてよいと思う。 ・CMで見たことがあるよ。「食材王国」として、宮城県の多くの食材をPRする取組なのだね。 ・この取組を通して、消費者に買ってもらえたら宮城県の食材の消費量も増えそう。 ・低いのは宮城県だけの問題ではないと思う。他の都道府県や日本はどうなのだろう。 ・38%は低いね。このままではだめだから、日本も食料自給率を上げる取組をしているのではないかな。</p>	<p>1 まず、食料自給率という言葉を押さえさせ、宮城県の食料自給率を提示する。東北の他地域と比べ低いことから、宮城県の食料自給率を上げる取組に目を向けさせ、どのような取組をしているか考えを交流させる。その際、「その取組はどの立場の人が行っているのか」と問い、人の関わりを意識させる。次に、「食材王国みやぎ」の写真や資料を見せ、宮城の食料生産を盛り上げる取組であることを捉えさせる。その後、「そのような取組をしているのは宮城県だけか」と問い、日本の食料自給率を提示して日本全体でも同様の課題があることを理解させる。その上で、日本も食料自給率を上げるために何か取組をしているのではないかと予想をもたせ、小単元の学習問題を立てさせる。</p>
<p>食料自給率を上げるために、日本はどのような取り組みをしているのだろうか。</p>		
<p>2 小単元の学習問題について予想し、考えを交流する。</p>	<p>2 生産者がたくさん食べてもらえるような取組をする必要がありそう。宮城県みたいにPRしていると思う。 ・生産者だけでなく、販売者も買ってもらうために動いた方がよさそうだよ。 ・私たちが日本の食材をたくさん買ったり食べたりするとよいのではないかな。 ・米づくりの時に品種改良をしておいしい米をつくっていると聞いていたから、生産者がよりおいしい食材を開発しているかもしれません。 ・日本の問題なのだから、日本政府が動いていると思う。輸入を多くしないように調整しているのではないかな。</p>	<p>2 まず、どのような立場が日本の食料自給率を上げるために動く必要があるのかについて考えさせる。次に、具体的にその立場がどのような取組をしているのかについて各自予想させる。その後、全体で共有し、立場と取組を関連させながら考えを述べさせていく。</p>
<p>3 今後の追究の見通しをもつ。 ＜視点1＞ 予想から見える立場を明確にさせるための問い掛け</p>	<p>3 私は生産者が大切だと思います。おいしくて安全なものを生産してくれたら、それで消費量も増えると思います。 ・販売者も、PRを続けることでたくさん買ってもらえると思うので、PRする人の立場が大切だと思います。</p>	<p>3 「日本の食料自給率を上げるために一番大切な立場はどれか」と問い、今の自分の考えを記述させることで、日本の食料生産に関わる立場を明確にさせるとともに、今後の追究の見通しをもたせる。 ※食料自給率を上げるための取組について学習問題を立て、関わる立場を明らかにしながら学習の見通しをもつことができたか。(思・判・表:ノート,発言)</p>

第3学年4組 社会科学学習指導案

日時 令和2年10月15日(木) 3校時
場所 3年4組教室
授業者 千葉 廣

1 小単元名 店ではたらく人

2 本時のねらい

スーパーマーケットの売り場の様子を基に、売り場にある客のためのさまざまな工夫について考えることができる。

3 本時の学習過程 (本時 6/15)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 学習問題を確かめる。</p> <p>台原生協では、どのような工夫をして商品売っているのだろうか。</p>	<p>1・みんなで考えた観点を見ると、今日は商品の売り方の工夫を調査するのだよね。</p>	<p>1 スーパーマーケットを調査する観点を提示し、本時では商品売る工夫を調査することを確かめさせる。</p>
<p>2 学習問題について予想する。</p> <p><視点1> 追究の視点の見通しをもたせるための予想一覧表の活用と見通しをより明確にする発問</p>	<p>2・台原生協では、商品探しやすいように看板の工夫があると思う。</p> <p>～さんは、多くの品物売っているから、多くのお客さんが買い物来ていると予想しています。</p> <p>一覧表の～さんの考えと同じように商品の良さを伝えるために表示工夫しているのではないかと思います。</p> <p>天井の看板の工夫は調査はできないが、商品の良さを伝える工夫はカードに書いてあるので調査できそう。</p> <p>いろいろなさつまいもが置いてあるので、いろいろな商品を置く工夫について調べることができそう。</p>	<p>2 まず、商品の売り方の工夫について予想させる。その際、多様な視点で考えさせるために、小単元全体の学習問題に対する児童の予想を集約した一覧表を活用させる。その後、さつまいもの売り方の工夫について本物の芋や表示カードを基に追究することを確かめ、「予想した商品の売り方の工夫の中で、今日の資料を通して調査できる工夫はどれか」と発問し、追究の視点の見通しをより明確にさせる。</p>
<p>3 学習問題について資料を基に考える。</p> <p><視点2> 事象の概念を捉えさせるための具体物の提示と事象の認識を深めるための映像活用</p>	<p>3・すぐに食べることができるように、ふかし芋を置いているのだね。お客さんが作らなくてもいいね。</p> <p>さつまいもを一本ずつ買うことができると、お客さんが料理で使うだけ買うことができるね。</p> <p>たくさん買いたい人は、ふぞろいさつまいもを買えばいいのだね。安い物と高い物も選べるのだね。</p> <p>大学いもを作る人のために、レシビヤたれ、黒ごまがセットで売られていたよ。作る人には助かるね。</p> <p>鳴門県産や国産など、どこで作られているのかを書いて安心させる工夫もあるね。</p> <p>お店で働く人にインタビューすれば、私たちが考えた工夫を確かめられると思います。</p> <p>店長さんの考えと皆の考えはほとんど同じだ。</p> <p>白菜や大根もさつまいもと同じようにいろいろな売り方しているね。</p>	<p>3 まず、さつまいも売場の様子を再現した具体物を提示する。資料を基に、商品の良さを伝える工夫や客が目的に合わせて購入できる売り方の工夫について考えさせる。その後、「考えを確かめるにはどうすればよいか」と問い掛け、店長の話提示する。</p> <p>店長の話を通して、商品の売り方の工夫を確かめた後、「さつまいも売り場で考えた売り方の工夫は他の商品にも使われているのだろうか」と問い掛け、生協の野菜売り場の映像を視聴させる。さつまいも売り場と同様の工夫をしながら、他の商品が売られていることを捉えさせる。</p>
<p>4 学習問題について自分の考えをまとめる。</p>	<p>4・台原生協では、商品の良さを伝えたり、お客さんが商品を選びやすいようにいろいろと用意したりする工夫をしながら、お客さんのことを考えて、商品売っている。</p> <p>台原生協では、商品の良さを伝えたり、お客さんが必要な分だけ品物を買えたりする工夫をしながら商品売っている。</p>	<p>4 本時の学習を振り返り、「宮城生協では、～という工夫をして商品売っている」という文型でまとめを記述させる。</p> <p>※スーパーマーケットの売り場の様子を基に、売り場には客のためにさまざまな工夫があることを理解することができたか。</p> <p style="text-align: right;">(思・判・表：ノート、発言)</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校算数科で考える「本質に迫る授業」>

既習の内容を活用しながら問いを追究することで、新たな知識や技能を創り出していく授業

本校算数科では、これまで「自ら数量や図形に働き掛け、数学的な思考力を高める授業の在り方」という研究主題の下、授業実践を重ねてきた。その結果、自分の考えを図、式などの数学的表現を活用しながら、意欲的に問題解決に取り組もうとする姿が見られるようになってきている。

反面、子供は自分の考えを表現したり、問題の答えを求めたりすることで満足してしまい、追究が止まってしまうということが課題となっている。教師から「与えられた」問題の解決には進んで取り組んでいるが、目の前の問題と既習の内容とのつながりを捉えたり、そこから新たな問いを見いだしたりする姿を十分に引き出すには至っていない。友達の考えのよさや自分の考えとの違いに着目することで、自らの考えを見直してみようとする意識も希薄である。

算数科は内容の系統性がはっきりしており、既習の内容を活用することで、子供が自分（たち）の力で新たな知識や技能を創り出していけるという特性をもっている。子供が必要感を感じ、問いを追究する過程を通して、これまでの学習を振り返りながらそれを活用し、問題の解決方法を見つけたり、その問題と既習の内容との違いや関連性が明らかになったりしていく。そして、それが既習の内容と関連付けられた、新たな知識や技能を創り出していくことにつながっていく。

算数科の学習を通して、このような経験を蓄積していくことは、子供が創造的に学習を進めていこうとする態度を養うものである。そして、それは本校の学校教育目標である「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」とも重なる姿であると考えられる。

以上を踏まえ、本校算数科では「本質に迫る授業」を「既習の内容を活用しながら問いを追究することで、新たな知識や技能を創り出していく授業」と捉え、それを具現化するための具体的な手立てについて、実践的研究を通して探っていきたいと考えた。

<研究仮説>

次の二つの視点から、教材の特質や子供の実態に応じた手立てを講じることで、「既習の内容を活用しながら問いを追究することで、新たな知識や技能を創り出していく授業」となり、本校算数科で目指す子供の姿を具現化できるだろう。

【視点1】子供の問いや、考えることへの必要感を生み出すための働き掛け

子供は、既存の知識や感覚と、目の前の事象との間にずれや矛盾を感じた時に、「なぜだろう」、「どうしてだろう」という問いをもつ。教師の働き掛けを通して、このような場を意図的に設定し、子供の問いや、考えることへの必要感を生み出していく。

例えば、複数の考えが生まれるような問題場面を提示すること、一見すると異なる考えの共通性に着目させること、生活場面とのつながりを考えさせることなど、授業の各場面において適切な働き掛けの在り方を吟味していく。

【視点2】問いを焦点化し、既習の内容との関連性を明確にするための表現の関連付け

子供は言葉や式、図、表、グラフなどを活用しながら、自分の考えを表現していく。それらを関連付けることで問いを焦点化し、事象の本質的なことへ迫っていく。

表現を介して友達の考えを読み取り比較したり、よりよい考えについて話し合ったりすることを通して、それらの共通点や相違点、既習の内容との関連性を明確にしていく。それが、既習の内容と関連付けられた、新たな知識や技能を創り出していくことへとつながっていく。

第6学年2組 算数科学習指導案

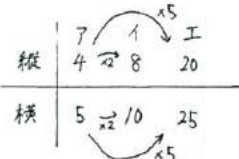
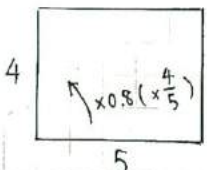
日時 令和2年8月4日(火) 3校時
場所 6年2組教室
授業者 玉手 英敬

1 単元名 割合の表し方を調べよう

2 本時のねらい

日常の事象における2つの数量の関係に着目し、既習の割合と関連付けて考えることができる。

3 本時の学習過程(本時 1/8)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 問題場面と出会う。</p> <p>形のバランスが同じ旗はどれかな。</p> <p><視点1> 問いをもたせるための問題提示の工夫</p> <p>2 学習課題を捉える。</p> <p>形のバランスが同じに見える旗について調べよう。</p> <p>3 解決の見通しをもち、自己解決をする。</p> <p>ア 比例関係で捉える。</p>  <p>イ 縦と横の関係で捉える。</p> 	<p>1・2・この旗じゃ小さいよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横が長いと、丸がゆがむよ。 ・縦も伸ばさないといけないよ。 ・見ただけでは、分からないものもあるな。 ・長さを測れば、分かりそうだ。 ・横の長さも、縦の長さも2倍になっていそうだ。 <p>3・(予想される子供の考え)</p>	<p>1・2 まず、子供に縦4cm、横5cmのサイズの旗を配布し、その後、横に伸ばしたものを提示する。旗の中心には円が描いてあり、円が歪むことで直観的に同じバランスか判断させていく。さらに拡大したものを複数枚電子黒板で提示し、形のバランスが同じに見える旗と、判断に迷ったものとの違いについて考えさせていく。</p> <p>3 子供に配布する紙には、縦と横の長さが8cmと10cm、20cmと25cmとなっているものを載せる。アの比例関係が捉えやすく、かつ、これらを表にしたときに、縦と横の倍関係(縦$\times 1.25$=横、または横$\times 0.8$=縦)が捉えやすいからである。長さを測った子供には、他の人が見て分かりやすいようにまとめるよう指示する。</p>
<p>4 互いの考えを発表し、話し合う。</p> <p><視点2> 縦と横の倍関係の理解を深めるための図との関連付け</p> <p>同じバランスに見えるには、比例関係や縦と横の割合(比)が同じ。</p> <p>5 適用問題をする。</p> <p>バランスが悪い旗は、横の長さを何cmにすればいいですか。</p> <p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<p>4・同じバランスに見えるのは、縦が3倍、横も3倍になっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表にしても、比例関係になっていることが分かるね。 ・横の長さを0.8倍にすると縦の長さになるよ。 ・1cmをもとにすると、縦と横の関係の割合を4:5って表すことができるんだね。 ・他の旗は、長さが違うけど、4:5と見ることができるのかな。 <p>5・比例関係が見つかりにくいな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横を0.8倍すればいいから…。 ・実際に確かめてみたいな。 <p>6・比例関係になっていたり、同じ比になっていたれば、バランスよく見えるんだね。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りでも、比が使われているのかな。 	<p>4 まず、形のバランスが同じに見えるものを挙げさせ、縦と横の長さを発表させる。数対は短冊に書き、並びを移動できるようにしておく。子供が比例関係や、縦と横の長さの倍関係について発言した際には、表や図に矢印などを書き加えさせ、関連付けさせる。同じバランスに見えるものには比例関係や縦と横の倍関係があることを全体で共有させた後、比の表記について指導する。</p> <p>※日常の事象における2つの数量の関係に着目し、既習の割合と関連付けて考えることができたか。(思・判・表:発言, ノート)</p> <p>5・6 比例関係が見出しにくい数値の場合を提示し、縦と横の関係で見ることのよさに気付かせる。</p>

第3学年2組 算数科学習指導案

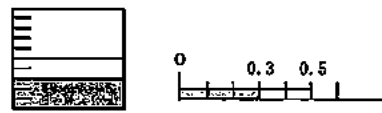
日時 令和2年11月2日(月) 5校時
場所 3年2組教室
授業者 三井 雅視

1 単元名 小数「数の表し方やしくみを調べよう」

2 本時のねらい

小数の減法の計算方法について、図や式を関連付けて考えることを通して、0.1を基にすることで整数と同様に計算できることを理解することができる。

3 本時の学習過程(本時 8/12)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 問題場面と出会う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> ジュースが0.5Lあります。そのうち、0.2L飲みました。ジュースは何Lのこっていますか。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ジュースを飲んでしまったのだから、ひき算だ。 ・式は$0.5 - 0.2$になるよ。 ・小数でもたし算はできたよね。 ・たし算ができたのだから、その逆のひき算もできそうだ。 	<p>1・2 目盛りのない液量図を提示し、中のジュースを減らすことで、本時が減法の問題場面であることを捉えさせる。前時の問題場面と比較させることで、「たし算ができたのだから、逆のひき算もできそうだ」という問いを生み出し、学習課題へとつなげていく。</p> <p>3 答えは0.3だと直観的に理解する児童が多いと予想される。そのように考えた根拠や答えの確かめ方を問うことで、自分の考えを液量図や数直線、式を活用しながらまとめさせる。</p>
<p>2 学習課題を捉える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> 小数のひき算の計算のしかたを考えよう。 </div>	<p>(予想される子供の考え)</p> <p>①0.5から0.2を取り去る。</p>  <p>②0.1を基に考え、整数の減法として計算する。</p> <p style="text-align: center;">$5 - 2 = 3$ 0.3L</p>	
<p>3 解決の見通しをもち、自己解決する。</p>		<p>4 答えは0.3だと直観的に理解する児童が多いと予想される。そのように考えた根拠や答えの確かめ方を問うことで、自分の考えを液量図や数直線、式を活用しながらまとめさせる。</p>
<p>4 互いの考えを発表し、話し合う。</p> <p><視点2></p> <p>小数を0.1の何個分と見る見方を引き出すための表現の関連付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・0.5から0.2を取るの、0.3残る。 ・$0.3 + 0.2 = 0.5$。0.3でよさそうだ。 ・$0.5 - 0.3$の0を取ると、$5 - 2 = 3$になるから、0.3になる。 ・でも、$1 - 0.3$のような場合だと、0が取れないよ。 ・0.1の何個分と見れば計算できる。 ・0.1を基にすると0.5は5個分、0.2は2個分だから、$5 - 2 = 3$だ。 ・0.1を基にして考えて計算するのは、たし算の時と同じだね。 ・0.1を基にすると、①は$18 - 6$と見ることができるね。 ・②の1は0.1が10個分だから、$10 - 4 = 6$と計算すればできるよ。 ・③の答えは1.5かな。 ・でも、確かめ算をすると変だな。 ・どちらも0.1を基に考えると、$16 - 10 = 6$になるから、0.6だ。 	<p>4 集団検討では、①の考えから取り上げる。図的表現の操作から、小数でも減法が適用できること、答えが0.3になることを捉えさせる。次に②の考えを取り上げる。形式的に「0を取ればよい」と考えている場合には、「$1 - 0.3$」のようにその方法が適用できない問題を提示したり、①の図的表現と関連付けさせたりすることで、小数を0.1の何個分と見る見方を引き出していく。</p>
<p>5 いろいろな小数の減法の計算に取り組む。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> ①$1.8 - 0.6$ ②$1 - 0.4$ ③$1.6 - 1$ </div> <p><視点1></p> <p>既習内容の活用を促すための段階的な問題提示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・0.1を基にすると、どれも整数のひき算にすることができたよ。 ・大きい数の計算の時にも、10や100を基にして考えると簡単だったよ。 	<p>5 帯小数-純小数、整数-純小数、帯小数-整数と段階的に問題を提示する。既習と異なる場面であっても、0.1を基に数を見直させることで、全て整数の減法として計算できることを捉えさせていく。</p> <p>※小数の減法の計算方法を図や式を関連付けて考えることを通して、0.1を基にすることで整数と同様に計算できることを理解することができたか。(知・技)</p>
<p>6 本時の学習を振り返る。</p>		<p>6 既習内容と関連付けながら振り返らせることで、整数と小数の表し方や計算の仕方を統合的に捉えられるようにしていく。</p>

算数科

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校理科で考える「本質に迫る授業」>

「問題解決の力」を育み、発揮する授業

「問題解決の力」とは

事象から見いだした問題を、科学的に探究する過程を通して解決し、事象に関する性質や規則性などを見いだす力

「発揮する」とは

学習を通して育成された「問題解決の力」を働かせ、次の学習や発展的な場面、他教科、生活などに生かすこと

本校児童の課題として、理科を学ぶことに対する意義や有用性に対する認識が低いことや、学習を通して見いだした事象に関する性質や規則性などが、他教科や、実際の生活の中でどのように見られたり役立ったりするのかを、子供自身がなかなか想起できないといった実態が挙げられる。

それは、前研究テーマ「子供が問いを持ち、追究し続ける授業～主体的に学ぶ姿を求めて～」において、見いだした問題を科学的に探究しながら解決させ、事象に関する性質や規則性などを捉えさせるための授業のポイントを明らかにすることができたものの、特に個々の学び（思考力・判断力・表現力等）を深めるための手立ての在り方に関する課題が残り、各学年で身に付けさせたい「問題解決の力」が、個々に生まれ、発揮されていたかどうか明らかにできなかったことが要因であると考えられる。

<研究仮説>

二つの視点からの手立てが有効に働けば、「『問題解決の力』を育み、発揮する授業」が成立し、学校教育目標の具現化に迫ることができるであろう。（※2年次は【視点2】に重点を置く）

	【視点1】 「問題解決の力」の育成	【視点2】 「問題解決の力」の発揮
3年	<p>＜比較する力＞の育成</p> <p>→ 差異点や共通点を基に、問題を見いださせる</p> <p>○既存概念や既習内容との「ずれ」や無意識の意識化によって疑問を抱かせる事象の提示</p>	<p>＜比較する力＞の発揮</p> <p>→ 差異点や共通点を基に、問題を見いださせる</p> <p>○学びを基に、理科学的な視点で新たな問題を見いださせる振り返り</p>
4年	<p>＜関係付ける力＞の育成</p> <p>→ 既習や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想させる</p> <p>○アクティビティ図の活用</p> <p>○集団から個人へと段階を踏んだ学習形態</p>	<p>＜関係付ける力＞の発揮</p> <p>→ 既習や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想させる</p> <p>○学びから生じた新たな問題に対して、根拠のある予想や仮説を発想させる振り返り</p>
5年	<p>＜条件を制御する力＞の育成</p> <p>→ 予想や仮説を基に、解決の方法を発想させる</p> <p>○ロジックツリー図の活用</p> <p>○実証性・再現性・客観性等の観点の提示</p>	<p>＜条件を制御する力＞の発揮</p> <p>→ 予想や仮説を基に、解決の方法を発想させる</p> <p>○学びから生じた新たな問題に対する自分の予想や仮説を基に、解決の方法を発想させる振り返り</p>
6年	<p>＜多面的に考える力＞の育成</p> <p>→ 結果を基に、より妥当な考えをつくりださせる</p> <p>○より客観的な考察へ導くための話し合い</p>	<p>＜多面的に考える力＞の発揮</p> <p>→ 結果を基に、より妥当な考えをつくりださせる</p> <p>○学びから生じた新たな問題を、個々が科学的に探究する過程を通して解決する学習活動</p>

(渡部智喜)

第4学年1組 理科学習指導案

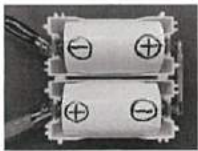
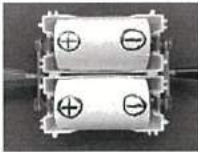
日時 令和2年7月20日(火) 3校時
場所 理科室2
授業者 渡部 智喜

1 単元名 電流のはたらき

2 本時のねらい

身の回りの道具の乾電池の大きさや数、つなぎ方を調べる活動を通して、学びを生かし、生活を理学的に見たり考えたりすることができる。

3 本時の学習過程(本時 7/7)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 問題を見だし、予想する。</p> <p><視点2> 学びを生活と関連させながら活用することができる事象の提示</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>身の回りの道具の乾電池の大きさや数、つなぎ方は、どうなっているのだろうか。</p> </div>	<p>1 非常用の懐中電灯は、直列つなぎ、並列つなぎどっちだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・停電してることを考えて、より明るく照らす直列つなぎかな。大きな乾電池で、数も多いと思う。 ・並列つなぎだと思う。非常時は明るさより長持ちのほうが大切だ。 ・他の道具の乾電池の大きさや数、つなぎ方もどうか。 	<p>1 これまで、何気なく使用してきた乾電池の大きさや数、つなぎ方に着目させ、問いをもたせる。既習を根拠にしなが、物の用途等も踏まえた予想を立てさせることで、学びと生活を関係付けて考えることができるようにする。</p> <p>2 乾電池を複数用いる道具の主なつなぎ方の例を提示し、乾電池の+極からどのように電気が流れていくのかを図で示しながら、回路が直列つなぎか並列つなぎかを判別する方法を共有させる。その上で、テレビのリモコンや、懐中電灯、時計、エアポンプ等を提示し、乾電池の大きさや数、つなぎ方を調べさせる。</p> <p>観察結果を基に、なぜ乾電池の大きさや数、つなぎ方がそのように設計されたのかを考えさせ、話し合わせる。そのことで、これまで、ただ指定された大きさや数、向きで乾電池をつなぎ、動かしたり明かりをつけたりしていた物に対して、電流の大きさや働く時間の長さという新たな見方で生活に見られる事象を見ることができるようになる。</p>
<p>2 観察し、結果や考えを共有する。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【直列つなぎ】</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【並列つなぎ】</p> </div>	<p>2 扇風機のリモコンは単四電池2個で直列つなぎだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・懐中電灯は、単一電池6個を、しかも直列つなぎで使っていたよ。 ・時計は、単三2個が直列だ。 ・全部直列つなぎだったね。並列つなぎの道具はないのかな。 ・それでも、懐中電灯は、少しでも長持ちするように単一のように大きな乾電池を使っていたね。 ・あれ、エアポンプだけ並列つなぎだ。どうしてなのかな。 ・エアポンプは、生き物の命に関わるから、単一電池を並列つなぎにして、長持ちさせていると思う。 ・並列つなぎの物もあるんだね。 	<p>3 乾電池を用いる道具のほとんどが直列つなぎだったことを受けて、他には、どのような物が並列つなぎであると考えられるのか、また、そのように考えた理由をノートに記述させる。</p> <p>そのことで、<視点1>既習や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を発想する「関係付ける力」の育成を図るとともに、<視点2>学びを生かし、生活を理学的に見たり考えたりしながら「学びを活用する」ことができるようにする。</p> <p>※学びを生かし、生活を理学的に見たり考えたりすることができたか。 (主体的に学習に取り組む態度)</p>
<p>3 広げる。</p> <p><視点1・2> 学びから生まれた新たな疑問に対する、根拠を明確にした自分の考えを記述する学習感想</p>	<p>3 他の並列つなぎの道具は何かな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・並列でつないでいる時計もあると思う。その方が長持ちして、電池の取り換えが少なくなるから。 ・家にある電池式のラジオはどうか。災害時にも使える物だから。 ・なぜ直列つなぎばかりなのかな。 ・並列つなぎは電流の大きさが乾電池1個分だから足りないのかな。 ・いろいろな物で調べてみたいな。 	

第6学年2組 理科学習指導案

日時 令和2年11月9日(月) 3校時
場所 理科室1
授業者 吉田 航也

1 単元名 変わり続ける大地

2 本時のねらい

地震に伴う液状化現象が起きやすい大地のつくりについて実験結果を基に考え、表現することができる。

3 本時の学習過程 (本時 6/6)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
1 問題 予想と実験方法を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 含んでいる水の量, 土の粒の大きさが違うのが原因かな。 	<p>前時での液状化しやすい条件の予想やそれを確かめる実験方法について振り返らせる。実験で使うものはこちらで調整しておき, 子供が必要な条件のものを選んで使えるようにしておく。</p>
液状化現象はどのような土地で起こるのだろうか。		
2 実験し, 結果を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> 土の量も同じにしないといけない。 液状化するまでの時間で比べよう。 砂の方が早く水が上がってきた。 土の方はあまり様子が変わらない。 水の量が多い方は水がたくさん上がってきて, ドロドロになっていた。 	<p>二つの結果から考察を書くように投げかけ, 多面的に事象を捉えられるようにする。グループで考察を見せ合い, 根拠が含まれているか, 結論が間違っていないかを話し合わせる。そうすることで, 根拠を含めた客観性の高い考察を書くことができるようにする。発表させた際, 考察に含まれる根拠の部分が分かるように, 板書の結果に印をつける。根拠を示して考察を書くことを価値付けしていく。</p>
3 考察する。 ＜視点1＞ 客観的な考察を書くための話し合い	<ul style="list-style-type: none"> 土と砂を比べた時に砂の方が, たくさん水が上がってきたことから, 砂の方が液状化が起りやすい。 水が多いものと少ないもので比べた時, 多いほうがドロドロになったから, 水が多いほうが液状化しやすいことが言える。 液状化が起りやすい条件がそろっている土地ってどんな土地だろう。 川の下流は砂地で水が多いから液状化が起きやすそうだね。 	<p>※実験結果を基に, 液状化が起こる条件について考え, 表現することができたか。 (思・判・表: ノート・発言)</p>
4 まとめ, 広げる。 ＜視点2＞ 仙台と鬼怒川付近のハザードマップの比較	<ul style="list-style-type: none"> なぜこの部分だけ危険度が高いのだろう。 今の地図・航空写真とハザードマップだけでは分からないぞ。 他の資料で調べる必要がある。 形が川だし, 川とつながっている。 昔の地図を見ると危険度が高い所は川だったことが分かる。 昔川だったところを埋め立てて, 住宅にした土地だから液状化しやすいのかな。 仙台にも同じような所はあるかな。 	<p>仙台のハザードマップを提示し, 自分が考えていた土地の危険度が高いかを確認させる。そうすることで, 実験から分かったことを客観的に捉え, 事象を一般化することができるようにする。次に, 茨城県下妻市のハザードマップを提示する。地図や航空写真と比較することで川の近くより, 液状化の危険度が高い地域があることに気付かせる。実験で調べたことを基に要因を考えさせる。危険度が高い地域の形が川とつながることから, 資料として過去の地図の必要性に気付かせる。ハザードマップと昔の地図を比べ, その地域が川を埋め立てた地域であることを確認させる。そうすることで, 液状化の危険度を知るためには, 現在の状態だけでなく, 過去の土地利用など多面的に見ていくことが必要であることに気付かせ... 学びを深めさせる...</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校生活科で考える「本質に迫る授業」>

関わり合いを通して、気付きの高まりを感じられる授業

前研究の成果として、生活科の学習において「主体的に学ぶ」や「自分の思いや願いをもつ」という姿が見られている。しかし、生活科の学習を通して、子供自身が「気付きの高まり」を感じているかについては課題が残っており、改善していくことができればと感じている。「気付きの高まり」を子供自身が感じていなければ、生活を自分との関わりとして捉え、よりよい生活に向けて実現していこうとすることはできない。これでは、生活科の究極の目標『自立し、生活を豊かにしていく』というへとつなげることも難しいのではないかと考えた。

「気付きの高まり」を子供自身が感じるためには、まず、子供が豊かな気付きを得られるような体験活動を設定する必要がある。そして、それらの豊かな気付きを比較したり、分類したり、関連付けたりすることを通して、子供の気付きを質的に高めていくようにする。さらに、互いに共有する振り返り活動を通して、子供が自らの気付きを言語化することで、「気付きの高まり」を子供自身が感じることができるようになると考える。

また、子供がこのような気付きを獲得するためには、対象や人と関わること、つまり「関わり合い」が基盤になる。これらのことを踏まえ、本質に迫る授業を「関わり合いを通して、気付きの高まりを感じられる授業」とした。

※「関わり合い」「気付きの高まり」について、以下のように定義することとした。

- 【関わり合い】 ⇒ 対象との関わりだけでなく、互いの思いや考えに触れたり、相手意識をもって活動や表現をしたり、協働したりすること。
- 【気付きの高まり】 ⇒ 無自覚だった気付きが自覚されたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすること。

以上のことを踏まえ、次のように研究仮説を設定した。

<研究仮説>

次の三つの視点から手立てを講ずれば、関わり合いを通して、気付きの高まりを感じられる授業となり、生活科で目指す子供の姿を具現化することができるだろう。

【視点1】熱中したり没頭したりできる体験活動の場の工夫

学習材の良さを引き出すために、触れたり作ったり遊んだりすることを楽しむ環境を設定し、繰り返し試したり挑戦したりできるようにすることで、活動への意欲や工夫を生み出していけるようにする。

【視点2】新たな気付きを得るための教師の働き掛け

体験から得た気付きから広がりを生み出していけるよう、対象の比較、分類、関連付けをしていくことで、新たな気付きを考えたり獲得したりすることができるようにする。

【視点3】観点を示した表現活動の設定

教師が観点を示して振り返る活動を設定し、自らの気付きや新たな気付きを言語化して表現することで、対象との関わる良さを実感させていく。

(柴生 彰)

- 1 小単元名 図書かんってすてき（公共） ～一緒に絵本を作ろう（幼小連携）～
- 2 本時のねらい
完成した絵本を読み合うことを通して、その絵本の良さを実感したり、感謝されることで自分自身の成長に気付いたりしようとしている。
- 3 活動過程

主な活動の流れと子供の意識	指導上の配慮事項（※は評価の観点）
<p>1 活動への見通しをもつ。 <視点1></p> <p>これから発表会だね。年長さんと読むのが楽しみだな。</p> <p>これまでたくさん話し合っって絵本を作ってきたね。</p> <p>年長さんが、出来上がった絵本を喜んでくれるといいな。</p>	<p>【視点1】 熱中したり没頭したりできる体験活動の場の工夫</p> <p>これまでの活動の様子を振り返ることができる映像での視覚化</p> <p>2年生が主体となった発表会にできるよう、進行も含め、子供が進めていけるようにする。初めてペアで遊んだり一緒に本を読んだりした様子、関わりを深めてきたことで、絵本作りに挑戦し、内容を考えたり一緒に絵を描いたりして交流してきた様子などを映像にし、活動してきたことを振り返らせることで、これまでの学びを想起できるようにする。そして、完成した絵本を披露し、その絵本で発表会をすることを伝える。</p> <p>【視点2】 新たな気付きを得るための教師の働き掛け</p> <p>絵本の良さをより実感できるための伝え合い活動</p>
<p>かんせいした絵本のはっぴよう会をしよう</p> <p>2 思いをもって対象と関わる。 <視点2></p> <p>みんなに分かりやすく伝えるために少しゆっくり読もうね。</p> <p>自分たちが作った絵本が楽しいと言ってもらえてうれしいな。</p> <p>みんなが喜んでくれたよ。頑張っって絵本を作っってよかったな。</p>	<p>1つのグループに2年生と園児が2～3名ずつおり、これまでそのグループで絵本作りを行ってきた。完成した絵本を基に、他のグループに読み聞かせを行う活動を設定する。読み聞かせを行う前に、グループ内で登場人物を読む子供、お話を読む子供など役割分担を確認し、一度練習を行う。その際、どのように発表したらよいかについて考えさせ、読み手に伝わるような声の大きさや表現方法についてグループで確認をする。そして、読み聞かせ後に絵本の内容や発表のよかったところなど、感想を伝え合う場を設ける。そうすることで、これまでグループ内のみで楽しんで来た絵本が、聞き手にとっても楽しむことのできる価値あるものだと気付かせていく。</p> <p>【視点3】 観点を示した表現活動の設定</p>
<p>3 気付きを共有し振り返る。 <視点3></p> <p>楽しかった思い出を、みんなで作ったお話で伝えよう。</p> <p>年長さんでも、ぼくたちが考えつかないアイデアがたくさんあってびっくりしたよ。</p> <p>年長さんに喜んでもらっってうれしいな。頑張っってよかった。</p> <p>幼稚園の先生の話聞いて、頼りにされたことがわかってうれしいな。</p>	<p>感謝の気持ちを表現する場の設定</p> <p>絵本作りを行ってきたグループが全部で11ある。そこで、それぞれの制作した絵本の主役のキャラクターを取り入れたお話づくりを行っておき、それを感謝の気持ちとして表現する場を設定する。お話の内容は、小学校で活動をしているものとし、園児に小学校へ入学することへの安心感をもたせることができるようにしていく。合わせて、感謝の気持ちを歌でも表現する。そして、これまで活動してきたことの感想を園児が2年生へ伝えることで、園児にとって、2年生に優しく教えてもらったことへの感謝や憧れの気持ちをもたせ、これまで関わってきた良さを実感できるようにしていく。最後に、年長児の担任から2年生の頑張りを認めてもらうことで、感謝される喜びを感じたり、自分自身の成長を実感したりできるようにしていく。</p> <p>※ 完成した絵本を読み合うことを通して、絵本の良さを実感し、感謝される喜びを感じたり、自分自身の成長に気付いたりしようとしていたか。</p> <p>（注：発表、行動、表情やつぶやき）</p>

生活科実践例①

1 学年 3 組 生活科学習指導案

授業者 新田 佳忠

1 小単元名 「はっけん！むかしのくらし」

2 本時の活動

(1) 本時のねらい

地域の方々との関わりを通して、昔の子供の暮らしについて知り、昔の暮らしのすごさや良さに気付こうとしている。

(2) 活動過程

主な活動の流れと子供の意識	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 活動の見通しをもつ。〈視点1〉</p> <p>これまで、おじいさん、おばあさんからの手紙にあった「宿題」について考えてきたよね。</p> <p>今日は、おじいさんおばあさんたちにたくさん質問したいな。</p> <p>むかしのくらしについてきいてみよう</p>	<p>【視点1】熱中したり没頭したりできる体験活動の場の工夫</p> <p>活動の目的を明確に意識させる導入の工夫</p> <p>地域の方々から頂いた手紙を提示し、本時までは、その手紙の内容を受けて「今と昔の遊びの違い」や「今と昔の暮らしの違い」について考えてきたことを確かめる。そして、本時では昔の子供の暮らしについて地域の方々に質問をして調べていくことを知らせ、本時の活動の目的を明確に意識させるようにする。</p>
<p>2 思いをもって対象と関わる。〈視点2〉</p> <p>昔の子供は、どんなふうに学校や家で過ごしていたのかな。</p> <p>お手伝いでは縄作りをしていたのだね。自分で道具を作っていたのか。</p> <p>お小遣いで買った筆箱を、今でも大切に使っているのか。</p> <p>昔は、兄弟がだまさんいただのだね。年も近いから友達みたいで楽しそう。</p>	<p>【視点2】新たな気付きを得るための教師の働き掛け</p> <p>具体物を通して問いを解決させる活動の設定及び今と昔の子供の暮らしを比較できる板書計画</p> <p>子供に質問したいことをあらかじめ決めさせておき、インタビュー形式で活動を進めていく。地域の方々に質問に答えてもらう際には、昔の子供がしていたお手伝いを体験させたり、昔のお弁当の実物を提示したりすることで、昔の子供の暮らしへの関心を高めながら、今と昔の暮らしの違いに気付かせていく。子供が分かったことや気付いたことは、板書を通して視覚化し、今と昔の子供の暮らしを比較しながら考えさせる。板書を基に「今と昔では、どのようなところが違いますか」と問い掛けることで、それぞれの暮らしの相違点に目を向けさせるようにする。</p>
<p>3 気付きを共有し振り返る。〈視点3〉</p> <p>昔は、今よりも兄弟が多かったのだね。友達がいて楽しそうだね。</p> <p>昔の子供は、お手伝いを頑張ってお小遣いももらっていたのだ。自分のお金で買った物だから大切にしていたのかな。</p> <p>昔の人は、自分の暮らしを良くするために、工夫をしていたんだね。</p>	<p>【視点3】観点を示した表現活動の設定</p> <p>昔の暮らしのすごさや良さに気付かせる振り返り活動</p> <p>「昔の子供のくらしで、すごいな・いいなと感じるところはどこですか」と問い掛けることで、今の暮らしとの違いを踏まえながら昔の暮らしのすごさ・良さに気付かせながら、自分の生活を振り返らせていくようにする。最後には、地域の方々から、「昔の暮らしのすごさや良さ」について話を聞き、新たな気付きを促したり、次時の学習につなげたりすることができるようにする。</p> <p>※ 地域の方々との関わりを通して、昔の子供の暮らしについて知り、昔の暮らしの良さやすごさに気付こうとしていたか。(知・技：発表、行動、表情やつぶやき)</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校音楽科で考える「本質に迫る授業」>

音楽の面白さや美しさを感じ取り、生き生きと音楽活動に取り組む授業

本校音楽科で捉える児童の実態は以下の通りである。

【これまでの成果】
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常的に合唱活動に取り組んでいる <ul style="list-style-type: none"> → 歌唱表現の活動に意欲的 ・ 楽譜上の記号や用語に沿って音楽表現の工夫を考えることに意欲的
【課題】
<ul style="list-style-type: none"> ・ 感じ取ったことと聴き取ったことを関連させて音楽表現の工夫を考えることが不十分 <ul style="list-style-type: none"> → 着目する音楽的な要素が限定的 → 感じ取ったことと聴き取ったことを関連付けて考えることが不十分 → 発達段階が上がるにつれて消極的 ・ 技能面での個人差が大きい <ul style="list-style-type: none"> → 演奏することだけで精一杯で、音楽表現を楽しむところまで到達しない

音楽を形づくっている様々な要素に着目し、感じ取ったことと聴き取ったことを関連付けて考える学習活動に重点を置き、一人一人が思いをもって表現できるようにしたいと考え、「音楽の面白さや美しさを感じ取り、生き生きと音楽活動に取り組む授業」を音楽科の本質に迫る授業として設定した。

音楽の授業で学びを成立させるためには、自ら楽しんで音楽活動に取り組むことが大切である。そこで、視点1では、授業の導入に焦点を当てる。視点2は、表現への思いをもたせるために、音楽の様々な要素を感じ取ったり、気付いたりすることに焦点を当てる。音楽表現への思いをもたせるためには、音楽表現に必要な技能の習得も支えとしていく。視点3では、音楽表現を高めていくために、お互いの音を聴き合って演奏したり、友達の演奏を受けて自分の思いを伝えたりするなど、協働して音楽を作り上げていく喜びや一体感を味わわせるための活動や、活動形態に焦点を当てて視点を立てた。

<研究仮説>

次の3つの視点から手立てを講ずれば、「音楽の面白さや美しさを感じ取り、生き生きと音楽活動に取り組む授業」となり、音楽科で目指す姿を具現化することができるだろう。

【視点1】音楽活動への意欲を喚起する教材との出合せ
楽しい音楽活動を通して学ぶことへの意欲を喚起する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 選曲の工夫 ・ 曲の提示の仕方の工夫 ・ 範唱、範奏の音源や聴かせ方の工夫 など
【視点2】曲想と音楽の構造との関わりに気付かせるための教師の働き掛け
音楽を形づくる様々な要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、感じ取ったことと聴き取ったことを関連付けて考えさせ、表現への思いをもてるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 掲示物や拡大譜等による視覚的支援 ・ 感じ取ったことと聴き取ったことを結び付ける教師の言葉掛けや価値付け など
【視点3】協働して音楽活動を行う場の設定と音楽的なコミュニケーションを図るための工夫
協働して音楽活動をする場を設け、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションの充実を図り、音楽表現を高める。 <ul style="list-style-type: none"> ・ リレー唱での演奏 ・ 演奏の聴き合い ・ 拍を共有する身体表現を伴う活動 など

(早坂英里子)

第4学年2組 音楽科学習指導案

日時 令和2年 10月 22日(木) 3校時
場所 音楽室I
授業者 宮澤 莉奈

- 1 単元名 いろいろな音のひびきを感じ取ろう
- 2 本時のねらい
木管楽器の音色や旋律の特徴と曲想との関わりを感じ取って聴くことができる。
- 3 本時の学習過程 (本時4/8)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 木管楽器について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前に勉強した金管楽器と名前が似ているね。 ・できている素材が違うのか。 ・どんな音の違いがあるのかな。 ・フルートの音は聴いたことがあるよ。 	<p>1 木管楽器の仕組みなどについて紹介し、楽器はそれぞれ音色の違いがあることを伝える。</p>
<p>2 木管楽器の音色について考える。 <視点2></p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>曲想と音楽の構造との関わりに気付かせるための教師の働き掛け</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;"> <p>木管楽器の音色に注目してきこう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の楽器とは違うね。 ・低い音がするよ。 ・一つ目とは違って、少し明るくなったよ。 ・音がゆらゆらとしていて、水に中にいるようだね。 ・音が上がったり下がったりしているぞ。 ・高い音で音が細かいから、小さい動物のように感じたよ。 ・先ほど音がゆらゆらとしていたように感じたから、2つ目の楽器は魚の様子を表しているのかな。 ・フルートは小さいから、細かい音も出しやすそうだね。 ・ファゴットは、低い音で、重い感じの音も出せるからおじいさんの様子を表すために、びったりだね。 	<p>2 木管楽器が表している動物のシーンの旋律だけを聴かせる。(おじいさん：ファゴット、あひる：オーボエ、猫：クラリネット、小鳥：フルート)</p> <p>1回目に聴く際は、音色だけに集中して聴かせる。その後、子供たちが聴いて感じたことや気付いたことをまとめていく。2回目に聴く際は、4つの旋律は、それぞれ生き物の様子を表していることを伝え、音色から感じたことや気付いたことと、生き物の様子を結び付けながら聴かせ、発表させる。</p> <p>例：「1つ目の楽器は、高い音でたくさん動いていたので、小鳥が飛んでいるように聴こえました」その後、それぞれどんな動物を表していたかを伝える。また、それぞれ聴いた曲は、「ピーターと狼」という物語の音楽の一部であることも伝える。3回目に聴く際は、それぞれの楽器名を伝え、楽器の名前と音色の特徴を合わせた状態で聴かせる。聴く観点を変えながら、何度も聴かせることで、木管楽器の音色を深く味わわせるようにさせる。</p>
<p>3 本時の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラリネットの、不思議な感じの音色が面白かったな。 ・どのような楽器でも、音色の特徴とイメージをつなげて聴くと面白いね。 ・今日出てきた楽器は、どのような感じで曲の中に出てくるのかな。早く聴いてみたいな。 	<p>※木管楽器の音色や旋律の特徴と曲想との関わりを、感じ取って聴くことができたか。</p> <p>(思・判・表：ワークシート・発言)</p> <p>3 本時で聴いた楽器の中から、好き・面白かった楽器とその理由をワークシートにまとめさせ、振り返りとする。次の時間では木管楽器の音色を味わいながら、曲全体を聴いていくことを伝える。</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校図画工作科で考える「本質に迫る授業」>

表現を味わい、こだわりをもって意味や価値をつくりだす授業

本校図画工作科では、教科の本質を【こだわりをもって意味や価値をつくりだすこと】と捉え、この本質に迫るために上記のような授業を展開していきたいと考えた。

図画工作科では、自分の見方や感じ方などを基にしながら表現をしたり鑑賞をしたりする活動を通して、自分のアイデアを生み出し、それを実現させる創造力を高めることが大切であると考えた。また、AI技術が劇的に進歩する中、人間独自の感性を磨いたり、創造性を養ったりする上での図画工作科の果たす役割は大きい。

そのために、以下のことを大切にすることで、本質に迫る授業の実現を図っていきたい。

①「表現を味わう」

こだわりをもって活動を行うためには、まず、形や色及び素材などの造形的な要素の働きについて考える「味わう力」と、他者の作品や造形物などの鑑賞を基にアイデアを膨らませる「味わう力」を高めながら自己の表現につなげることが大切であると考えた。

②「こだわりをもって意味や価値をつくりだす」

具体的に膨らませたアイデアを表現するために、材料の生かし方を見付けたり、表現方法を選んだりしながら、納得のいく表現を追求する「こだわる力」を高め、さらにそのこだわりに確たる意味や価値を見出させることで、より一層感性や創造力を引き出すことができると考える。

上記の本質に迫る授業を行うことで、以下のように学校教育目標にある子供像を目指したい。

「たくましさ」＝自分の膨らませたアイデアを、納得のいく表現にするまで追求をする「こだわる力」を大切にすること

「しなやかさ」＝形や色及び素材、そして他者や造形物などを基にしてアイデアを膨らませる「味わう力」を大切に、自己の表現に生かそうとする子供

以上のことから、図画工作科が目指す本質に迫る授業を「表現を味わい、こだわりをもって意味や価値をつくりだす授業」と設定し、研究を進めていくこととする。

<研究仮説>

造形的なよさや面白さに迫る題材を設定し、以下のような視点から手立てを講じれば、子供は表現のよさや造形的な働きを味わったり、こだわりをもって自分が納得のいく表現を追求したりしながら、自分にとっての意味や価値をつくりだすことができるようになるであろう。

【視点1】

造形的なよさを味わわせる鑑賞活動

子供が表現を味わうようにするためには、以下の手立てを講じ、表現のよさや造形的な働きに着目させ、子供が主体的に表現について見たり考えたりする力を高める必要があると考えた。

- ・教師による表現のフィードバック
- ・観点を焦点化した作品の提示や鑑賞活動
- ・表現のプロセスを追体験させるアイデアノート
- ・感じたことを伝え合うギャラリートーク
- ・作品のよさを伝える題名や紹介の記述 など

【視点2】

表現へ向かうこだわりのもたせ方・深めさせ方

子供がこだわりをもって表現し続けるためには、以下の手立てを講じ、自分が追求したい思いをもたせたり深めたりさせる必要があると考えた。

- ・教師による子供の表現の見取りと問い掛け、価値付け
- ・表現のプロセスを振り返り、表現に生かすアイデアノートの活用
- ・想像力を刺激し、発想を引き出す場の設定
- ・技能を高め、発想を引き出す「試し」の時間設定 など

第1学年3組 図画工作科学習指導案

日時 令和2年8月26日(水)3校時
 場所 図工室1
 授業者 奈須野 かなえ

1 題材名 ぼく・わたしだけのうみのせかい

2 本時のねらい

しゃぼん玉でつくった海の模様を生かして、パスを使って海の中の様子を絵に描く活動を通して、自分が想像した海の世界を表現することができる。

3 本時の学習過程(本時 3/5)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
1 前時で作成したしゃぼん玉アートとワークシートを振り返る。 <視点2> こだわりを深めさせるための、ワークシートの活用と技法の提示	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな色の海があるね。 ぼくは魔法の海にしたかったから、カラフルな水の模様にしたよ。 私は、かわいいお魚たちの海にしたかったから、ピンク色の海にしたよ。 私は、かき氷の海にしたいから、夏休みに家族で食べたかき氷の色にしたよ。 みんなの色には秘密があるね。 薄い色に濃い色を重ねると模様も描けそうだな。 泡の形が魚の形に見えてきたぞ。ぬりつぶさないで、縁取りだけでも描けそうだな。 	1 前時にしゃぼん玉でつくった海の模様とどんな海の世界にするかアイデアを書いたワークシートを振り返り、それぞれの思いに合った色を選んでつくったことを確かめることで、思いを大切に描いていくように意識させる。 また、パスを使った描き方や模様の生かし方を提示し、色の重ね方や塗り方などパスには様々な使い方があることに気付いたり、泡の形を様々な角度から見たりして、自分の思いに合った色や描き方を選ぶように促す。 2 活動中は、児童の思いや色や形の意図を聞き、表現を価値付けして回る。 また、それぞれの思いに合った色や形のよさを紹介する。そうすることで、自分の作品に自信を持たせたり、こだわりを持って思いを表現することのよさに気付かせたりする。さらに、パスの様々な描き方のよさを生かして表現している作品を取り上げ、紹介する。そうすることで、自分の作品に合う描き方を考えながら、つくることを意識させる。 ※しゃぼん玉でつくった海の模様を生かして、パスを使って海の中の様子を絵に描く活動を通して、自分が想像した海の世界を表現することができたか。 (作品、活動の様子)
2 パスを使ってイメージした海の中の世界を描く。	<ul style="list-style-type: none"> ぼくは見たこともないきれいな色の魚をたくさん泳がせよう。 海の水もカラフルだから、きれいな色の魚がいるともっときれいだね。 私は、色を重ねてお花柄の魚を描いたよ。海の中に咲いているお花は、花びらや葉っぱが魚の形だよ。 魚型のお花が面白いね。かわいい海の生き物もたくさんいるね。 私は、泡の形をそのまま残して周りだけなぞってかき氷にしたよ。かき氷を食べている魚たちは濃く塗って目立たせたよ。 	「作品のいいところを探そう!」という時間を設定して、思いと色や形のつながりに着目させながら、いくつか作品を全員で鑑賞する。そうすることで、色や形を工夫することが思いを表現することへつながることに気付かせる。このように、全員で観点を絞って鑑賞することで作品を見る目を養い、今後の鑑賞活動の土台をつくっていく。その後、ワークシートと作品を見比べて、自分の思いが色や形に表されているか振り返りをさせ、次回の活動の見通しを持たせる。
3 自他の表現を鑑賞し、本時の活動を振り返る。 <視点1> 発想と表現のつながりを味わわせる鑑賞と振り返りの工夫	<ul style="list-style-type: none"> カラフルな水の中に住んでいる魚もみんなカラフルで、本当に魔法の海みたいだね。 いろいろな海の世界があって面白いね。 今度はみんなの海の世界をたくさん見てみたいな。 	4 班で協力して、片付けるように促す。
4 後片付けをする。		

じぶんのせかいにぴったりのいろやかたちをみつけてかこう。

図画工作科

第4学年3組 図画工作科学習指導案

日時 令和2年10月13日(火) 3校時
場所 図工室II
授業者 日野 暢

1 題材名 ゆらゆらバランスとれるかな？

2 本時のねらい

広げた考えを基に色や形及び材料を選び、揺れる仕掛けを生かした作品づくりをすることができる。

3 本時の学習過程(本時 2/5)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 前時に作成したアイデアスケッチと、自分の作品を振り返る。</p> <p><視点1> 装飾とバランスの2つを意識しながら、作品づくりを進める工夫</p>	<p>1・バランスをとるためには、ワイヤーの左右の長さを同じぐらいに調節するんだっとな。</p> <p>・ワイヤーの端につける飾りの重さで、左右の長さは変わるね。</p> <p>・テーマに合わせて、ペットボトルとおもりの飾りを考えよう。</p> <p>・前の時間に仕掛けを確認しながらかいたアイデアスケッチを見ながら作ろう。</p>	<p>1 単元の導入で作成させたアイデアスケッチを手元に置かせ、それを意識させながら作品づくりを進めさせる。</p> <p>ゆらゆら揺れ動くためにはワイヤーとおもりの関係を考えることが必要であると確認した後、自分の発想に合わせた色や形、材料を選んで作るように促す。</p> <p>作品を作るためには以下の活動をすることを知らせる。</p> <p>①ワイヤーの左右につけるおもり(飾り)を作ること。</p> <p>②自分のテーマに合わせたペットボトルの飾り付けを行う。</p> <p>この活動の①と②のうち、自分の発想に合わせた方から作品づくりを進める。</p>
<p>2 アイデアスケッチを基に、自分が決めた作品づくりに取り組む。</p>	<p>2・海がテーマだから、ペットボトルの中の水にも色を入れてきれいにしたいな。</p> <p>・水は見せたくないな。ペットボトルの中が見えないように、紙を貼ってきれいに仕上げよう。</p> <p>・宇宙をテーマにアイデアスケッチをかいたから、それに沿っておもりを作っていこう。バランスがとれるかな。</p>	<p>2 活動中は、児童の思いや色や形の意図を聞き、表現を価値付けして回る。</p> <p>その際、自分の発想を表現している児童を取り上げる。そうすることで、色や形にこだわると、より自分の思いを表現した作品ができることに気付かせる。</p> <p>また、丁寧さを意識している児童の作品を取り上げる。そうすることで、美しさにもこだわった作品づくりの大切さにも気付かせる。</p>
<p>3 他の友達の作品を鑑賞し、自身の作品づくりに生かす。</p> <p><視点2> 活動の間に鑑賞を入れ、自身の作品を振り返る工夫</p>	<p>3・まだ飾り付けをしていない部分だ。こういう方法もあるんだな。</p> <p>・ワイヤーでうまくバランスを取る工夫が分かったぞ。</p> <p>・水に色を入れてもきれいになるね。他にもペットボトルの中に何か入れられないかな。</p> <p>・キャップを隠すのと、ワイヤーが落ちない工夫がいいな。</p>	<p>※広げた考えを基に色や形及び材料を選び、揺れる仕掛けを生かした作品づくりをすることができたか。</p> <p style="text-align: right;">(作品、活動の様子)</p> <p>3 グループの形(3~4人)で活動を行っているので、まずは自分のグループの友達の作品の良さを見付けさせる。その後、自由に鑑賞し合うことで、作品づくりの幅を広げさせる。</p> <p>その後、揺れる動きの生かし方に注目して鑑賞させることで、発想の広がりにも気付かせる。</p>
<p>4 後片づけをする。</p>		<p>4 グループで協力して、片づけをするように促す。</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校家庭科で考える「本質に迫る授業」>

自分の家庭生活をよりよいものにしようと生活事象を追究し、家族の一員としての成長を実感する授業

平成30年3月に5,6年生に行った意識調査では、「実習の結果を基に、自分の家庭生活ではどうかと考え、自分の家庭生活に合うように工夫することができるか」という問いに対して、88%の子供が「できる・どちらかといえばできる」と答えた。これは、これまで題材の中に自分の家庭生活に合わせた工夫を考えさせる場面を意図的に設定してきたことの成果であると考えられる。しかし、「家庭科の学習が自分(家族)の生活を快適にしたり豊かにしたりしていると感じることはあるか」という問いについては、「とても感じる・感じる」と答えた児童は71%(61%)にとどまっている。これには、以下のような要因があると考えられる。

- ・題材の学習が、子供自身の問題解決的な学習に十分になっていなかったため、学習後の自らの実践に繋がらなかった。
- ・生活の快適さや豊かさとは何なのか、子供に具体的な生活の状態や家族の姿と結び付いたものとして捉えさせることができていなかった。

問題解決的な学習を充実させるとともに、家族の一員としての成長を実感させることができれば、自分の家庭生活をよりよいものにしようと絶えず実践を続ける子供を育てることができると考える。それは、学校教育目標である「たくましく、しかも、しなやかな子供」の具現化にも繋がるであろう。

以上のことから、本校家庭科で考える「本質に迫る授業」を、「自分の家庭生活をよりよいものにしようと生活事象を追究し、家族の一員としての成長を実感する授業」と設定した。

家庭科

<研究仮説>

以下のような視点から手立てを講じれば、子供が自分の家庭生活をよりよいものにしようと生活事象を追究し、家族の一員としての成長を実感できるようになるであろう。

<p>【視点1】 子供の「知っているつもり」「分かったつもり」を揺さ振る働き掛け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・題材や一単位時間の導入場面において、家庭生活の様子や生活経験を振り返らせる中で、「どうなっているのか」「どうすればよいのか」といった疑問を持たせる資料提示や問い掛けを行い、子供の「知っているつもり」を揺さ振る。そうすることで、生活事象に対する追究意欲を高めさせていく。 ・実践的・体験的活動によって得た結果を比較させたり、その結果と実際の生活場面を結び付けさせたりすることで、子供の「分かったつもり」を揺さ振る。そうすることで、生活事象に対する理解を深めさせていく。
<p>【視点2】 学習による変容や家庭での実践結果に対する価値付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実践した事実や技能の向上(例:朝食づくり→調理時間や栄養バランスを考えて朝食を作ることができた)だけでなく、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築といった複数の視点で教師が実践を価値付けることによって、自身の成長や実践による家庭生活の変化を感じやすくさせ、家族の一員としての成長を感じられるようにする。 ・題材の学習過程において、「できるようになったこと」や「次に取り組みたいこと」など、適宜自分の学習状況を振り返らせる。その際、教師が成長を認めたり次の活動の見通しを持たせたりする声掛けを行うことで、自分のめあてを明確にさせていく。

(高橋 大地)

第5学年3組 家庭科学習指導案

日 時 令和2年10月13日(火) 2校時
場 所 家庭科室
授業者 高橋 大地

1 題材名 はじめてみようクッキング～花山でカレーライスを作ろう～

2 本時のねらい

切り方を変えたじゃがいもとにんじんをゆでることを通して、食材の大きさや厚さとゆで時間との関係、食材への火の通り方を理解することができるようにする。

3 本時の学習過程(本時 4/8)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 学習の学習課題を確かめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ごろっとのじゃがいもとにんじんは、10分間くらい掛かりそう。 ・小さいのは3分間くらいで柔らかくなりそう。 ・じゃがいもよりのにんじんの方が固いから、長く時間が掛かりそう。 	<p>1 前時には、カレーライスに入れると想定して、じゃがいもとにんじんを切っている。</p> <p>○じゃがいも、にんじん(半月切り) …半分に切る。各班で「ごろっと(大きめ)」「中くらい」「小さめ」を意識して、それぞれ考えた大きさや厚さに切っている。</p> <p>題材の1時間目に共有した「野菜が固いカレーライスにならないようにしたい」という思いを思い出させ、「それぞれ、どれくらいの時間で中まで火が通って柔らかくなるか」と投げ掛け、学習課題を確かめさせる。</p>
<p>中まで火を通し、野菜をやわらかくしよう。</p>		
<p>2 じゃがいもとにんじんをゆでる。</p> <p>3 ゆでた結果を共有する。</p> <p><視点1> 「分かったつもり」を揺さ振る問い掛け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・予想した時間になったけれど、まだ固いな。 ・ごろっとはまだまだ掛かりそう。 ・厚くなったり大きくなったりするほど、火が通るまでの時間が長くなると言えるね。 ・確かに大きい方にも火は通るけれど、長い時間火を通してると小さい方は崩れてしまうと思う。 ・大きさは出来るだけ揃えないと、火の通り方が変わってしまうよ。 ・じゃがいもとにんじんの大きさが極端に違くないようにすれば、同じくらいの時間で中まで火が通ると思う。 	<p>2 中まで火が通った状態を、「竹串を真ん中に刺したときにすっと通る状態」とさせる。班ごとに中まで火が通るまでの時間を予想させた後、1つの鍋に切ったじゃがいもとにんじんを入れて、ストップウォッチで中まで火が通るまでの時間を調べさせる。</p> <p>3 「厚くなったり大きくなったりすればするほど、中まで火が通る時間が長くなる」という理解が実際の調理で生かすことのできるものではない場合を、「分かったつもり」の段階と考える。そこで、「小さいものと大きいものが混ざっていたとしても、大きいものに火が通る時間でゆでれば良いのではないか」「じゃがいもとにんじん、同じくらいの時間で中まで火を通したいときは、どうすればよいか」と問い掛け考えさせることで、ゆで時間と切り方との関係性や食材の火の通り方についての理解を深めさせていく。</p>
<p>4 カレーライス作りにどう生かせるか考える。</p> <p><視点2> 学習内容を生かしてカレーライス作りの工夫を考えたことに対する価値付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・火が通るまで時間がかかるから、ルウを入れる前に時間をかけて火を通すようにしたい。 ・野菜が柔らかいおいしいカレーライスにしたいから、じゃがいもとにんじんの大きさが同じくらいになるように切って、どちらにもしっかりと火が通るようにしたい。 ・じゃがいもだけ見た時に、切る大きさがばらばらだと火の通り方が違ってくるので、大きさをそろえて切るようにしたい。 ・時間を掛けて火を通し、大きな野菜がごろっと入ったおいしいカレーライスを作りたい。 	<p>4 再度、「野菜が固いカレーライスにならないようにしたい」という思いを思い出させ、「今日の学習で分かったことを、カレーライス作りにどのように生かしたいか」と問い掛ける。「野菜の大きさや厚さとゆで時間との関係性や食材の火の通り方の理解」を調理の工夫に生かせるようになった成長を価値付けるとともに、学習を生かせば目指すカレーライスを作ることができることを伝え、実践に向けての意欲を高めていく。</p> <p>※食材の大きさや厚さとゆで時間との関係、食材への火の通り方を理解することができたか。 (知・技：発言、ノート)</p>

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校体育科で考える「本質に迫る授業」>

誰もが前のめりに運動し、運動のおもしろさを味わう授業

本校体育科では、体育科の本質を【運動のおもしろさを味わうこと】と捉え、この本質に迫るために上記のような授業を展開していきたいと考えた。

体育科を学ぶ意義として、学習指導要領にある「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」へ寄与することを大切にしたいと考えた。そこで、各運動のおもしろさを存分に味わい、近い未来では学習後も、遠い未来では卒業後も、学習において出会った運動に取り組みたいと思えることが大切だと考えた。

そのために、以下のことを大切にすることで、本質に迫る授業の実現を図っていききたい。

①「誰もが前のめりに運動する」

運動のおもしろさを味わうためには、まず、生活経験の差により学習前から存在する技能差を念頭に置き、運動が得意な子だけが楽しむのではなく、基本的な動き方が分からず運動を苦手としている子も、誰もが前のめりになって運動することができる学習基盤を整えることが必要だと考える。

②「運動のおもしろさを味わう」

運動のおもしろさとは、対象とする運動の特性を理解したり、体現したりしてみる中で実感できる楽しさと捉えている。周囲の人よりも上手く取り組んでいることを『できる』と捉えるのではなく、運動の特性の部分に触れることが『できる』子供を育てることを大切にしていきたいと考える。

上記に書いた本質に迫る授業を行うことで、以下のように学校教育目標にある子供像を目指したい。

たくましさ＝すぐに結果を求めず、粘り強く運動のおもしろさを掴もうと学習に立ち向かっていける子供
 しなやかさ＝上手くできた動きだけに価値を見出すのではなく、上手くできなかった動きと目指す動きとを比較して捉え、惜しい所までできていたことにも柔軟に気付くことができる子供

以上のことから、体育科が目指す本質に迫る授業を『誰もが前のめりに運動し、運動のおもしろさを味わう授業』と設定し、研究を進めていくこととする。

体育科

<研究仮説>

次の二つの視点から手立てを講じれば、「誰もが前のめりに運動し、運動のおもしろさを味わう授業」となり、体育科で目指す子供の姿を具現化できるだろう。

【視点1】 技能差に影響されない教材の設定

生活経験の差による学習前から存在する技能差に影響されずに、誰もが前のめりに運動に取り組むためには、教材の工夫が必要となってくる。そのために、運動の特性は押さえたまま、技能差に影響されずに取り組むことができる教材を設定していく。

【視点2】 運動の特性を理解・体現する場面の工夫

運動の特性の部分に触れることが『できる』子供を育てるためには、運動の特性を教師が明らかにし、学習の中で子供がそのことを理解したり、体現したりする場面を設定することが必要となってくる。そのために、ICT機器などを使用して視覚的に捉えさせる場面を設定したり、タスクやドリルゲームなどを用いて実際に動いて実感させる場面を設定したりしていく。

(黒田 栄彦)

第4学年4組 体育科学習指導案

日時 令和2年7月29日(水) 3校時
場所 体育館
授業者 黒田 栄彦

- 1 単元名 投げて、つかんで、飛び込んで ～アルティメット(ゴール型ゲーム)～
- 2 本時のねらい
攻撃に転じた際、ボール非保持者はゴールに向かって動き出し、パスをつなぎ合うことができる。
- 3 本時の学習過程(本時 6/8)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 タスクゲーム①に取り組む。</p> <p>2 目指す動きを共有する。 ＜視点2＞ 前時の好プレー鑑賞タイム</p>	<p>1・前回よりも、遠い距離から走り込んでゴールエリアに入れたぞ。 ・だんだんパスを正確に渡せるようになってきた。</p> <p>2・ディスクを奪った時、他の2人はゴールに向かって走り出したぞ。 ・ディスクを持っている人と、ゴールの間に二人がそれぞれ立ってパスをつないでいる。 ・自分たちもああやってパスを回せるように今日はやってみよう。</p>	<p>1 「ドックランパス」に取り組み、動きながらパスをもらうことや相手との距離を考えてパスを出すなどの基本的な技術の習熟を図る。</p> <p>2 学習でねらっている動き(自分のチームが攻撃に転じた際、ボール非保持者が得点を取るためにゴールに向かって動き出し、パスをつなぎ合う動作)が取れているチームの様子を撮影した映像を見せる。そうすることで、ボールを持っていない時のよい動きのイメージをもたせ、子供の課題「より得点を取るための方法」克服の見通しをもたせていく。</p>
<p>ボールを持っていない時のよい動き方を見付けよう。</p>		
<p>3 タスクゲーム②に取り組む。 ＜視点1＞ ボール非保持者の動きを身に付けさせるタスクゲーム</p>	<p>3・僕がボールを取って始まった時は、Aさんに先にボールを渡すからBさんは、その先に走って、ボールをもらう準備をしておいてね。 ・私たち2人でボールをパスし合いながら、ゴール近くまで運んで行くからCさんとはとにかくまずゴールエリアに走って最後のパスをもらう準備をしておいてね。 ・実際にやってみたらゴールまでパスが届かなかったから、もう少し近い距離でやろう。 ・私たちのチームはこの順番でパスを回すことに決まったぞ。</p>	<p>3 「ランダム口回しパス」に取り組み、最初にボールを受け取った子供を起点とし、自分たちで決めたパスを出す順番でパスをつなぎ合いながら、決められた回数の中でゴールエリアに向かってボールを運ぶ速さを競って遊ぶゲームに取り組む。そうすることで、攻撃に転じた際、ボール非保持者がどのように動くのか、あらかじめ決めた通りに動く練習を積み重ねていく。また、ゴールエリアに運ぶまでのパスの回数を制限して速さを競わせることで、ボールを保持してから素早いパス回しをすることについても意識させていく。</p>
<p>4 今日の試合に取り組む。</p>	<p>4 (授業後に期待する学習感想)</p> <p>○練習したようにパスをつないで得点を決めることができた。</p> <p>◎途中でボールを取られてしまい、練習でやったようなパスを出す順番にはならなかったけれど、仲間がボールをもった時、すぐ攻撃に切り替えることができた。</p> <p>◎今まではとにかく走ってパスをつなぐことだけだったけれど、自分も点を取るためのプレイに参加することができた。</p>	<p>4 学習のまとめとして試合に取り組ませ、練習の成果を試させる。実際の試合なので試合の状況によっては、パスを回す順番など決めた通りではなくなることも大いに考えられる。それよりも、自分たちが攻撃側に転じた際、すぐに相手ゴールを目指そうと動きや意識を変えられることができたについて、学習後に振り返らせることを大切にしたい。</p> <p>※攻撃に転じた際、ボール非保持者はゴールに向かって動き出し、パスをつなぎ合うことができたか。(知・技)</p>

第5学年2組 体育科学習指導案

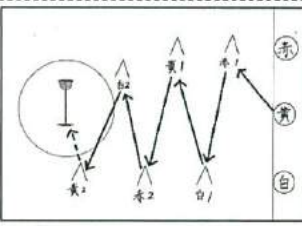
日時 令和2年10月12日(月) 2校時
 場所 体育館
 授業者 本郷 真哉

1 単元名 回して、くずして、切り込んで ～ゴール型ゲーム～

2 本時のねらい

ボールを常に動かしながら、ダンクエリアまでボールを運ぶことができる。

3 本時の学習過程(本時 7/9)

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
1 目指す動きを共有する。 <視点2> 前時の好プレー鑑賞タイム	1 ・迷っていない。もらったらずぐにパスを出している。 ・パスを出したら、空いている所にすぐ走っているぞ。 ・パスを受ける前から、他の人の動きを見ているな。 ・素早くパスを回すと、囲まれずにダンクできるぞ。	1 前時の子供のプレーから、学習でねらっている動き(スピーディーなパス回し)ができているチームの様子を撮影した映像を見せる。その際、その動きの静止画をいくつか提示し、子供たちにその間の動きを考えさせる。そうすることで、映像を鑑賞する際の視点を焦点化し、映像をもとに良い動き方のイメージをもたせ、本時のめあてをもたせていく。
スピーディーなパス回しをしよう。		
2 タスクゲームに取り組む。 <視点2> スピーディーなパス回しに必要な動きを身に付けさせるタスクゲーム	2 ・パスを出したら、次の場所へすぐ移動してパスを受ける準備をしないとイケないな。 ・パスを受けて、すぐパスするためには、受ける前に次の人の場所を確認すればいいのか。 ・次の場所へ走りながら、次の人の場所を確認しておけば、余裕をもってパスすることができそうだ。 ・周りを見ながらプレーすると、スムーズにパスが回せるぞ。 ・こうやってスピーディーなパスが回れば、試合でもダンクを決められそうだ。	2  左図のような『スピードナンバーパス』に取り組ませる。パスを出してすぐ次の場所へ移動したり、パスを受ける前に次にパスを出す方向を確認したりさせることで、ボールを常に動かしながら、ダンクエリアまでボールを運ぶことができるようにしていく。また、ダンクを決めるまでの時間を競わせることで、よりスピーディーなパス回しで得点を決めることを意識させていく。
3 試合に取り組む。	3 (授業後に期待する学習感想) ○これまでより、素早くパスを回すことができた。 ◎これまでは止まってから次のプレーを考えていたけれど、すぐにパスを出したら、仲間がフリーの状態でダンクを決めることができました。 ◎受けてから、すぐにパスすることができたので、エリア付近の仲間が相手のマークを崩してボールを受け取り、得点を決めました。	3 学習のまとめとして試合に取り組ませ、本時の活動の成果を試させる。試合では、守備者がいるため、思ったようにパスが回せない状況も考えられるが、それよりもスピーディーなパス回しを目指そうと、動きや意識を変えることができたかについて、学習後に振り返らせることを大切にしたい。 ※ボールを常に動かしながら、ダンクエリアまでボールを運ぶことができたか。 (知・技)

体育科

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校英語科で考える「本質に迫る授業」>

外国語を通して、よりよいコミュニケーションを図ろうとする子供を育てる授業

これからを生きる子供には、国際社会を生きる広い視野と、国際的な理解と協調性が求められている。そのため、英語科では、世界中の人々ともたくましく自分の考えを伝えたり、他者や相手の情報や場面、状況に応じて、しなやかに会話を継続したりするなど、外国語を通して、よりよいコミュニケーションを図ろうとする子供を育てる教科として、ますます重要な役割を担っていくものとする。

本校では、低・中学年の慣れ親しみを目標とした活動型と、高学年のできることを目標とした教科型を総称して英語科として取り組んでいる。本校英語科では前研究を通して「主体的に学ぶ姿」を求めて実践を重ねてきた。その結果、子供は Clear Voice や Nice Smile など相手を意識して伝えようとする姿が見られるようになった。しかし、子供の姿から次のような課題も見られた。

- ・相手や他者への配慮が Clear Voice や Nice Smile, Eye contact などの態度面に留まり、話の順序や質問を繰り返す等、相手や他者に配慮した話し方をしようとする姿が見られない。

- ・既習の言語材料を用いて、即興的に相手とコミュニケーションを図ろうとすることが難しい。

子供が英語の定型表現を覚えてアウトプットしてだけでなく、既習の表現を用いて、相手や他者に配慮しながらコミュニケーションを図る姿を目指したいと考えた。ここで言う「よりよいコミュニケーション」とは、低・中学年では、相手に配慮をし、“Nice smile” “Good gesture” “Clear voice” “Eye contact” などの態度面の工夫をしてコミュニケーションを図ること、高学年では、態度面の工夫に加え、他者に配慮し質問をしたり、自分の考えを伝えながら質問を継続したり、情報が伝わりやすい順序を考えて話の構成を考えてやり取りをするなど、既習の言語材料等も用いて、自分の思いや考えを、相手の立場になって伝えようとするものと捉えた。

<研究仮説>

子供の思いや興味・関心を生かしながら授業の単元を構成し、次のような視点から手立てを講ずれば、既習の言語材料を用いて、相手や他者に配慮し、よりよいコミュニケーションを図ろうとする子供を育てることができるであろう。

【視点1】即興性を培うための既習の言語材料を用いた言語活動の設定

既習の言語材料を用いて自分の思いを表現させる際、即興性を培うために低・中学年では“How are you?” Time, 高学年では Small talk などの言語活動を設定し、教師の話題の提示の仕方や活動の在り方を工夫することで、既習の言語材料を用いて自分の思いを表現し合い、よりよいコミュニケーションを図れるようにする。即興性は、短期間で身に付くものではないことから、低学年では、使用する言語材料に親しむこと、中学年では、既習の言語材料を繰り返し使用することで慣れ親しむこと、高学年では、5年生では聞くことを中心に、6年生ではやり取りを継続したり、既習表現を選んで使うことを中心に取り組みせ、既習の言語材料を用いながら話の流れを意識したやり取りをさせることで即興性を培っていく。

【視点2】相手・他者に配慮してよりよいコミュニケーションを図るための観点の提示

よりよいコミュニケーションにするために、次の二つ側面から、子供に働き掛けていく。一つは、Sharing での観点の提示である。相手や他者に配慮したやり取りにしていけるために、低・中学年では、態度面の観点を示したり、高学年では相手に応じた尋ね方の工夫や、既習の言語材料を用いて会話を継続させる工夫などを観点として与えたりすることで、よりよいコミュニケーションを図れるようにする。これらの観点は、毎時間行うものではなく、単元の新出の言語材料に十分慣れ親しんだやり取りを行う場面で設定していく。もう一つは、振り返りの場面での観点の提示である。振り返りでは、Sharing で共有したやり取りの際の工夫点がどうであったかを振り返らせていく。

(尾形尚子)

日時 令和2年10月12日(月) 3校時
 場所 5年4組 教室
 授業者 阿部 一矢 ALT 繪森 エリザ

- 1 単元名 Unit5 Where is the post office? 【オリジナルタウンで道案内をしよう】
- 2 本時のねらい 道案内という場面において、相手の興味に合わせた案内をすることができる。
- 3 本時の学習過程(本時 6/8)

主な活動の流れ	HRT's actions (H) / ALT's action(A) / Student's actions (S)	指導上の配慮事項と視点との関わり(※は評価の観点)
1 Greeting 2 Small talk (視点1)	H: Hello. A: Hello. H: This is my dream town. A: Where is the library? H: Ok. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight. You can see it on your right. A: Thank you.	1 はじめの挨拶を通して、英語の授業への意欲を高めるようにする。 2 HRTがALTに道案内の表現を用いて、オリジナルタウンを案内する場面を提示する。 ＜視点1からの手立て＞ 【即興性を培うための既習の英語表現を用いた言語活動の設定】 既習事項を生かす Small talk の活用 児童が考えたオリジナルタウンについて、前時までの活動を生かして基本的な道案内を行わせる。聞かれていることを理解し、相手に伝わりやすいように道案内をさせるようにする。 HRTとALTの会話を聞かせた後に、HRTと児童、ALTと児童で会話をする。HRTとALTは児童とやりとりするとき、語尾を繰り返すなどしながら、学級全体に聞かせることで、十分なインプットを与えるようにする。その後、ペアで自分のオリジナルタウンを用いて道案内を行わせる。
3 Today's goal 相手の興味のある場所に道案内しよう。	【デモンストレーションを行う】 (A) H: Hello. A: Hello. H: This is my dream town. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight. You can see it on your right. Library! A: Thank you. (B) H: Hello. A: Hello. H: This is my dream town. Do you like books? A: Yes. I like books. H: OK. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight. You can see it on your right. Library! A: Thank you.	3・4 Small talkとは異なる2つの会話を聞かせる。“Do you like~?”を入れることで、相手に配慮した会話になっていることに気が付かせ、児童にGoalを示す。更に、インプットを増やすために、もう一度、(B)の会話をHRTとALTで聞かせる。その後、再び、HRTと児童、ALTと児童で会話をする。その後、ペアで自分のオリジナルタウンを用いてActivityを行わせる。
4 Activity	H: Hello. A: Hello. H: This is my dream town. Do you like books? A: Yes. I like books. H: OK. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight. You can see it on your right. Library! A: Thank you.	＜視点2からの手立て＞ 【相手・他者に配慮してよりよいコミュニケーションを図るための視点の提示】 相手の興味に応じた話し方を意識させるための視点の提示
5 Sharing (視点2)	H: Hello. A: Hello. H: This is my dream town. A: Dream town!! Good. H: Do you like books? A: Yes. I like books. H: OK. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight. You can see it on your right. Library! A: Oh. Good. Thank you.	5・6 1回目のActivityに取り組ませた後、よりよいコミュニケーションを図らせるために、Sharingの時間を設定する。相手の興味を尋ねながら、やりとりをしていた姿を共有する。その際、どのような表現を使っていたか、なぜそのような表現を使ったか問いかけ、その良さを全体で共有する。更に、相手が言ったことに対して聞き手がReactionをすることで、よりよいコミュニケーションにつながっていくことを実感させ、再度Activityを行わせる。
6 Activity	S: Do you like~を使うことで、相手の興味に沿って道案内をすることができました。 S: コミュニケーションを取るためには聞き手も大切だと分かりました。	※ 道案内という場面において、相手の興味に合わせた案内をすることができたか。 (愿・判・表:Activity, 発言, 振り返りの記述)
7 Comments and Farewell (視点2)		7 最後の振り返りでは、「相手の興味に合った道案内」を観点に、どんな表現を使って、どのような良さを感じることができたかの振り返りを行わせる。話し手が相手の興味に合ったやりとりをする良さや、より良いやりとりは話し手と聞き手の両者が相手に配慮することであることを実感させていく。

- 1 単元名 Unit5 地球に暮らす生き物について考え、伝えよう【Let's save the Earth.】
- 2 本時のねらい 話す順序を考えたり表現を付け足したりして、自分の思いが伝わるような発表の工夫を考えながら、伝えることができる。
- 3 本時の学習過程(本時 7/8)

主な活動の流れ	Teacher's actions (T) / Student's actions (S)	指導上の配慮事項と視点との関わり(※は評価の観点)
1 Greeting 2 Small talk (視点1)	T: What did you eat for dinner last night? I ate ~. How about you? (児童同士で聞き合う) S: I ate~. T: Was it tasty? S: Yes, it was.	1 はじめの挨拶を通して、英語の授業への意欲を高めるようにする。 <視点1からの手立て> 【即興性を培うための既習の英語表現を用いた言語活動の設定】 既習表現を生かす Small talk の活用 2 昨日食べたものについて話題を投げかける。その際、相手に問い掛ける表現や様子を詳しく伝える表現を用いてスピーチさせることで、それらの表現を振り返らせ、本時のスピーチに生かすことができたり、既習表現を用いて他者に配慮したやりとりを即興的に行ったりすることができるようにする。
3 Today's goal 自分思いが伝わるようにスピーチを工夫しよう。	T: This is a sea turtle. Sea turtles live in the sea. Sea turtles eat jelly fish. Sea turtles eat plastic bags. Let's pick up garbage. S: 住んでいる場所をはじめに伝えた方が良いかな? S: 生き物の食べ物のことを言った後に問題を言った方が分かりやすいよ。 S: 食べ物の問題だから、同じ食べているもの話題を繋げた方がいいね。	3・4 留学生に向けて地球に暮らす生き物についてスピーチを行うことを確認する。また、スピーチを行う上で、児童と共にスピーチの順序を考え、入れ替える様子を見せ、学習した順序ではなく、スピーチの流れに沿って構成することで自分の思いが伝わるスピーチにするとする。その後、児童が調べた生き物について学習してきた表現を使ってスピーチを構成させる。 <視点2からの手立て> 【相手・他者に配慮してよりよいコミュニケーションを図るための観点を提示】 自分思いがより相手に伝わるためのスピーチ原稿の工夫
4 Activity	S: もっと聞いている人に興味をもってもらえるようにこれまでスピーチで使った表現を自分のスピーチに入れられないかな?	5・6 1回目のSharingでは、自分が調べた生き物について発表するスピーチ原稿を再度振り返り、順序を入れ替えることでより分かりやすく伝えられるという良さを実感させる。また、どうして順序を入れ替えたのかを問い掛け、スピーチにおいて他者に自分の思いが伝わりやすくするためには順序を意識してスピーチを構成することが必要であることに気付かせる。さらに、2回目のSharingでは、これまで学習した聞き手に問い掛ける表現や、様子を詳しく伝える表現を提示してスピーチを作らせることで、相手の興味を尋ねたり、相手の理解を確認しながらスピーチを行ったりすることが今回の場面において、効果的であることに気付かせ、他者に配慮したスピーチをすることができるようにする。
5 Sharing (視点2)	S: This is a bear. Bear is strong. Bears live in the forest. What do bears eat? Bears eat plants. Bear can't eat plants. Let's plant trees.	
6 Activity		
7 Comments and Farewell (視点2)	S: 順序を考えることで、相手に分かりやすいスピーチにすることができました。 S: 今までスピーチで使ってきた表現が今回のスピーチでも使えることが分かりました。相手に尋ねる表現を入れることで興味を持ってもらえるスピーチにすることができました。	※ 話す順序を考えたり表現を付け足したりして、自分の思いが伝わるような発表の工夫を考えながら、伝えることができたか。 (思・判・表:発言, 原稿, 振り返りの記述) 7 最後の振り返りでは、「自分の思いが伝わるスピーチの工夫」を観点に、自分の思いがより相手に伝わるためにスピーチをどのように工夫したかを振り返らせ、本時の学びを実感させる。

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校道徳科で考える「本質に迫る授業」>

道徳的価値について自他と対話して考え、
よりよい生き方を探究していく授業

道徳科が目指すものは、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳教育は道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うことを求めている。また、道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものとされている。本校道徳科では、その道徳的価値について自他と対話しながら多面的・多角的に捉え、よりよい生き方を探究していくことこそが、道徳科における「本質に迫る授業」であると考えた。このような「本質に迫る授業」を通して、次のような子供の育成を目指していきたい。

「たくましさ」＝「分かっているけれどできない」というような人間の弱さを理解しつつも、その弱さに立ち向かい、よりよく生きようとする子供
「しなやかさ」＝自他と対話して考える中で、今までになかった新たな考えを受け入れた上で、よりよい生き方を探究しようとする子供

「本質に迫る授業」を求めて実践を重ねてきた昨年度の研究を通して、道徳科の授業の中で、教材に浸り、登場人物の気持ちを共感的に考える姿、自らの価値観や生活経験を根拠として発言する姿、本時に話し合ったことを根拠に自己の生き方についてこれからしていきたいことなどを記述する姿が見られた。その一方で、次のような課題も見られている。

- ・既存の価値観を基にした発言、本音ではなく、よいと分かっているような建前を發表させるにとどまる授業に終始してしまうことがある。
 - ・授業で捉えた道徳的価値について、子供に生活と関連付けさせて、生き方を見つめさせようとする余り、生活経験を想起させるにとどまり、自らよりよい生き方を考えさせるに至らないことがある。
- これらの課題は、ねらいとする中心価値について子供たちに本当の意味で自分事として考えさせられていないことや、価値観について新たな気づきを促すことができていない、自己のよりよい生き方を見つめさせる場面を適切に設けられていないなど、教師の授業づくりに改善の余地があることを示している。よって本研究では、以下の視点を設定して道徳科の本質に迫る授業を追究していくこととする。

<研究仮説>

以下の二つの視点から手立てを講ずれば、「道徳的価値について自他と対話して考え、よりよい生き方を探究していく授業」に近付き、学校教育目標の具現化に迫ることができるだろう。

<p>【視点1】中心価値に向かう発問と問い返し 子供が、道徳的価値について自他と対話しながら多面的、多角的に捉えられようにするためには、ねらいとする価値に迫る発問や発問構成を吟味すること、中心発問や補助発問における子供の反応に対して中心価値に向かう問い返しをすることが必要だと考えた。</p>
<p>【手立ての例】 ・多様な価値観を引き出したり、子供の相互の思考を関連付けたりする発問、問い返し ・価値観について新たな気づきを促して思考を広げる発問</p> <p style="text-align: right;">など</p>
<p>【視点2】自己の生き方について考えさせる活動の設定 子供に自己のよりよい生き方を探究させるためには、教材に自分を重ねて考えさせたり、自己の生き方について考えさせたりする場面を適切に設定することが必要であると考えた。</p>
<p>【手立ての例】 ・教材の人物が取った行動を生んだ心について考えさせ、その心を実感させる場面の設定 ・授業で捉えた道徳的価値と自分の生き方を関連付ける振り返りの設定</p> <p style="text-align: right;">など</p>

道徳科

(阿部辰朗)

第3学年1組 道徳科学習指導案

日時 令和2年8月6日(木) 3校時
場所 3年1組教室
授業者 牧野 裕可

1 主題名 公平に接することのよさ C-(12)【公正, 公平, 社会正義】

教材名 みさきさんのえがお

2 本時のねらい

不公平な態度が周囲に与える影響を考えることを通して、誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平に接しようとする態度を育てる。

3 本時の学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点)
<p>1 友達との関わりから問題意識をもつ。 ○仲良しの友達から「自分の分だけ給食を増やして」と頼まれたらどうするか。</p> <p>2 教材を読み、話し合う。 ○すぐに返事ができなかった時、ぼくはどんな気持ちだったか。 ◎もししゅんやさんに貸していたら、この後はどうなっていくだろうか。</p> <p><視点1> 不公平な態度が周囲に与える影響について、他者視点をもたせるための発問と問い返し</p> <p>3 公平に接することのよさを考える。 ○公平に接する人がたくさんいるクラスはどんなクラスになるか。</p> <p>4 今日の学習を振り返る。 <視点2> 学びを自覚させ、自己の生き方と関連付ける振り返り</p>	<p>1・量を増やす。断って嫌われたくないから。 ・断る。みんな平等にしないといけないから。 ・迷う。やってはいけないのは分かるけど…。</p> <p>2・だまっていればみさきさんには分からないはずだ。 ・断ってしゅんやさんに嫌われたくない。 ・先に頼まれたみさきさんに貸した方がいいのは分かっているけれど…。</p> <p>・ぼくはみさきさんに悪いことをしたと後悔する。 ・みさきさんはそのことを知ったら嫌な気持ちになる。 ・ぼくは信用されなくなる。 ・仲が悪いクラスになって、楽しくないクラスになるかもしれない。</p> <p>3・みんな仲良しなクラス。 ・争いが無いクラス。 ・安心して生活できるクラス。</p> <p>4・公平に接するとこんなにいいクラスになるのだと分かった。仲の良い友達を特別扱いせず公平にしていきたい。 ・みんなが安心して生活できるように、これからも公平に接したい。</p>	<p>1 自分の好みで不公平な態度をとってしまいそうな場面を想起させ、自分事として捉えさせ、「誰に対しても公平に接することのよさは何だろうか」という本時のテーマに向き合わせながら学習を進められるようにする。</p> <p>2 朗読する前に教材のあらすじを伝え、ぼくが立たされている状況を把握させ、共感的に考えられるようにする。すぐに返事ができなかった時のぼくの葛藤を捉えさせるために、ぼくの気持ちを「心の物差し」で可視化させる。葛藤を対比的な板書で示し、公平な判断をすべきと分かっているにもかかわらずできない人間の弱さに気付かせる。本をみさきさんに貸すことを選択したぼくが、みさきさんの笑顔を見てうれしくなったことを押さえた上で、「もししゅんやさんに貸していたら、この後はどうなっていくだろうか」と問い、この後を予想させることで不公平な態度が周囲に与える影響について考えさせる。子供の発言に対して適宜問い返していくことで、不公平な態度が当事者だけでなく周囲にも影響を及ぼし、人間関係や集団生活に支障を来すことにつながることに気付かせる。</p> <p><予想される問い返し> ・嫌な思いをするのはみさきさんだけか。 ・みんなは不公平な態度をとるぼくと友達になりたいと思うか。 ・不公平な態度をとる人がいるクラスはどんなクラスになるか。</p> <p>3 「公平に接する人がたくさんいるクラスはどんなクラスになるか」と問うことで、公平に接することの価値に気付かせる。</p> <p>4 ①公平に接することのよさについて分かったこと、②これからどうしていきたいかの観点を与え、公平に接することのよさを生活に生かしていこうとする思いを高めさせる。</p> <p>※不公平な態度は当事者だけでなく周囲にも影響を与えることに気づき、誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平に接していこうとする気持ちを高めることができたか。</p> <p style="text-align: right;">(道徳ノート、発言)</p>

第5学年3組 道徳科学習指導案

日時 令和2年10月9日(金) 2校時

場所 5年3組教室

授業者 阿部 辰朗

- 1 主題名 相手の立場に立った心遣い B-(7)【親切, 思いやり】
- 2 教材名 フィンガーボール (出典 吉沢 久子作「生きた礼儀と死んだ作法による」)
- 3 本時のねらい
対話を通して, 親切という行為の在り方について考える。
- 4 本時の学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は 評価の観点)
<p>0 教材「フィンガーボール」に出会い, 問いを立てる。 <視点1> 授業の主題を子供自身が探究したい主題とさせる問いの設定</p>	<p>※予想される子供の問い ・女王はどんな気持ちでフィンガーボールの水を飲んだのか。 ・もしみんなが女王だったらどうするか。 ・女王様が行ったことは親切か思いやりか。 【本時の問い】 ・親切か思いやりは何を基準にしているのか。 ・親切はなぜ大切なのか。 ・私たちはどのようなときに親切にするか。 ・親切か思いやりはなぜあるのか。 ・5-3が, 今大切にしたい思いやりや親切な行動は, 。</p>	<p>0 事前に, 朝や帰りの会等の時間を活用して, 教材を読み聞かせ, 子供に探究したい問いについて立てさせる。それぞれの子供が出した問いから, 全員で話し合いたい問いについて投票で選ばせ, 自分の考えを書かせる。</p>
<p><ここから本時> 1 教材「フィンガーボール」を読む。 2 対話をするためのルールと思考ツールについて確認する。 3 問いを確認する。 女王様が行ったことは親切か思いやりか。 4 対話をして, 問いについて考える。 <視点1, 2> 親切を多面的, 多角的に捉えさせ, 新たな気づきを促して, 自己の生き方を考えさせる問い返し 5 今日の学習を振り返る。 <視点2> 学びを自覚させ, よりよい生き方を見つめさせる振り返り</p>	<p>・女王はなぜフィンガーボールの水を飲んだのかな。 ・自分だったらどうするか。 ・みんなの考えを尊重する。 ・話している人を見て聞く。 ・親切か思いやりの違いについて考えたいな。</p> <p>・親切か思いやりかどちらかではなくて, どちらもだと思う。 ・それぞれに違いはあるのかな。 ・思いやりは相手を思う気持ちで, 親切は行動ではないかな。 ・お客様に, 恥をかかせないように, 黙っておこうかな。 ・お客様のことを考えれば, 教えたほうが次に失敗しなくてよいのではないかな。 ・相手を見守ることも親切だよ。 ・親切の形はさまざまあるのだな。 ・どれも相手のことを考えている。 ・行動は違っても, 思いやりの気持ちがあれば親切になるよ。 ・相手を思う気持ちから生まれた行動が親切なのではないかな。 ・友達の話聞いて, 新しい発見があった。 ・助けることだけが親切だと考えていたけれど, 友達の話聞いて, 見守ることも親切だと分かった。 ・相手にとって, 何をすることがよいことか考えていきたいな。 ・目をつないで考えを受けとめてくれたから安心して話せたな。</p>	<p>1 教材を読ませ, 話合いが本時のねらいとする道徳的価値へと向かうように, 人物の関係や出来事, 人物の立たされた状況を関係図で確認する。 2 対話のルールを確認することで, 「セーフティー (安心, 安全)」な状況で, 対話をすることや思考することができる場, 雰囲気をつくらせていく。また, グッドシンキングツール (思考ツール) を提示して対話をさせることで, 問いに対して, 新たな気づきを促して思考を広げるきっかけにさせる。 3 問いを確認し, 提案した子供の思いを聞かせることで, きっかけとなった出来事や理由を捉えさせる。 4 人を思いやること, 親切という行為のよさについて考えさせるために, 以下のように問い返し, 相互の思考を関連付け, 新たな気づきや思考を促す。 <予想される質問や問い返し> ・もし自分が女王だったらどうするか。 ・それぞれ行動が違うけれど, 共通点は何か。 ・どのような思いが親切につながるのだろう。 など 5 対話での学びをこれからどう生かしていきたいかについて記述させる。その後, 次の点から振り返りをさせることでよりよい対話の仕方を考えさせる。 振り返り (相手の角度で示す 上げる/下げる) ①自分の意見を話せたか。 ②友達の話をよく聞くことができたか。 ③安心して, 話す, 聞く, 考えることができたか。 ④新しい気づきはあったか。 ※ 対話を通して, 相手の立場に立つことや人を思いやることのよさに気づき, 親切という行為の在り方について考えることができたか。 (道徳ノート, 発言)</p>

道徳科

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<本校特別活動で考える「本質に迫る授業」>

生活上の課題を自分事として見つめ

よりよい集団生活や自己の実現に向けて主体的に活動する授業

本校特別活動部では、共生社会でよりよく生きていくために、他者と協働しながらよりよい学級や学校生活をつくる力を養うことを目指している。共生社会とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。子供にとって、学校は様々な人と人が関わり合う一番身近な社会であると言えるだろう。その身近な社会である学校生活の中で本校の子供は意見の折り合いがつけられなかったり、多様な考えや立場を認められなかったりすることがある。また、自己を客観的に捉えることができず、課題を見出したり、自己の生き方について考えを深めたりすることに課題を抱える子供も少なくない。本校特別活動部では、「本質に迫る授業」を通して、これらの課題を解決していきたい。

〈目指す子供の姿〉

- ・自らの生活上の課題を見つけて話し合いの場を求め、自分の意見や立場を明確に伝えるとともに、実践活動において友達と協力しながら目的を達成しようとする姿
- ・自分とは異なる多様な考えや立場を認めながら、自分の意見に折り合いをつけて話し合いや実践をする姿

<研究仮説>

以下の手立てを講じて学級活動の授業を実践活動と共に行えば、子供は生活上の課題を自分事として見つめ、よりよい集団生活や自己の実現に向けて主体的に活動できるようになるだろう。

【視点1】解決する必然性のある題材設定

子供が生活上の課題を自分事として見つめられるようにするためには、以下のような手立てを講じ、解決する必然性のある題材設定を行っていく必要があると考えた。

- ・議題カードと議題ボックスの活用
- ・議長団と教師による議題の事前吟味
- ・アンケート調査などを活用した学級の実態の可視化 など

【視点2】より納得できる合意形成や意思決定

子供がよりよい集団生活や自己の実現に向けて合意を形成したり意思決定を行えるようにするために、以下のような手立てを講じ、より納得できる合意形成や意思決定を行えるようにしていく必要があると考えた。

- ・全員が話し合いに参加できるようにするための工夫
- ・議題に立ち返らせる教師の問い返し など

(鹿内 隆世)

第2学年2組 特別活動学習活動案

日時 令和2年10月14日(水) 3校時
場所 2年2組教室
授業者 安倍 彰人

1 題材名 ながれぼしプロジェクトの活動内容を決めよう

2 本時のねらい

学級名に込めた思いの「こうなりたい」という姿を達成するための活動内容を考え、学級で話し合い、合意形成を図ることができる。

3 本時の学習過程(本時 2/3)

主な活動の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項(※は、評価の観点)
<p>1 本時の議題を確認する。 <視点1> 学級全員による議題の吟味</p>	<p>1 今日(○)になるための活動内容を決めるのだったな。 ・ながれぼし学級に近づくための活動って何だろう。 ・どんな活動になるか楽しみだな。 ・ながれぼし学級に近付けるかな。</p>	<p>1 前時の学級活動で学級目標の振り返りを行う。その際、学級目標に込めた「こうなりたい」という思いを明らかにしていく。複数出てきた考えを焦点化させていくことで、切実感をもたせていく。</p>
<p>ながれぼしプロジェクトの活動内容を決めよう。</p>		
<p>2 提案理由を確認する。</p> <p>3 話し合いをする。 ○中間多数決を採る。 <視点2> 中間多数決の実施と教師の発問 ○多数決を採る。</p>	<p>2 ながれぼし学級に近づくための活動を決めたいな。 ・○になるための活動を決めたいな。</p> <p>3 僕は、お楽しみ会がいいです。理由は、お楽しみ会をするとみんなの仲がもっとよくなるからです。 ・私は、○がいいです。理由は、～だからです。 ・私は○に賛成です。理由は～だからです。 ・他の人は、こう思っているのか。どうしてだろう。 ・もっと考えを聞いてみたいな。 ・自分たちの考えは提案理由に合っているのかな。 ・僕は○がいいと思います。提案理由にある、～に合っているからです。 ・○と△△を合わせるのはどうでしょうか。 ・新しく○という考えはどうですか。</p>	<p>2 提案理由を明確にさせることで、話し合いの論点が逸れないようにする。</p> <p>3 一人一人の意見は事前に議長団で集約させ、提示しておいたり、活動する時間や場所など、「決まっていること」も明確にしておいたりすることで「比べ合う」の時間を十分に確保する。</p> <p>中間多数決を採ることで他者の考えに触れさせる。一部の考えに多数決の票が偏ったり二分したりした際には、教師が改めて議題と提案理由に立ち返って考えることができるような発問を行う。そうすることで、多様な考えや立場が認められ、折り合いのついたよりよい合意形成に近づけていけるようにする。</p> <p>【具体的な発問例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この結果を見てどう思う。 ・こっちの人たちの考えはどうなるかな。 ・この考えは提案理由に合っていないのかな。
<p>4 決まったことの発表をする。</p> <p>5 話し合いの振り返りをする。</p>	<p>4 ○になるための活動内容が決まってよかったな。</p> <p>5 友達のことを聞いて、自分の考えが変わりました。 ・学級をよくするためにたくさんの考えが出てよかったです。 ・実際にプロジェクトをするのが楽しみです。</p>	<p>※学級名に込めた思いの「こうなりたい」という姿を達成するための活動内容を考え、学級で話し合い、合意形成を図ることができたか。 (思・判・表：発言、振り返りカード)</p>

特別活動

学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」

<CS科で考える「本質に迫る授業」>

情報やコンピュータの特性を実感し、デジタル社会の歩き方を見いだす授業

本校ではCS(コンピュータ・サイエンス)科を新設した。コンピュータやプログラムを題材とし、探究的な学習を通して情報の科学的な理解を促すこと、各教科等で生かすことができるコンピュータを前提とした情報活用能力を育むことを目指していく。

○情報やコンピュータの特性を実感する

便利な生活を実現する上で、コンピュータが欠かせない存在となっている。コンピュータやデジタル化された情報を題材として扱い、その特性について体験的に捉えたり、そのよさに気付いたりしていくことは、コンピュータを主体的に活用する上での基礎となるものである。また、デジタル化された情報の特性を見いだす学習の過程において、CS科ならではの見方・考え方を養うことが期待できる。

○デジタル社会の歩き方を見いだす

説明書がなく直感的な操作が可能なデジタル機器が広く普及したことで、その仕組みを知らなくとも便利な生活を送ることができるようになった。しかしその一方で、直感だけに頼った操作がもたらすリスクも増えている。デジタル化が進む社会を、よりよくより安全に主体性をもって生きていくには、デジタル化された情報やコンピュータについての特性を踏まえて判断する経験が欠かせないと考える。

児童の実態から

本校児童の実態として、タブレット端末やスマートフォン等のコンピュータを、家庭において利用している経験は少なくない。直感的な操作を通して、コンピュータの様々な機能を見いだしたり、使い方を考え出したりすることができる児童も多い。また、プログラミングの活動に対しては、意欲的・対話的に学ぶ姿が見られている。その一方で、次のような課題がある。

- ・各教科等の学習の様々な場面において、「コンピュータが活用できる」という感覚をもてていない
- ・学習に用いるアプリケーションの操作やキーボードタイピングの技能など、授業での学習スキルにおける個人差が大きい
- ・日常の中でコンピュータやプログラミングがどう生かされているか意識する経験が少ない
- ・直感的な操作に頼るところが大きいため、不適切な使用により生ずる社会的なリスクについて考えることができない

これらの課題を解決する上で、CS科の果たせる役割は大きい。既存の教科では扱うことが難しかったコンピュータに関する題材を中心に据えて授業を構想していく。各学年の発達段階に応じて育成すべき情報活用能力の系統性を明らかにしていくことが重要である。

よって本年は、以下の視点を設定して、CS科の本質に迫る授業を追究していく。

<CS科で考える「本質に迫る授業」>

以下の二つの視点から手立てを講じれば、「情報やコンピュータの特性を実感し、デジタル社会の歩き方を見いだす授業」が成立し、学校教育目標の具現化に迫ることができるであろう。

【視点1】情報やコンピュータの特性を捉える活動の設定

コンピュータに関する題材について、子供が体験的・探究的に関わっていくことが大切と考えた。そのために、目的を持って試行錯誤する場を保障したり、アナログとデジタルを比較させながら共通点や相違点を考えさせたりするなど、コンピュータの世界に浸ることができる活動を設定していく。

【視点2】日常生活とのつながりに気付かせたり学びの活用を促したりする働き掛け

情報の活用を促すには、学んだ情報手段の有用性を感じることや、新たな活用の場についてイメージをもつ経験が大切だと考えた。デジタル化された情報やコンピュータの特性が、身近なテクノロジーに生かされていることに気付かせたり、学んだ情報手段が他のどんな場面で活用出来るかを考えさせたりするなど、学びをつなぐ働き掛けを意図的に行っていく。

(上杉泰貴)

- 1 単元名 絵と写真の大へんしん ～画像を扱う仕組み～
- 2 本時のねらい 写真の編集を通して、デジタル化された情報の加工のしやすさに気付くことができる。
- 3 本時の学習過程(本時1/3)

主な学習活動	予想される子供の反応	指導上の留意点 ※は評価 ()は評価の観点	CS科の視点
1 色や形が編集された写真を見て、活動の見直しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・どんぐり山で撮った写真だね。 ・白と黒だけになっているよ。 ・写真の形が正方形になっているね。 ・写っているものはそのままだけど、感じがすごく変わっているよ。 ・どうやって変身させたのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内を撮影した元の写真と、アプリケーションで変更を加えた写真を提示する。どのように変わっているかと問い掛け、活動の見直しをもたせる。 	
写真を変身させて遊ぼう。			
2 写真アプリで開き、写真の色や形を変えて遊ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・「編集」というところから開くんだね。 ・いろいろなマークがあるよ。変えるとどうなるんだろう。 ・いろいろな色が選べるね。一瞬で変えられたよ。 ・「明るさ」を変えると天気が変わるみたいだな。 ・写真をくるくる回してみたよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・撮影した写真を別のアプリケーションから開かせ、思い思いに試すようにさせる。 ・加えた操作により、見た目が即時に変化することを捉えさせていく。 	【アナログとデジタル】 ・デジタル化された情報の特性(加工のしやすさ)
3 編集した写真を見合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・撮った写真と変わっていておもしろいね。 ・みんなの写真も見てみたいな。 ・共有フォルダに写真を入れるといいんだね。 ・席に座ったままでも、みんなの写真を見られるよ。 ・まったく同じ写真が写っているよ。 ・写真はどこに保存されたのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・編集した写真を見合う活動をさせる。まず、端末内に保存した写真を隣同士で見せ合う。他のみんなの写真を見たいという思いを引き出してから、共有フォルダへアップロードさせ、ネットワーク上に保存するよさを味わわせるようにする。 	*ICT活用 ネットワークドライブの概念とその操作
4 ファイルの場所の違いを捉える。	<ul style="list-style-type: none"> ・撮った写真はタブレットの中にあるんだね。 ・共有フォルダに入れるとみんなが見られるようになるよ。 ・共有フォルダは学校の中にあるんだね。 ・離れた場所に置いてあるのに、ここに写真があるように感じるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ローカルへの保存とネットワーク上への保存があることを説明し、「写真はどこにあるのかな」と問い掛ける。場所を話し合わせた後、サーバールームへの道のりを撮影したビデオを見せ、教室から離れている場所に置いてあることを捉えさせる。 	【ネットワーク技術】 ・ネットワークコンピューティングの基礎体験
5 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・色鉛筆とかで塗ったときは色を直すのがすごく大変だけど、アプリを使うと簡単にできた。 ・何回もやり直しができたよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ※写真の編集を通してデジタル化された情報の加工のしやすさに気付くことができたか。 <p style="text-align: right;">(知・技:行動観察, ワークシート記述)</p>	

第6学年1組 CS科 学習指導案

場所 6年1組教室
 授業者 新田 佳忠

- 1 単元名 タイピングゲームを作ろう
- 2 本時のねらい 作ったタイピングゲームを評価し合うことを通して、デジタル社会との適切な関わり方（インターネット上に投稿する際の留意点、適切なレビューの在り方、レビューすることの意味）について考えることができる。
- 3 本時の学習過程（本時 4/5）

主な学習活動	予想される子供の反応	指導上の留意点 ※は評価、○は評価の観点	CSの視点
1 前時までの学習を振り返り、本時の課題をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・3, 4年生が楽しく学べるタイピングゲームを作っていたね。 ・3, 4年生に見せる前に、まずは6年生でゲームを見合ってみよう。 	1 タイピングゲーム作りに取り組んできたことを確認し、公開する前に、3, 4年生が楽しく学べるゲームになっているか6年生同士で見合うことを確かめる。	
作ったタイピングゲームを見合ってみよう。			
2 レビューを知り、友達にゲームにレビューをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・レビューはアプリ等に対して評価をすることなんだね。 ・アプリをダウンロードするときレビューを見ることがあるよ。 ・今日はscratchのコメント機能を使って友達にゲームに対してレビューをするのか。 ・「投稿」のボタンがあるからインターネット上に書き込んだ。 ・投稿する前に個人情報が含まれていないか、読み手を傷つける内容がないか確かめる必要があるね。 	2 見合うだけでなく、日常生活で使われている「レビュー」に取り組んでみることを、App Storeを提示しながら確かめる。その後、まずは隣の席の友達の作品に対してレビューをさせるようにする。【視点2】	3 インターネット上に書き込むと誰でも見ることが出来る。投稿する前に立ち止まって考える大切さ。
3 どのようなレビューが適切か考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・Aのレビューは良いところを書いている。このようなレビューを読んだら作った人は嬉しくなるね。 ・Bのレビューは悪口みたい。作った人は不快になるよ。言葉遣いにも気を付けないといけない。 ・Cのレビューも、悪口みたいに見えるね。 ・でも、Cのレビューも必要だと思う。実際に変なところがあるなら教えてほしい。 ・どこを直したらよいか書いてあれば、プログラムの改善に繋がるよいレビューだと思うな。 	3 子供のレビューを活用しながら下のようなレビューを提示し、作り手の立場に立った場合、どのようなレビューが適切か考えさせる。 A: 正解したときにスプライトが動いて面白いです。音楽もゲームの雰囲気合っていますね。 B: このゲーム、微妙だね。4年生も面白くない！いい！ C: 時々変になるので直してください。 さらに、国語「インターネットに投稿しよう」での学習を想起させたり、CやBのレビューを訂正させたりすることで「作り手への思いやりあるレビュー」や「改善点が伝わるレビュー」という、適切なレビューの条件に気付かせていく。	【コンピューティングと社会との関わり】
4 学んだことをもとに、再度友達にゲームにレビューをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・正解するとステージが変わるようにしていて面白いです。「正解と1秒言う」の1が全角で正しく命令が伝わっていないので、半角の1にするとよいですよ。 ・答えが合っていれば得点が入るというプログラムを組んでいて面白いです。3, 4年生さんは文字の変換がまだ苦手だと思うので、ひらがなの問題にするとよいと思います。 	4 「作り手への思いやりあるレビュー」や「改善点が伝わるレビュー」をしている子供を認めることで、学びを広げさせていくようにする。	5 適切なレビューがコンテンツをよりよくすることにつながる。使い手でもあり作り手でもある。
5 活動を振り返り、デジタル社会におけるレビューの意味を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達からのレビューを読んで、またゲームを編集したいところが出てきた。 ・AppStoreでも、「適切なレビュー」等をもとに「アップデート」をしてよりよいアプリを自分たちに届けているのか。 ・レビューすることで、アプリ作りに関わることができるんだ。 ・直して欲しいことがあったらレビューしてみたいな。 	5 活動の振り返りをさせ、適切なレビューが自らのゲーム作りを生かされることを捉えさせる。また、導入で示したAppStoreを再度示し、日常生活においても「適切なレビュー」が「アップデート」につながっていることに気付かせるようにする。最後に、「分かったことや勉強になったこと」「今後やってみたいこと」の観点で振り返りを書かせ、次時以降の学習につなげていくようにする。【視点2】 ※適切なレビューの在り方について考えたり、適切なレビューがコンテンツをよりよくすることに気付いたりすることができたか。（思、判、表：発言・ワークシート）	【コンピューティングと社会との関わり】

本質に迫る授業を通して育成する資質・能力と実践上の留意点
 宮城教育大学附属小学校
 研究主任 三浦 秋司

1 本質に迫る授業と

育成する資質・能力

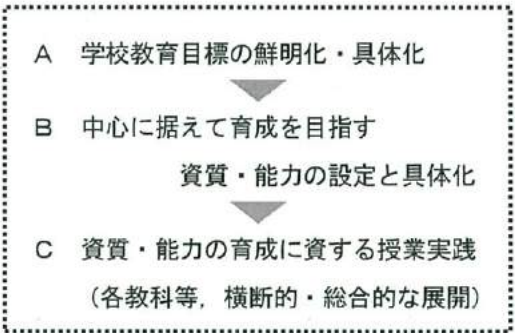
学校教育目標の具現化を目指し、2年間様々な授業実践や全校での協議を通して研究に取り組んできた。その中で、本校では本質に迫る授業を次のように押さえている。

各教科等ならではの学びを大切に、横断的・総合的な展開も図りながら、これからの時代に求められる資質・能力が育成される授業

本校では、令和元年度に各教科等ならではの学びに、令和2年度に横断的・総合的な展開に着目し、授業実践を重ねた。そして、令和2年度に本校で中心に据えて育成を目指す五つの資質・能力を設定

し、その具体を探った。五つの資質・能力は、前述の通りにこれからの時代に求められる資質・能力に包含されると捉えている。

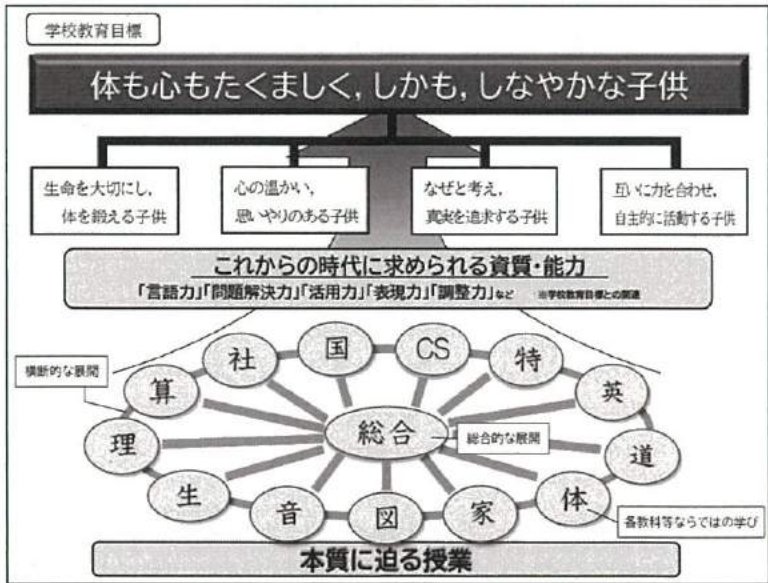
これまでの共同研究を振り返ると、その流れに複雑な部分があり、整合を図りながら進める上で難しさがあった。そこで、次のような研究の流れを提案したい。



本校ではCを足掛かりにしてA・Bへと研究が立ち戻る形となり、

息苦しさを感じた。まさに、学校教育目標からブレイクダウンしていく流れであれば、スムーズであろう。

複雑さはあったが、ある程度の形を2年間で整えることができた。本校の研究を図にまとめると、資料1の通りである。



資料1【本校の共同研究の構想図】※令和2年11月末時点

2 実践上の留意点

2年間の研究を整理すると、学校教育目標の具現化のために本質に迫る授業を実践する上で、四つの留意点を挙げることができる。

- ① 各教科等で考える本質に迫る授業の中で資質・能力の育成を目指すこと
- ② 見方・考え方を働かせながら、子供自身が各教科等ならではの学びにこだわられるようにすること
- ③ 教材研究を通して教材の本質を明らかにし、単元・題材の構成を練ること
- ④ 子供の思考や学びの文脈に合わせた展開が欠かせないこと

本校では教科等を再編・新設することをしていない。これまで蓄積してきた本校の共同研究の成果の下、各教科等ならではの学びというものを大切にしている。①の通り、各教科等の本質に迫る授業を日々積み重ねていく中で、資質・能力を育成していきたい。

また、各教科等ならではの学びは授業者が供与するものではない。子供自身が各教科等の見方・考え方を働かせることで獲得することができる。その中でこそ資質・能力が育成されるということが、研究を通して見えている。②の通りに、子供の見方・考え方を鍛えながら授業者はその支援に当たるようにしたい。

③について、本校で授業者は丁寧に教材研究に取り組み、授業実践に

臨む際の指導案で「教材の本質」を明らかにしている。子供の資質・能力を育成するためには、授業者の適切な教材選びと正しい教材解釈が求められる。その上で、子供の実態に即した単元・題材の構成が可能となるはずだ。

そして④にあるように、単元・題材の中で子供の思考や学びの文脈に合わせて授業を展開していく。令和2年8月に本校で実施した上智大学の奈須正裕先生の講演でも、同様の示唆をいただいた。問題解決の主体者として自らのめり込んで追究する子供こそが、資質・能力を育て、発揮している姿と言える。そのためにも、子供の思考や学びの文脈に目を向け、授業者はフレキシブルに展開をコーディネートしたい。

これら留意点の内容は基本的なことである。基本的なことであるからこそ、私たちは決して忘れることなく研究に向き合っていく。そして、目の前の子供の育ちに働き掛けながら、学校教育目標の具現化を目指し、本質に迫る授業を日々実現させていきたい。



【全職員で本質に迫る授業の実現を目指す】

教科横断型

カリキュラム・マネジメントの方策

－幼稚園教育・生活科・社会科・家庭科・「総合的な学習の時間」の場合－

宮城教育大学 社会科教育講座
教授 吉田 剛 先生



1 はじめに

学校教育では、知識・技能が教科によって分断される側面がある。その結果、学習が生活と乖離されてしまう恐れがあり、総合的・融合的に考える場面を設ける意義がある。そこで、教科横断型カリキュラムを編成することによって、各教科の単元を効果的に結び付け、配当時間の合理化を図りながら、児童には総合的・融合的に考える力を養わせ、複雑な現実社会を生き抜く力を身に付けてもらいたい。

2 教科横断型の意義

重複する学習内容や方法を複数の教科で繋げ合わせ、それらを発展的に繰り返し活用することによって、児童の学びを深めさせる。このような教育活動を通じて、教師にも教育を全体で共有する意識を持たせ、より計画性のある実践へと導きたい。教科横断型カリキュラムの作成には、共通項となる「資質・能力（目標）」、「学習内容」、「学習方法（過程や技能）」、「教育課題」、「評価方法」、「系統

性・シーケンス」「地域的特色の反映」などの設定が不可欠となる。そのためには、これまでの教育活動を教師集団がふりかえり、様々な教育場面の関連付け（類似性、段階性、包含性、機能性など）を行う必要がある。

3 カリキュラム・マネジメント

生活科を中心とした幼稚園からのスタート・カリキュラムから「総合的な学習の時間」へと繋がる構成によって、学校独自の特色が反映される場合がある。それを主軸にして教科横断型カリキュラムを他教科にも広げ、さらにカリキュラム・マネジメントも考えられると実践に結び付く。そして、共通項を意図した実践によって、その効果が見えてくる。年間指導計画や単元計画の作成、校内研修などに関する協働と共有化から、実践と実践後の議論の中でその効果や改善点をあげ、次の改善計画に結び付ける。つまり、PDCA サイクルによるマネジメントがなさ

れる。その中で年間・学期・単元の各レベル，あるいは学校全体・学年・クラスなど，大小の各所のPDCA サイクルの重層的な位置を明確にしておく必要がある。

目指される教科横断型カリキュラムのイメージには，全ての教員がいつでも，○各教科の見通しを総覧できる，それらの関連性を整理して理解できる，実践において行える見通しがあるもの，○実践後の効果や改善点をアップデートできる記録簿のようなもの，○PDCA サイクルのマネジメントが発展的に高められる活用性のあるもの，などがあげられる。

4 共通項となる過程スキル

生活科，社会科，家庭科，「総合的な学習の時間」などによる教科横断型カリキュラムの共通項となる教育方法として，「問題解決的な学習」があげられる。問題発見→学習問題の設定→仮説立て→調査・検証→問題解決。この過程を通して求める知識・技能が習得，活用される。それとともにこの過程そのものの活用力の高度化も重要となる。それが複雑な題材や技能を習得・活用する枠組みとなるからである。よって，それを教科横断型カリキュラムにおける発展・学年段階のどこにどのように位置付くかを教師集団が協議しなければならない。ただしその際には，

各教科の固有性に関わる鍵概念の扱い方に注意する必要がある。一般的には，基礎となる各教科の枠組みについても維持しなければならいからである。

5 共通項となる「環境」や

「主権者」などのテーマ

例えば，現代的課題となる「環境」や「主権者」などのテーマから，教科横断的に学習内容を再構成していく手立てがある。身近なクロスカリキュラムやESDカレンダーなどがそれに該当する。例えば，「環境」をテーマに設定する場合，幼稚園教育では園児の身近な環境への気づきと遊び，生活科では児童の体験を通じた自然環境との関わり，社会科では各社会における自然・社会環境の特質への理解や保全計画づくり，家庭科では身近な衣食住に関わる自然・社会環境への理解と創作，そして「総合的な学習の時間」では実践的活動を通じた自然・社会環境への理解や寄与などが考えられる。

以上から教科横断型カリキュラムを作成し，上手くマネジメントすることによって，独創的な学校が演出できることになる。

第V章

各教科等の学習の積み上げと
継続の中に位置づけられる

附属小の学校行事の在り方



第V章

各教科等の学習の積み上げと継続の中に位置づけられる 附属小の学校行事の在り方

宮城教育大学附属小学校
教務主任 佐藤 拓郎

全校表現

～資質・能力の育成を意識して～

1 これまでの全校表現

本校における全校表現とは、主に「表現力」の育成・発揮を目的とする体育的な活動であり、これまでいくつかの実践が行われてきた。

(1) 附小みちのくよさこい

約700人の全校児童が校庭に整列し、音楽に合わせて声や動きをそろえて行う表現運動である。組集団ごとに高学年の子供が主体となり、下学年に動きを指導する形をとっている。その関わりの中で調整する力も養われている。また、最高学年の姿は、下学年にとっては、数年後の目指す姿であり、憧れの感情をもつ子供も少なくない。

発表は、秋に開催される「なかよし運動会」の中で行われ、多くの観客から称賛の拍手をもらうことで、達成感を味わうことができる。平成23年度に開催されたなかよし運動会では、東日本大震災の被災地として、激励や支援をくださった全国、全世界の方々に、元気に復興している姿を発信したいという思いをもち、動きを工夫し

たり、掛け声を強調したりして取り組んだ。それ以降も、テーマや指導の重点ポイントを変更しながら長年取り組まれており、保護者からの賛同の声も多く聞かれた。



【全国へ元気を発信！】

しかし、我々教員の中に次のような問いが生まれた。

「毎年同じ踊りに全校で取り組むことで本当に表現力が培われるのか」

「そもそも体育における表現力とはどのようなものなのか」

これらの問いは、資質・能力の育成を本気で目指しているからこそ生まれたものであると考える。そして、体育部の教員を中心に議論を重ね、「附小みちのくよさこい」の代わりに次のような取組を

実施することにした。

(2) 附小全校体操 2018

この新たな取組を、「附小全校体操 2018」と命名し、人間の体の使い方に焦点を当て、内容を構成することにした。「片足バランス」や「ブリッジ」といった体操を太鼓の合図に合わせて表現していくというものであり、附小みちのくよさこいが有していた「ショー」としての要素は、この全校体操には存在しなかった。

シンプルな動きであるが故に練習を重ねるにつれて、「僕って、体が硬いのだな」などと、自分の体と向き合い、気付きを深める子供が出てくるようになった。教員の中からも、「しなやかな体の使い方とはどのようなものか」などと、学校教育目標と体育的な表現とを関連付ける考えも出されるようになった。

その年のなかよし運動会で初披露となり、静けさの中でも動きをそろえる美しさを表現することができた。



【ブリッジに挑戦】

一方、「もっと元気に踊りたかった」といったこれまでのよさこい

のような取組を求める子供の姿もあった。それは、全校表現に対する意欲の低下にもつながっていたようだった。また、多くの保護者も子供の元気な姿が見たかったようであり、附小みちのくよさこいの復活を求める声も聞かれるようになった。

2 これからの全校表現

これまでの取組を総合的に評価し直し、新たな取組を考案することにした。目指すは前述の二つの取組の融合である。全校体操の要素を「静」と捉え、附小みちのくよさこいの要素を「動」と捉えることにした。そして、「静」と「動」の二部構成で一つの表現作品を作ろうと考えたのである。そして、「動」の部分については、宮城教育大学保健体育講座教授の佐藤節子先生に協力を依頼し、その動きに合わせた曲の作曲を元宮城教育大学音楽教育講座教授の吉川和夫先生（元本校校長）に依頼する運びとなった。

3 終わりに

次のチャレンジを開始しようとした矢先、新型コロナウイルス感染症による休校が決まった。学校が再開した後も、全校で体育的な取組を再開するには至っていない。コロナ禍における全校表現の形を新たに模索していく必要がある。

合唱活動

～資質・能力の育成を意識して～

1 本校の合唱活動と五つの力

本校では半世紀に渡り、全校的に合唱活動に取り組んでおり、学校教育目標の具現化への重要な活動に位置付けられている。学校教育目標からブレイクダウンした五つの資質・能力との関係から、本校の合唱活動の意義を整理すると次のようになる。

(1) 言語力と合唱活動

合唱曲の歌詞に着目させることで、言葉の意味や作詞者の意図を考えさせることができ、仲間と考えを交流する中で言語力が養われている。

(2) 表現力と合唱活動

歌詞や曲想から曲のイメージをもたせ、学級や学年等の集団において互いのイメージを共有させていくことで、「楽しく」や「元気よく」といった表現の方向性をもたせることができる。また、上学年では、「歌の語源は訴う」であることを指導し、「誰にどのようなメッセージを訴えるのか」という問いをもたせることで、表情に変化を付けたり、体全体で表現したりするなど、表現の幅に広がり生まれ、豊かに表現する力の育成につながっている。

(3) 活用力と合唱活動

「選曲」「練習の進め方」「発声指導」といった合唱活動において重要となる構成要素を、1年間や6年間という中・長期的なスパンで整理し、指導している。そのことにより、歌唱法や曲の解釈の仕方等において、学んできたことに上に新たな学びを積み上げようとする姿が多く見られている。また、「歴史の学習で感じた戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えたい」という思いを込めて「大地讃頌」を歌うというように、教科の枠を越えたオーセンティックな学びも期待でき、活用力の育成につなげることができる。

(4) 調整力と合唱活動

同じ表現者である仲間の歌声をよく聴き、音量や音質を合わせて合唱する中で、調整する力が養われていく。また、集団で一つの合唱を創り上げていく経験から、互いのよさを認め合うことができるようになり、他者理解の促進にもつながっている。

(5) 問題解決力と合唱活動

本校では、曲を披露する機会が年間2回設けられており、その会での発表に向けて練習が行われる。その際、様々な問題と出合う。例えば、「サビの部分のハーモニー

がうまく響かない」といった表現力に関する問題、「練習に本気で取り組まない人がある」といった調整力に関する問題などである。このような問題を自分事として捉え、解決に向けて試行錯誤を繰り返していく中で、問題解決力が育まれている。

2 令和2年度の合唱活動

6月に学校が再開となったが、新型コロナウイルス感染症対策を講じる必要があり、合唱活動を通常通り実施することは困難となった。7月に予定していた合唱夏の会は中止。毎月定期的に行っていた全校合唱の取組も実施を見送ることとなった。

それでも、7月中旬には、全校合唱の取組をオンラインで実施することができ、12月の合唱の会を3学年ずつの入れ替え制、学級単位の発表のみという条件の下、実施することを決断した。我々教職員が率先して問題解決力を発揮した結果である。

練習には、十分な間隔を取りながら、マスクの着用を厳守して取り組んだ。年間の積み上げが期待できない状況ではあったが、上学年では、あっという間に曲の特徴を捉え、美しい歌声を響かせられるようになるなど、これまでの学びを活用するたくましい姿も多く見られた。

会当日は、24学級が東京エレクトロンホール宮城の大ホールで、豊かな歌声を響かせることができ、表現力を高めることができた。また、歌い終えた子供が互いに称賛し合う姿から、調整力の伸びを感じることができた。コロナ禍という状況下においても、資質・能力の育成につながる会が開催できたことは大きな成果であると言える。

3 今後の合唱活動に向けて

子供同士の直接的な関わりが制限される今の状況は今後も続くと思われる。合唱の会の開催から得られた成果は大きいですが、課題も残っている。例えば、縦割り学級で合唱を聴き合うといった交流型の活動が、子供の資質・能力の育成にとって有効であるが、今年度は実現できなかった。今後は、オンラインでの実施も視野に入れて実現への道を模索したい。また、次年度は、五つの資質・能力から一つの力に重点化して取り組むことを検討している。そのためにも、子供の合唱活動における課題を分析し、ウィークポイントを明らかにしていきたい。

アートフェスティバル
～資質・能力の育成を意識して～

1 取組の概要

本校では、平成30年度よりアートフェスティバルに取り組んでいる。この取組は、日々の造形活動の積み上げの成果を発揮する場を提供するものであり、製作活動や鑑賞活動を通して、美術への関心・意欲を高めることをねらいとしている。五つの資質・能力との関連で見ると、「表現力」の育成に親和性が高い。アートフェスティバルの概要は次の通りである。

【開催期間】

11月11日(水)～30日(月)

【作品製作について】

年間の積み上げを意識して、作品作りに取り組ませる。

【展示・鑑賞について】

北校舎の教室前廊下や特別教室前廊下を展示場所とし、全学年の作品が鑑賞できるようにする。また、案内文書やブログを用いて保護者にもその開催を周知し、期間内は自由に鑑賞できるようにする。

2 各学年の作品について

今年度の各学年の題材と特徴は次の通りである。

1 学年『どうぶつとなかよし』

遠足で八木山動物公園に行った経験を基に、好きな動物と自分が仲良く遊んでいる様子を想像して描く。(道具)クレヨン



2 学年『にじいろの魚』

スクラッチの技法を用いてそれぞれが想像したにじいろの魚や海の様子を描く。(道具)クレヨン



3 学年『ふしぎな乗りもの』

鉛筆など身近な物が乗り物になったらと想像を広げ、オリジナルの乗り物とその旅の様子を描く。

(道具) 絵の具, クレヨン



4 学年『木々を見つめて』

学校の敷地内に生えている様々な木からお気に入りの木を選び、じっくりと見たり触ったりして感じたことを自分らしく描く。

(道具) 絵の具, クレヨン



5 学年『シンメトリー・マスク』

紙の折り方や切り方を工夫し、オリジナルのマスクを立体的に描く。

(道具) ハサミ



6 学年『思い出の校舎』

いろいろな思い出が詰まった校舎を、自分で決めた場所からじっくりと眺め、写実的に描く。

(道具) 絵の具, 鉛筆, ペン



(成果)

- ・ 多くの人に鑑賞されるという設定が、製作意欲を向上させ表現力の伸びにつながった。
- ・ 他学年の作品の鑑賞から様々な表現方法があることを知ることによって、表現の幅を広げることができた。

(課題)

- ・ 6年間の系統で見たとき、特に絵の具の技法に積み上げの成果が見られなかった。

自分らしく表現する上で、技法の積み上げは必須である。今後は、大学の美術の先生や本校図画工作科主任を講師にした研修会を開き、絵の具の指導技術を磨くことで、この課題の解決に迫りたい。

伝統カルタを楽しむ会 ～資質・能力の育成を意識して～

1 取組の概要

本校では、日本のよき伝統に触れさせ、日本の文化を守り育てようとする態度を養うことや文語調の言葉の調子に親しませることを目的として、伝統カルタを楽しむ会を実施している。

実施の概要を説明すると、1、2年生は「江戸いろはかるた」に、3～6年生は「百人一首」に取り組ませている。12月から取組を開始し、冬休み期間中に家族で取り組むなどして慣れ親しみ、年明けに会を実施している。1、2年生は体育館などの大きな会場に集まり、教員が読み札を読み上げる方法で進める。3～6年生は、教室において校内放送を利用して進める。6人でグループを構成し、取った札の枚数を競い合う。といっても、順位を決定するものではなく、取った札の枚数を記録した記録賞を全員に授与する形に留めている。それは、人より多くの札を取ることも、一人一人がお気に入り札と出合うことに重きを置いているからである。お気に入りの札の見付け方は人それぞれであり、『まにまに』という表現がおもしろいや「自分の名前である『もみじ』という文字が入っているから」、「一字聞けば、下の

句が分かって取りやすいから」、「覚え方がおもしろいから」など様々である。会の名前を「競技会」ではなく、「楽しむ会」としている通り、それぞれの楽しみ方を見付け、伝統カルタを存分に味わってほしいというのが私たちの願いなのである。

2 資質・能力との関連

学校教育目標からブレイクダウンした五つの資質・能力との関連を見ると、やはり、「言語力」の育成が期待できる。「いろはかるた」では、「犬も歩けば棒にあたる」や「ちりも積もれば山となる」といった慣用句と出合い、その意味に興味をもって調べ、やがて自分の文章表現に活用できるようになる。また、「百人一首」では、歴史的仮名遣いに慣れ親しむことができる。中学に進学した子供の話によると、古典の学習において、百人一首で知った歌人が登場したり、聞いたことのある表現と出合ったりすることがあるのだと言う。このことから、百人一首の取組は、中学校で育成すべき言語力の素地を養うことにもつながっていることが分かる。

さらに、高学年になると、特定

の歌人に興味をもち、その当時の風習や暮らしを自主的に調べるなど、日本の歴史へと興味の幅を広げる子供も出てくる。伝統カルタを楽しむ会は、国語科としての取組であるが、社会科の歴史学習など教科横断的に学びを展開し得る可能性を秘めた取組であるとも言えよう。

3 会当日の様子

ここでは、会当日の様子を紹介する。開会前になると、校内放送から「春の海」が流れ、子供は競技会場へと移動を始める。3年生以上の教室では、6人でグループを構成し、百枚の取り札を並べ始める。競技開始までの時間の使い方には決まりはないが、学年が上がるにつれて、集中して札の位置を覚えようとする子供が多くなっていく。校長先生から挨拶をもらい、いよいよ競技開始となる。

読み手の声に耳を傾け、ねらった札が取れるとほっと一息。緊張と安堵を繰り返しながら、一首、また一首と競技は進む。1時間を越える競技の間、集中を切らさずに取り組む姿からは、自分の心の調子を調整しているように見える。ここに、本校で育成をねらう「調整力」との関連がありそうだ。

最後の一首が読み終わると、それぞれに取った札の枚数を数え、互いに報告し合い、礼をして競技

は終わる。会の終わりには、副校長先生から話をもらい、伝統カルタを楽しむ会は閉会となる。前年度と比べて多く枚数が取れたと喜ぶ子供やお気に入りの札を取ることができて満足気な子供、切磋琢磨しているライバルに敗れて悔しがる子供など、その表情は様々である。そして、「来年も」や「来年こそは」といった決意が芽生え、この取組は次年度へとつながっていくのである。



4 今年度の実施について

コロナ禍である令和2年度は、実施の可否から検討する必要があった。その結果、例年通りの開催は難しいが、各学級において会を実施する運びとなった。毎年継続的に取り組むことで、本会の価値は高まるものと考えられる。今後も、実施の仕方を工夫しながら、取組を持続していきたい。

第VI章

現代的諸課題に対応する

資質・能力の育成に関する取組

教育課程における「からだの学習」の開発

宮城教育大学 名誉教授
数見 隆生 先生



1 はじめに

本校の教育目標は「からだも心もたくましく、しかも、しなやかな子供」です。この目標は1974年に当時の教員たちが、子供たちと真剣に向き合う教育活動の中で、自分たちの願う子供像として打ち出されたものでした。

当時は60年代の高度経済成長期を経て、生活が便利で豊かになった反面、夜型生活化、身体活動不活発化、ストレス社会化が進行し、また受験競争の激化も伴う中、子どもたちの生き方（生活・環境・関係性）の反映として心身の硬直化を感じ取ったからでした。それ以降約45年間、本校ではこの教育目標を掲げ続けてきました。

もちろん、心身に対処的に働きかける取り組みを行ってきた訳ではありません。授業や学校行事、業前・業間の活動、等全学校生活を通じてでした。始業前の「朝の活動」や全身で声と心を響き合わせる「合唱活動」、運動会での全身での表現と響き合い、そして何よりも日々の授業活動での頭（脳）を使って思考の響き合いを大事に行ってきました。

社会の変動は、子供たちの生活や生き方を反映し、心身、とりわけ「からだ」に現れます。

高度成長期から半世紀以上とな

り、情報化社会からICT、AIの時代へと一層大きな社会変化が生じてきています。時代の要請とはいえ、教育のデジタル化中心の進行では、人間としての心身の発達を育むべき学校機能はどうなるのか、心配です。本校の教育目標の遂行は今後も輝きを放つでしょう。

2 教育課程に「からだ」を据える

現行の教育課程に体育はあっても「からだ」の学びはありません。「体育」は運動・スポーツ中心で、3年生から一部「保健」は入りますが、それは健康処方程度です。

ここであえて言う「からだ」は、いのち・健康・性・心・発達・生活・生きる、ということの日々繰り返している人間まるごとの実体としての「からだ」です。「命の教育」や「心の教育」は響きが良く、教育界で崇高視されますが、命も心も抽象概念です。「からだ」の視点から命と心の教育も見直されるべきだと考えるのです。体罰が否定されるは、「肉体を痛めつけると心が良くなる」という心身を別物視する身体蔑視の思想だからです。体罰を子育てや教育の手段と容認していた時代がありましたが、今もその風潮は完全に払拭されていません。命と心を持ち、人間として生存、発達している尊厳体とし

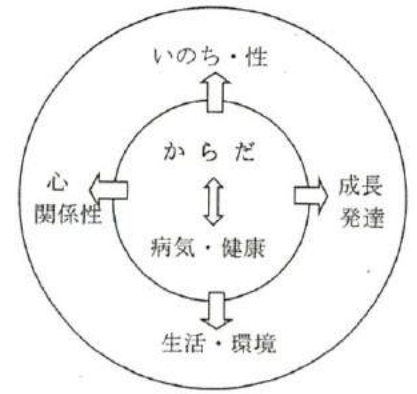
ての「からだ」観を教育に正當に位置づけること，そういう立場でカリキュラムをできるところから見直し，開発できればと考えます。

3 子供の現実とカリキュラム化

近年，子供のいのちや性に関する諸問題，眠・食・動・排泄等の生活の崩れ，コロナやインフルエンザ等の感染症問題，心のストレスやいじめ等の人間関係問題，自然環境との触れ合い不足，等々が，今日の社会・環境変化の中で様々な生じています。こうした課題と関わって，学校は時代を生きる気づきと自立や共生をしえる生きる力の育成が求められています。そのためのカリキュラム・マネジメントがどうしても重要です。

しかしそれは，様々な問題への対策的編成であってはなりません。生きる主体を励まし育むキー概念として「からだ」を設定し，学習課題を教材化し，実践を生み出し，いこうと考えているのです。その構想の基本枠組みをモデル図で示すと次のようになります。

まず，私たち人間も生物体であり，①いのちを生み出す性の機能を備え発達させます。そして，②からだは誕生から老衰まで発達・老化の過程をたどります。また，③からだは毎日生存のために食・動・眠・排泄の生活が必然で，適合可能な環境のもとで生存しています。さらに，④そのからは心を持ち，人間らしい生き方を求め関係性の中で共存しています。そのからは，①～④の条件下で，好不調の健康状態を変化させます。



こうした人間としてのからだ理解のカリキュラムは，現行の教育課程では不十分であり，特別活動や総合的学習の時間等をも活用し，自主編成せざるを得ません。こうした学習は，コロナ禍に対応する主体的人間を育てるアクティブラーニングに適合するカリキュラム編成とその実践的事例開発にも繋がるでしょう。

実践教材事例			
第1学年	からだにあるアナ ～どんなやくわりをしてるかな?～	第5学年	体の中の骨は生きている? ～生きているということ～
	どうしてねむるのかな?		眠っているのは死んでいるのと同じ? ～睡眠中のからだのはたらき～
第2学年	おへそのヒミツ ～どうしてあるの?～	第6学年	からだと心はつながっている? ～困ったときドキドキするのはどうして?～
	ウンチはからだからのたより		カゼをひいても治るのはどうして? ～病気とたたかうからだ～
第3学年	生きているしょうこをさがそう	第6学年	大人に向かうからだへの変化 ～半分のいのちのめばえ～
	体のふしぎ ～やわらかい体とかたい体～		大人に向かう心への変化 ～もう一人の自分との対話～
第4学年	発熱 ～カゼをひくとどうして熱が出るの?～		
	ウンコとオシッコの旅 ～食物と水のゆくえ～		

第1学年4組 特別活動（からだの学習）学習指導案

授業者 教諭 今野 ゆき (T1)
養護教諭 村石 智美 (T2)

1 題材名 わたしたちはどうしてねむるのかな？ ～すいみんのひみつをさぐるう～

2 題材について

本題材では、眠っている間もからだは回復、成長等の機能を果たしていることを知り、睡眠の大切さに気付くことをねらいとしている。

睡眠や食事、運動などの生活に関わる保健教材のねらいや扱いは、その生活の対処や行動変容に重点を置いた指導になりがちである。そのため、そうした生活がからだの健康にとってなぜ重要なのかという点において、子供が納得できる学習過程を作る必要があると考える。

からだの不調を訴えて保健室に来室する子供の傾向を振り返ると、塾や習い事に追われて就寝時間が遅くなっている子供もいれば、夜遅くまでテレビを見たり、ゲームなどをしたりしているために、睡眠が不足している子供も多く見られる。こういった現状から、「眠る」ということを教材化し、睡眠の大切さに気付かせていきたいと考えた。

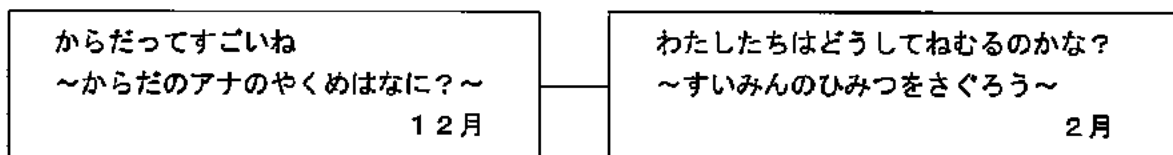
睡眠は、疲労した脳やからだを休息させ、回復させるという重要な役割を担っている。子供は、日常の経験から、早く寝付いてぐっすり眠ると朝は気持ちよく目覚めることができるということは感覚的につかんでおり、睡眠の重要性については何となく気付いているようである。睡眠に関するアンケートでは、平均睡眠時間は9時間15分であり、最も睡眠時間の短い子供は8時間であった。また、「目覚めた時の気分」について尋ねた項目では、「すっきり目覚めた」が34%、「まだ少し眠かった」が55%、「眠くてなかなか起きられなかった」が10%と、65%の子供がすっきり目覚められておらず、寝不足だと感じていることが分かっている。しかし、寝不足を感じている子供の25%が、「眠ることは大切か」という質問に対して「分からない」と回答しており、睡眠の必要性に気付いていない子供もいることが分かった。さらに、眠ることが大切であると感じている児童のうち、約半数がその理由について「眠ると元気になれるから」と回答していたが、「からだの成長に必要だから」と回答していたのは12.5%であり、睡眠が成長に必要であると感じている子供はあまり多くないことも分かった。

そこで本題材では、ロールプレイや紙芝居を用いながら、対話を通して、日々の生活経験やその時のからだの事実を振り返らせ、具体的な経験と知識を結び付けながら授業を進めていきたい。そうすることで、睡眠の役割や必要性についての気付きを深めさせていきたい。

3 「からだの学習」の授業構想

「からだの学習」は、人間のからだのすばらしさを子供に実感させるとともに、自他のからだを大切にすること子供に育ってもらいたいという願いから取り組んでいる。健康を直接的に意図した保健教育とは異なり、「すばらしいからだ」の仕組みや働きを実感的・科学的に学ぶことで、人間の「いのち」や「生きる」ことを意識化できる指導の在り方を目指している。

《1年生での「からだの学習」指導計画》



4 本時の学習

(1) 本時のねらい

眠っている間もからだは回復、成長等の機能を果たしていることを知り、睡眠の大切さに気付くことができる。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項 (※は、評価の観点) ●: T1, ○: T2
<p>1 動物が眠っている写真を見て、睡眠について考える。</p> <p>2 学習課題を知る。</p>	<p>1・すやすや寝ていて可愛いな。 ・こんな格好で眠るのか。 ・動物もみんな眠るんだ。</p>	<p>1●眠る時間や眠り方は違っても、動物は皆眠るのだということに気付かせる。</p> <p>2●動物にとっても人にとっても睡眠が生きていくために欠かせないものであることを意識させる。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">わたしたちはどうしてねむるのかな。</div>		
<p>3 眠らないとどうなるかを考え、その時のからだや心の様子について、自分の経験を思い出しながら話し合う。</p>	<p>3・眠らないと次の日眠くなるな。 ・眠らないと元気が出ないな。 ・あまり眠れなかった時は、授業中あくびが止まらなかったし、集中できなかったな。 ・眠い時はぼうっとしたりイライラしたりすることもあるな。</p>	<p>3●各自の経験を想起させながら、眠らないとからだや心の様子はどうかを考えさせる。 ○睡眠が足りていないと、疲れがたまって具合が悪くなったり、イライラしたりと、からだや心に不調が現れることに気付かせる。</p>
<p>4 自分が朝起きた時の様子を振り返る。 ・朝目覚めたときの様子を再現する。</p>	<p>4・自然とすっきり目が覚めた。 ・目覚まし時計で起きた。 ・何度も起こしてもらってやっと起きた。まだ眠たかったな。</p>	<p>4●朝目覚めた時の様子を振り返らせ、目覚め方の異なる児童数名に再現させ、全体で共有する。</p>
<p>5 睡眠の必要性について知る。 ・なぜ人によって目覚め方が違ったのか考える。 ・携帯電話等の充電をイメージし、睡眠の意味に気付く。 ・紙芝居を見ながら睡眠について考え、その効果を知る。</p>	<p>5・まだ眠かった人は夜遅くに寝て睡眠が足りなかったのかな。 ・睡眠は充電と同じで元気に過ごすために必要なのだな。 ・眠くて元気が出ないときや、授業に集中できない時は、睡眠が足りていなかったのかな。 ・疲れているときや具合が悪い時も眠ることは大切なのだな。 ・眠ることにはこんなにたくさんの良い効果があったのか。</p>	<p>5●すっきり目覚めた人とまだ眠かった人の違いについて考えさせる。 ○携帯電話等の充電をイメージさせきちんと充電できていると元気に活動できることや、充電不足や電池切れの状態だと十分に活動できないことに気付かせる。 ○睡眠には、心身の疲れをとることや、からだの成長や病気の予防、記憶の定着、集中力を高めるといった効果があることを知らせる。</p>
<p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<p>6・元気に過ごすためには、からだを休ませることが必要だから眠るのだな。 ・睡眠はこれから成長していくためにも大切だから眠るのだね。 ・毎日元気に生活できるように、早寝早起きを心掛けてたくさん眠るようにしよう。</p>	<p>6●本時の学習を振り返り、まとめる。 ●健康に過ごすためにはどのような生活をしたらいかが考えさせる。</p> <p>※ 眠っている間も体は回復、成長等の機能を果たしていることを知り、睡眠の大切さに気付くことができる。(思・判・表：発表、見取り)</p>

第4学年3組 特別活動（からだの学習）学習指導案

授業者 教 諭 阿部 辰朗 (T1)

養護教諭 村石 智美 (T2)

1 題材名 生きているってすごい！～生きていることを体感しよう～

2 題材について

本題材は、自分や仲間のからだを互いに観察したり触れたりしながら、生きているからだの事実を通してバイタルサイン（生きている証）を調べさせることで、「生きていること」や身体機能のすばらしさに気付かせ、自他のからだや「いのち」を大事にしようとする意識を高めることがねらいである。

これまでに子供たちは、3・4年生で健康に関わる生活の仕方や心身の発育・発達の基礎的内容を体育科保健領域で学んでいたり、道徳や合唱曲を通して「いのち」のつながりや大切さに触れたりしているが、自分や仲間のからだの事実を通しての「いのち」や「生きていること」を実感的につかんでいない。子供たちは、体調を崩したり、けがをしたりしても、自然と治癒していくという経験をして生きているが、それを意識し問い直すことはしていない。絶えず呼吸をし、拍動や脈があり、体温があることも当たり前のことと思ひ、振り返ることやその意味を考えることはしていないと思われる。自他の生きている現象を実感したり、身体機能をすばらしく思ったりすることの気付きや学びがなくして、「いのち」を大事にする心は育たないと考えた。

そこで、今回は、まず3年時に学年で取り組んだ合唱曲「いのちのまつり」を聞かせ、そのときに学んだ「いのち」「生きていること」について振り返らせつつ、自分の「いのち」について目を向けさせていく。そして、自分たちのからだの事実を通して、今生きている証拠を調べさせる体験的な活動に取り組ませる。二人一組で生きている証拠を探させながら、バイタルサイン（生きている証）に気付かせ、その意味を深めさせたい。この活動において、子供たちから、心臓の拍動や脈拍、呼吸（胸や腹部の動き）、体温、かすかな体動（まばたきや筋肉）、などが挙げられると予想される。それがどうして今生きているサインなのか考えさせていきたい。こうした子供たちの気付きの中から、心拍・脈に焦点を当て、聴診器を用いて心拍数を測定する活動に取り組ませることで、誕生してから現在まで無意識下においても絶えず心臓が動き続けているということを実感させていく。その後、胎児の心音や全身の血管図、血流の速度を示す映像、心音拡張器などの教具を活用していくことで、生きているからだの現象や身体機能のすばらしさについて、実感や感動を伴わせながら学ばせていきたい。

最後に、学習で得た気付きや考えを交流させることで、生きているからだや「いのち」の不思議、そのすばらしさを自覚させ、「いのち」を守り大事にするということとはどのようなことなのか考えを深めさせていく。

本題材では、学級担任を中心に養護教諭とT.Tで授業を行う。養護教諭が専門的立場から授業に関わり、科学的な根拠を基に補足説明していくことで、からだに起こる現象と実際の働きの関係について、実感を伴わせながら理解を深めさせていきたい。

3 本時の学習

(1) 本時のねらい

バイタルサイン（生きている証）を調べる活動等を通して、生きているからだの事実や意味に気付き、これまで以上に自分や友達の生きているからだや「いのち」を大切にしようとする意識を高めることができる。

(2) 学習過程

主な学習の流れ	主体的に学ぶ子供の姿	指導上の留意事項 (●:T1,○:T2) ※は、評価の観点
1 「いのちのまつり」の合唱を聞き、去年学んだことを振り返り、学習課題をつかむ。	1・去年の合唱の会で歌ったね。 ・この曲から、いのちのつながりや生きていることのすばらしさを学んだね。	●3年時の学年合唱曲「いのちのまつり」を聞かせ、そのときに学んだ「いのち」や「生きていること」について想起させる。 ●「生きているとはどのようなことなのだろう。」「生きていることはどこから分かるかな。」と問い掛け、自分の「いのち」について目を向けさせていく。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;"> 今生きているからだやいのちについて考えよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・早く調べたいな。 ・胸に耳を当てれば分かるかな。 	

<p>2 今生きている証(バイタルサイン)を探る。</p> <p>3 心拍・脈に着目し、生きているからだの働きについて考える。</p>	<p>2 (生きている証拠を進んで探し、現象に気付いている。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まぶたと手足が動いたぞ。 ・胸と腹が上下に動いている。生きている証拠だ。 ・息を吸ったり吐いたりして、呼吸しているね。 ・触ったら温かいよ。 ・胸に耳を当てたら、心臓の音が聞こえてきた。心臓が動いているからだね。 <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どれくらい心臓は動いてきたのかな。1万回くらいかな。 ・聴診器を使えば分かるね。 ・脈拍を測ればいいのか。 ・私は1分間で90回だったよ。 ・自分の心臓が10年間でこんなに動いていたなんて驚いたな。 ・意識していなかったけど、心臓は寝ている間も休むことなくずっと動き続けているなんてすごいね。 ・赤ちゃんの心臓の音を初めて聞いたよ。すごく速いね。 ・心臓は全身に血液を送り出しているのだな。 ・運動をした後で呼吸や脈が速くなるのには関係があったのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ●からだといのちについて学習するのだから友達を大切に扱うことを事前に伝える。 ●男女別に二人組をつくらせ、生きている証拠探しに取り組みさせる。証拠は3つ以上見付けることを伝え、ワークシートに記述させる。 ●途中で二人組の役割を交代させる。 ●見付けたことを交流し合わせる。その際に「なぜ胸が上下に動いているのかな。」「心臓の音が聞こえてきたということはどういうことなのかな。」などと問い掛け、からだの状態や現象から、からだの実際の働きに迫らせていく。 ●子供が挙げた生きている証拠や疑問の中から、心拍・脈について取り上げ、心拍・脈の実際の働きや事実に着目させていく。生まれてからこれまでの心臓が動いてきた数を予想させることで、調べたいという意欲を喚起する。 ●聴診器を提示し特徴を説明した後で、聴診器と電卓を配布し、二人組で心拍数を調べさせる。その数を基に、これまで生きてきた年数分のおよその心拍数を計算させる。 ○拍動してきた数の多さを実感させ、心臓の働きについて説明することで、意識していなかったからだの働きに目を向けさせる。 ○胎児の心音、全身の血管図、血流の速度を示す映像、横隔膜の模型などを活用し、心拍・脈、呼吸の関係について捉えさせ、拍動、呼吸の意味について考えさせる。 ○運動後の拍動の速さを心音拡張器で確認しながら、心拍(脈)・呼吸・体温・からだに起こる現象(汗をかくなど)の関係について捉えさせる。
<p>4 感想を伝え合い、振り返りをする。</p>	<p>4 (授業で得た気付きや学びについて進んで記述をしている。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・からだって、生きるためにこんなに毎日頑張っているのか。 ・生きているってすごい営みだ。 ・いのちって、からだの働きそのものだということわかった。 ・なんだか自分のからだといのちが愛おしくなったな。 ・自分やみんなのからだも大事にしたい。 ・これからもからだやいのちをにしていきたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習で得た「からだ・いのち」についての気付きや学んだことを、学習感想としてワークシートに書かせ、伝え合わせる。このことによって、学びを共有させ、自他の「からだ・いのち」についての考えを深めさせていく <p>※ バイタルサイン(生きている証)を調べる活動等を通して、生きているからだの事実や意味に気付き、これまで以上に自分や友達の生きているからだやいのちを大切にしようとする意識を高めることができたか。</p> <p>(思・判・表：様子、発言、ワークシート)</p>

新教科「コンピューター・サイエンス」の 試行について

宮城教育大学技術教育講座
教授 安藤 明伸 先生



1 はじめに

小学校での新学習指導要領が完全実施されました。プログラミング教育のねらいとしては、「プログラミングで何を学ぶか」が重要です。従来から情報活用能力の3観点として、「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」があり、プログラミングを通して子どもたちに理解させたいことは「情報の科学的な理解」なのです。これは学問領域では、情報科学、中でもコンピューター・サイエンス（CS）が最も近いものです。では、このCSとは何なのでしょう

2. コンピューター・サイエンス （CS）とは

CSは非常に広範な内容を含みますので、それらを全部小学校段階で扱うことはできません。そこで、何が重要であるのか焦点化する必要があります。ここでは、CSは、現実世界に元々存在しておらず、2種類の情報で人工的に表される世界の中で発展するものとして捉えたいと思います。この表現は多少の語弊がありますが、分りやす

さを優先しておきたいと思います。このCSの世界は、CSの中で開発された新しい技術革新によって、CSの世界自体そのものが発展するという特殊な概念で成り立っています。その原理を突き詰めていけば、数学や物理という学問が基礎になっていますが、小学校段階ではそこまで掘り下げるのではなく、デジタル化された情報はどのように扱うことができるのか、電子機器の動作原理（ハードウェア）、インターネットの仕組み、コンピューター特有の考え方（ソフトウェア、プログラミング）等の構成要素で捉えるのが良いでしょう。

3. どうして小学校段階からCSが必要か

現在のデジタルなものづくりは、ユーザ中心設計で制作されており、マニュアルを読まず直感的に操作できるようになっています。これは利用者目線で考えれば、大変使いやすさを意味しますが、見方を変えると、作る側に無意識に誘導されていることも意味するのです。画面に現れた「承諾する」

とうボタンを押すと、何が起こるのか、どんなデータが送られるのか、使う側には一切確証は持てないのです。多くの人たちが、どうしてコンピュータが動作しているのかということの基本的なことを理解せずに、自分や他人の人生を左右しかねない重要な情報を無意識に扱っていると考えると、怖くありませんか？しかし、冷静に怖がるのが大切です。例えば、パソコンやスマホの動作が遅い、知らないアプリが気がついたら入っていた等があった場合、「何故か知らないけど、何か変だ」で片付けていないでしょうか。コンピュータの世界では、「何となく」はなく、全てが論理的、つまり必ず理由があります。CSの知識があれば、動作が遅くなってきた理由は、使用できるメモリが少なくなったのか、ハードウェアとして処理できる能力以上のことを無理にさせようとしているのか、見当をつけるためにメモリ使用量や保存領域の残量を調べることでしょう。もしそれで異常がなければ、ウィルスへの感染を疑うことになります。コンピュータのプログラムの仕掛けに対して私たちが素手では無力であることを理解していれば、スマホにもウィルス対策アプリを入れて、脅威をテクノロジーで防ごうとするでしょう。

またコンピュータで様々な処理

ができるようになることは、様々な手段として活用できることを意味します。その点でも、「情報活用能力」が言語能力や問題発見・解決能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」として位置づけられていることがわかります。

4. CSが「普通」になるように

CSは新しい学問領域で、その内容は常にアップデートされます。普遍的な内容を扱う従来の教科観では違和感があるかもしれません。しかし、私たちが生きているこの世界は既にこうした人工的に構築された空間の中に成立しているのです。子どもたちだけでなく、むしろ大人側の理解も進めていく必要があるでしょう。

附属小学校が試行しているCSでは、単に情報を科学的に理解するだけでなく、情報モラルについても科学的に理解し、作ることで学び、問題解決のために工夫し想像する資質・能力も育成しようとしています。その意味では英国のComputingに近いかも知れません。これまで先生方も指導したことの無い内容の教材研究や指導法研究は大変かも知れませんが、全国でも稀な非常に大きな価値のある取組みです。今後も学校で一丸となって推進していただきたいと共に、教員養成段階の在り方の検討が急がれます。

第5学年1組 コンピュータ・サイエンスの時間 学習指導案

授業者 大久保 達郎

1 題材名 プログラミングで自動運転 ～IoT時代を考える～

2 題材について

〈本題材に関わる情報活用能力〉
<ul style="list-style-type: none"> PCの基本操作（起動、保存、タイピング）ができる。 ブロックを組み合わせることでプログラミングをする方法を理解している。
<ul style="list-style-type: none"> 機器を接続し、必要なデータを転送することができる。
<ul style="list-style-type: none"> 意図した処理を行うために、繰り返しや条件分岐などを含んだプログラムの作成や評価、改善ができる。
<ul style="list-style-type: none"> センサや無線通信などの仕組みを知り、その利便性や危険性について身の回りの生活と結び付けて考えることで、コンピュータやネットワークのよさに気付いたり、よりよい生活に生かそうとしたりする。

〈本題材に関わるCS要素〉
A コンピュータの仕組みと基本操作
B ネットワーク技術①
F アルゴリズムとプログラミング②③
G コンピューティングと社会との関わり②③

本題材では、アーテックロボ2.0を簡易的な車に組み立て、Scratch3.0のプログラミング言語をベースにしてプログラムを組みながら、様々な状況に対応して自動走行できるように制御する活動に取り組む。動作の制御、センサを用いた制御、ネットワーク通信を生かした制御など段階的にプログラミングできるように、場の状況設定を変えて活動を設定する。そうすることで、体験的に自動運転の制御のプログラムを考えながら、センサやネットワーク通信の基本的な仕組みや特徴、その有用性などについて気付くことができるようにしていく。更に、身の回りの生活に活用されているコンピュータやネットワーク技術の存在に目を向けさせることで、コンピュータへの理解を深めたり、生活や社会の変化について考えたりすることができるようにしていきたい。



【アーテックロボ2.0組み立て例】

3 題材の構成と時間配当（6時間扱い 本時 4/6）

次	時	◎学習のねらい ・主な学習活動
一次 つかむ	1	<p>◎コースに対応して、動いたり、止まったり、曲がったりするプログラムの組み方を考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自動で走行する車やロボットを見て、どんなプログラムが組みられているかを予想する。 簡単なコースを道順通りに対応して走行する自動運転車のプログラムを組む。
二次 広げる	2・3	<p>◎センサを生かして、壁や物などを認識して自動運転する車のプログラムの組み方を考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自動運転の映像を見て、センサの必要性に気付かせ、どのような指示が必要かを考える。 タッチセンサや赤外線センサなどを用いて、物を認識して動いたり衝突を回避したりの組み方を考え、車を自動運転させながらプログラムを修正する。
	4・5 本時	<p>◎無線通信を生かし、デバイス間で情報を伝え合わせることで、動きや信号に応じて自動運転するプログラムを考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 無線通信の機能を生かし、離れた場所から車を発進させたり停車させたりするプログラムの組み方を考え、車を自動運転させながらプログラムを修正する。 無線通信の機能を生かし、自動走行の動きや信号機の変化に反応して自動運転するプログラムの組み方を考え、車を自動運転させながらプログラムを修正する。
三次 深める	6	<p>◎自動運転のよさやネットワークでつながり合う社会のよさについて考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自動運転の技術やネットワーク技術の進歩による生活や社会の変化について考えることで、未来の自分たちの住む社会について当事者意識をもつことができるようにする。

4 本時の学習

(1) 本時のねらい

無線通信を生かし、デバイス間で情報を伝え合わせることで、動きや信号に応じて自動運転するプログラムを考えることができる。

(2) 本時の学習過程（本時 5/6 時間）



【サンプル自動運転制御】



【サンプル信号機】

主な学習の流れ	予想される子供の姿	指導上の配慮事項	コンピュータ・サイエンスの視点
1 無線通信を用いた自動運転の動画を見て、本時の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・センサを用いて、物を認識して走行するプログラムは組めたけど、例えば赤信号の時に直進してしまうと事故が起きてしまう。 ・信号機の前に車が来ると信号が赤になって止まるぞ。青になるとまた動き始めるのか。 	1 無線通信による自動制御の動画を見ることで、「信号に合わせて止まる」というデバイス間の通信に気付かせ、通信し合うことで制御する活動に見通しをもたせていく。	2 無線通信を用いた自動運転の制御の映像やサンプルプログラムから、どのような指示が必要か、一つ一つの指示として分解して考える。 【プログラミング的思考】
無線通信で情報を伝え合い、自動運転するプログラムを考えよう。			
2 サンプルプログラムを読み取り、目的を明確にもたせたり、一つ一つの指示に分解したりして考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・「無線」を使えば同じようなことができそう。 ・どのタイミングで信号を送ればいいかな。 ・車が前に来た時に、赤外線センサで認識して、無線を送るようにすればいいんじゃないかな。信号を赤にして無線を送って、無線を受け取ったら止まるようにすればいいんだね。 ・あれ、うまくいかないな。分かった、命令を「ずっと」にしていないからうまくいかないんだ。 ・青信号になったら無線を送ってまた走り始めるようにすればいいのかな。試してみよう。 ・センサを使わなくても無線のやり取りで制御することができるから、無線通信とセンサを両方使えば、より安全に走行することができそうだね。 ・無線通信やセンサを利用することで、色々な状況に対応できるものをつくれるんだね。 	2 サンプルプログラムで自動運転車を走らせることで信号機の色によって止まったり、走ったりするプログラムの組み方に見通しをもつことができるようにする。	3 「信号が青の時は走る」「赤と黄のときは止まる」という目的を果たすプログラムの組み方を考える。また、修正の見通しをもちながら、デバックする。 【プログラミング的思考】
3 言語を組み合わせた必要指示を考へて実行する。		3 プログラムを組む際には、グループで一つの機器を扱うことができるようにする。 また、必要に応じて、組んだプログラムを全体に紹介し、よさや修正点を考えさせていく。	無線通信を用いてデバイス間で情報のやり取りをする基本的な仕組みを捉える。 【ネットワーク技術】
4 プログラミングの活動やコンピュータについて分かったことを振り返る。		4 信号機と車での通信を用いた制御プログラムを組む中で気付いたことを共有させる。	4 信号機と車での通信を用いた制御プログラムを振り返り、無線通信を生かすことの利便性や危険性について考える。 【コンピューティングと社会との関わり】

第4学年2組 コンピュータ・サイエンスの時間 学習指導案

授業者 上杉 泰貴

1 題材名 ちよつといい未来を考えよう ～プログラミングでできること～

2 題材について

〈本題材に関わる情報活用能力〉	〈本題材に関わるCS要素〉
・タブレット端末の基本操作（起動、タップ、スワイプ、カメラ）ができる。	A コンピュータの仕組みと基本操作
・ブロックを組み合わせることでプログラミングをする方法を理解している。	
・アカウントにアクセスし、必要なデータをダウンロードすることができる。	B ネットワーク技術
・情報を構成する要素（文字、音、画像等）を踏まえ、目的に応じて組み合わせる表現することができる。	D データと加工・分析
・単純な繰り返し・条件分岐、データや変数などを含んだプログラムの作成、評価、改善	F アルゴリズムとプログラミング
・情報の発信や情報をやりとりする場合にもルール・マナーがあることを踏まえ、行動しようとする。	G コンピューティングと社会との関わり
・情報や情報技術をより良い生活や社会づくりに活かそうとする。	

Scratchは、単にプログラムを作るだけでなく、そのサイト上で公開した作品は作者を尊重する形で誰もがプログラムを改変して発展させられ、コメント設定をONにすれば、作者に対して感想や質問などオンラインで情報をやりとりできる。本題材では、4学年の総合的な学習の発表のツールとしてScratchを用い、双方向性のあるコンテンツのプログラミングに取り組みせることを通してコンピュータ・サイエンスとして情報やネットワークの特性を理解させる。その中で、情報を発信する立場に立たせ、目的に応じて収集した情報をどのように組み合わせるのか考え、正確に情報を取り扱うことの重要性や、利用者にとって使いやすいものにしていく必要性に気付かせる。そして、意図した動作の実現に向かってコンピュータへの指示の出し方について問題解決サイクルを繰り返しながら、論理的に考える力を高めさせ、コンピュータについての理解を深めさせる。作成したコンテンツをオンライン上で評価しあうことで、時間や場所の制約を受けず情報が蓄積されていく等の、ネットワークを通じて発信するよさについて考えさせ、使い方によって地域や社会の問題解決につながることを捉えさせるとともに、作る立場とそれを使う立場のそれぞれが気を付けなければいけない等、情報モラルについても考えをもてるようにしていきたい。

3 単元の構成と時間配当（4時間扱い 本時 4/4）

次	時	◎学習のねらい ・主な学習活動
一次 つかむ	1	◎情報の特徴を理解し、効果的に発信する方法を考えることができる。 ・いずみタイム（総合的な学習の時間）で調査した内容を想起し、発信の方法を話し合う。 ・対面での情報の特徴とインターネット上の情報の特徴を比較し、見通しをもつ。 ・ネットワークを通じた情報の伝達方法を捉える。
二次 広げる	2・3	◎意図したコンテンツになるよう、プログラムを考えることができる。 ・2つの映像を見て、双方向性・単一方向性のコンテンツの特徴を比較し、よさを話し合う。 ・サンプルプログラムを基に、条件分岐やイベント処理等を用いて、ユーザーの入力に応じて必要な情報が表示されるプログラムを考える。 ・意図する動きになっているかを確認しながらプログラムを作成する。 ・活動を振り返り、身の回りで活用される仕組みを、イベントと処理、分岐で捉える。
三次 深め	4 (本時)	◎インターネットによる発信のよさと責任等について、自分の考えをもつことができる。 ・前時を振り返り、インターネットを通じた発信の意義を捉える。 ・作成したプログラムをお互いに操作し、scratch上で相互評価を行う。 ・インターネットによる情報発信の社会的影響について話し合う。 ・「ちよつといい未来」につなげるため、インターネット等をどのように扱うべきか考える。

4 本時の指導

- (1) 本時のねらい 情報の特徴を理解し、効果的に発信する方法を考えることができる。
 (2) 本時の学習過程 (本時 1/4時間)

主な学習活動	予想される子供の反応	指導上の留意点	コンピュータ・サイエンスの視点
<p>1 いずみタイムで調査した内容を想起し、発信の方法を話し合う。</p> <p>2 対面での情報の特徴とインターネット上の情報の特徴を比較する。 「3年生の時、どんな発信方法を使ったか。」 「それら発信方法の共通点は何か。」 「情報の特徴を比べよう。」</p> <p>3 ネットワークを通じた情報の伝達方法を捉える。 「インターネットでは、どのような形で情報を送っているのだろう。」 「2枚の絵は何がちがうのだろうか。」</p>	<p>・七北田川に絶滅危惧種がいることを伝えたいな。 ・蒲生干潟に興味をもってもらいたいね。 ・蒲生を守る会についても紹介したいな。</p> <p>たくさんの人に情報を伝える情報の特徴を考えよう。</p> <p>・3年生の時に、映像を作ったよ。 ・来た人にプレゼンテーションをしたね。 ・共通点は、「直接会った人」に伝えるということだ。 ・もっと、たくさんの人に伝える方法があるといいな。 ・「直接会えない人」にも伝えるには、インターネットがいいのではないかな。 ・それぞれに、どんな特徴があるか比べてみよう。 ・直接会えれば、作った新聞や映像を見てもらえるよ。 ・顔を合わせて話が出来たから、伝わった気がしたよ。 ・でも、直接会えない人には情報は一つも伝わらない。 ・インターネットなら、都合のいい時間に使えるよ。 ・遠くにいる人にも見てもらえるね。 ・でも、遠くの人に見てもらうには、相手に送らないといけないよ。 ・インターネットでは、どうやって送っているのかな。 ・文字や写真は、メールでそのまま送れるよ。 ・鉛筆で描いた絵はコンピュータに取り込まないと。 ・半角文字1つ分のデータの大きさが「1Byte」なんだ。 ・あれ、同じ写真だけど、データの大きさが違うよ。 ・拡大するとギザギザになってきたぞ。 ・ギザギザしにくいほうが、データ量が大きいんだね。 ・コンピュータでは、絵も数字になるんだね。 ・音も数字になっていたよね。 ・データをすべて数字に書き換えているから、あっという間に世界中にも届けられるんだね。</p>	<p>2 「対面の情報」と「インターネット上の情報」について、3つの観点で整理させ、インターネットの働きによってどのような「ちょっといい未来」が実現できそうか捉えさせる。</p> <p>【相手】 直接会える人、世界中の人 【情報を伝えるもの(データ)】 文章(文字)、静止画(描いた絵、写真) 音声、動画 【できること】 顔や反応を見ながら話せる、時間を気にせず見たい時に見られる、遠くにいる人にも伝えられる 「年賀状」や「小包の配達」を例にして、遠くの人に情報を届ける仕組みを提示する。遠隔地にも高速で届けるため、情報のデジタル化が必要であることにつなげていく。</p> <p>3 解像度を変えてスキャンした2つの画像ファイルを提示し、PC上で比較させる。拡大、縮小させたり、データ量の違いに目を向けさせたりしながら、アナログな情報がデジタルになっていることを捉えさせる。 数字としてのデータに変換されることで、ネットワークを介して高速で伝達されることにつなげていく。音や動画も合わせてエクスプローラ上で比較させ、データ量の大きさに気付かせたい。</p>	<p>2 2つの情報について比較・整理させることでそれぞれのよさや特徴を捉えさせる。また、情報を構成する要素に着目させる。 【メディアの特徴】</p> <p>3 アナログな情報をデジタルに変換していることや、変換の仕組みを簡単に捉えさせる。 【アナログとデジタル】</p>

4 本時の指導

- (1) 本時のねらい 意図したコンテンツになるよう、プログラムを考えることができる。
 (2) 本時の学習過程 (本時 2・3/4時間)

主な学習活動	予想される子供の反応	指導上の留意点	コンピュータ・サイエンスの視点
<p>1 2つの映像を見て、単一方向性、双方向性のコンテンツの特徴を比較し、よさを話し合う。「コンテンツAとBはどんな違いがあるだろう」「どんなよさがありそうですか」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「さくら学年の紹介」って書いてあるよ。 ・Aのほうは、「再生」を押したらビデオが流れたよ。 ・Bのほうは、自分でボタンを押していくんだね。 ・内容は同じようだけど、それぞれよさがありそう。 ・Aは、全体がつながっているよ。一つの操作で全体が見られるよ。 ・Bは、自分が見たいところを選べるよ。どんな情報があるかも、目次みたいでわかりやすいね。 	<p>1 4学年を紹介するA、B二つのコンテンツを提示する。<u>一つの指示に対して常に同じ動作をするコンテンツ(単一方向性・A)</u>と、<u>ユーザーの入力に応じて動作が変化するコンテンツ(双方向性・B)</u>を比較させながら、それぞれのよさを捉えさせる。</p> <p>2 先に示した2つのコンテンツについて、プログラムを見せながらアルゴリズムを捉えさせる。「クリックされたら写真が表示される」等を取り上げ、イベント処理について捉えさせる。その後、<u>始めにひらがなローマ字かを問う画面のあるコンテンツ(C)</u>を提示し、ユーザーの入力によって処理が二つに分かれる条件分岐をつかませる。</p>	<p>1 2つのコンテンツを比較させ、単一方向・双方向のコンテンツそれぞれのプログラムの違いを捉えさせる。</p> <p>2 イベント処理と条件分岐の違いを捉えさせる。 【アルゴリズムとプログラミング】 表現したいことに応じて、メディアを組み合わせさせて表現させる。 【データの加工・分析】</p>
<p>相手が選んだ情報を表示するプログラムを考えよう。</p>			
<p>2 サンプルプログラムを基に、ユーザーの入力に応じて必要な情報が表示されるプログラムを考える。「どんなプログラムになっているのだろう。」「自分が作りたい動きになるように、図に表してみよう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どんなプログラムになっているのかな。 ・スプライトがクリック(タップ)されたら、写真が表示されるんだね。 ・目印の上に矢印が来たら、地名が表示されるんだ。 ・「ボタンが押されたら・・・する」という処理の仕方を、イベント処理っていうんだね。 ・Cのプログラムは、まず「漢字」「ローマ字」を選ぶ画面が出てきたよ。 ・「ローマ字」を選んだら、ローマ字の説明が出たよ。 ・「○のときは△、□のときは◎」というように、処理が分かれるんだね。条件分岐っていうんだね。 ・イベント処理を使って、上中下流の生物を紹介しよう。 	<p>3 子供たちの技能差に対応できるよう、背景や目印を配置したプログラムを修正させていく。予め、児童が書いた情報カードや、現地で撮った写真を共有フォルダに入れておき、スプライトとして呼び出せるようにしておく。途中、「二つ目の情報を同じように表示させるにはどうすればいいか」と問うことで、「画像データを入れ換えれば同じように出来る」ことに気付かせ、画像を入れ替えれば同じ指示で実現できることを捉えさせる。</p>	<p>3 具体的な指示に分解してプログラムを組み立てさせる。意図通りにプログラムが動かない場合には、指示ブロックを言語化させながら適切な指示になっているか確認させる。</p>
<p>3 意図する動きになっているかを確認しながらプログラムを作成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・条件分岐を使って、「生き物」の情報と「きれいさ」の情報を分けたらおもしろいな。 ・前の情報を消す指示がないと見にくいな。 	<p>4 活動を振り返らせる。身の回りで用いられているコンピュータの映像を提示し、分岐やイベント処理の一般化を図るようにする。</p>	<p>4 身の回りのコンピュータに生かされていることを捉えさせ、一般化を図る。 【アルゴリズムとプログラミング】</p>
<p>4 活動を振り返り、身の回りで活用される仕組みを、イベントと処理、分岐で捉える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字とひらがなで分かれるから分岐だね。 ・仙台駅のインフォメーションだね。分岐とイベントが組み合わせられているよ。 ・「降ります」を伝えるバスのボタンはイベント処理だ。 		



4 本時の指導

(1) 本時のねらい インターネットでの発信のよさと責任、リスク等について、コンピュータ・サイエンス的な視点をもって情報社会に参画していく気持ちを持つことができる。

(2) 本時の学習過程 (本時 4/4 時間)

主な学習活動	予想される子供の反応	指導上の留意点	コンピュータ・サイエンスの視点
1 前時を振り返り、インターネットを通じた発信の意義を捉える。	<ul style="list-style-type: none"> ・分岐やイベントを使って、コンテンツを作ったね。 ・遠くの人にもすぐに見てもらえるようになるんだよ。 ・世界中のだれもが利用できる情報を発信すると、ぼくらでも社会に貢献していることになるんだ。 ・英語で情報を書ければ、もっと大勢の人に伝わるな。 ・だからこそ、確かな情報かどうか確かめないと。 	1 インターネットを通じた発信により期待される「ちょっといい未来」を振り返らせる。有用な情報を発信することで、インターネットでつながる誰かの役に立つことを理解させ、社会貢献に寄与することを伝え、責任をもって関わろうとする態度につなげていく。	
インターネット上に発信するとき大切なことは何か。			
2 作成したプログラムを共有し、scratch 上で相互評価を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・公開すると、コメントをもらえるかもしれないというのが楽しみだな。質問も来るかもしれないな。 ・だれが見るかはわからないから、いやな気持ちにならないようにマナーをもって書かないといけないな。 ・使った感想をコメントしてもらったら励みになった。 	2 共有機能を使って、お互いのコンテンツを試用させる。使う立場からの感想等をコメント機能により書き込ませ、レビュー体験をさせる。実際にアプリ等をよりよくする方法として取り入れられていることにつなげる。	2 アカウントに紐付いたコンテンツを用い、ネットワークが実現した新たなコミュニケーションツールの使い方を体験させる。 【ネットワーク技術】
3 インターネットによる情報発信の社会的影響について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・「こうだったら便利だな」って思ったけど、実際に作ったとき難しかったから、どう書くか迷ったよ。 ・アイデアを出したり作ったりしてくれた人に、ありがとうの気持ちをもつことが大事だね。 ・「どんどん改良してよい」なんて面白いな。そうやって、よりよいものが生まれてくるんだな。 ・プログラムを組むとき、使う人にどう役立つかを考えて、悪いことに使わないことが必要だよ。 ・個人情報を書かないように気を付けよう。 ・敬意を忘れずにコメントしたいな。 	3 コメント機能を使った感想を共有させ、ユーザーレビューの効果と留意点を共有させる。Scratch 上での著作権について触れ、リミックスという方法により協働的によりよいものを作る仕組みがあることを理解させる。	3 ユーザーレビュー体験を通して、自分の適切な評価がコンテンツをよりよくすることを感じさせる。 【コンピューティングと社会との関わり】
4 活動を振り返り、「ちょっといい未来」につなげるために、インターネット等をどのように扱うべきか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もみんなも便利に使うために、「こうだったらいいな」をいつも考えながら使いたい。 ・みんなが正確な情報を発信できるようになると、テレビで流れていない今の情報も伝えられるはずだから、いたずらとかで使わないようにしましょう。 ・発信、受信ともにフェイクニュースに気を付けよう。 	4 ①プログラムをすることで実現する双方向性、②作る側・使う側の倫理観、③インターネットならではの著作権の在り方、④インターネットによって離れたところや世界中で扱うことができるようになる、⑤デジタル化された情報の特性、⑥ネットワークによって良くも悪くも情報が拡散しやすい点等を踏まえ、技術をどのように扱えばよいか問い掛ける。誤った情報が流布することの危険性や、悪意をもってコンテンツを作成した影響に触れ、技術を人のために活用する大切さを捉えさせる。	4 正確な情報の発信や使い手を考えたプログラミングの必要性等、モラルを身に付ける重要性を捉えさせる。 【コンピューティングと社会との関わり】

「小学校外国語教育における
指導と評価の一体化」の試み

宮城教育大学 英語教育講座
准教授 鈴木 渉 先生



1 はじめに

令和2年3月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校外国語・外国語活動】』（以下『参考資料』とする）が出されました。本学附属小学校においても、『参考資料』に基づいて、子どもの実態や教科書（例：『New Horizon Elementary』）を踏まえた外国語科の実践が行われてきています。

本稿では、『参考資料』に基づいて、外国語科における指導と評価の具体について、特に、「話すこと[やり取り]」の評価規準を例に取りながら、述べたいと思います（42頁を参照）。

2 「知識・技能」

「知識」の観点とは「身の周りの物を表す語や、I like/ want/ have ~., Do you ~?, What do you ~? の表現について理解している。」と書かれています。「技能」の観点は「自分や相手のことについて、身の周りの物を表す語

や、I like/want/have ~., Do you ~?, What do you ~? を用いて、考えや気持ちなどを伝え合う技能を身に付けている」と書かれています。

ここから読み取りたいことは、本観点の評価が、言語材料（I like/ want/have ~., Do you ~? What do you ~?）を正しく使っているかどうかを評価するということです。

このことについては、新学習指導要領外国語の「知識及び技能」に関わる目標が「外国語の音声や文字、語彙、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに…[途中略]…実際のコミュニケーションにおいて科活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」であることから確認できると思います。

3 「思考・判断・表現」

「思考・判断・表現」の観点は「新しくやってきた ALT のことを理解したり自分のことを伝えたりするために、自分や相手のことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、考えや気持ちなどを伝え合っている」と書かれています。

ここから読み取りたいことは、本観点の評価が、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて適切にやり取りしているかどうかを評価するということです。

このことについては、新学習指導要領外国語の「思考力、判断力、表現力等」に関わる目標が「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに…〔途中略〕…自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う」であることから確認できるでしょう。

4 「主体的に学習に取り組む態度」

「主体的に学習に取り組む態度」の観点は「新しくやってきた ALT のことを理解したり自分のことを伝えたりするために、自分や相手のことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、考えや気持ちなどを伝え合おうとしてい

る」と書かれています。

ここから読み取りたいことは、「主体的に学習に取り組む態度」と「思考・判断・表現」は一体的に評価するものであるということです。

「思考・判断・表現」の観点で書かれている、ALT のことを理解したり、自分のことを ALT に伝えたりするためには、ALT の出身国や地域の文化について配慮したり、ALT が日本に来たばかりであることを配慮したりすることが、重要になってくると思います。外国語で適切にコミュニケーションを取るためには、異文化理解や他者理解が欠かせないでしょう。

このように見えてくると、「思考・判断・表現」の観点は、新学習指導要領外国語の「学びに向かう力、人間性等」に関わる目標が「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」であることに関連していることに気付くのではないのでしょうか。

5 終わりに

本稿では外国語科を中心に述べてきましたが、この基本的な考え方は中学年の外国語活動にも当てはまります。

小学校外国語科の評価の取組

宮城教育大学附属小学校

尾形 尚子

1 はじめに

令和2年度から、小学校では5・6年生の外国語が教科化となりました。本校では、平成13年度より外国語活動（英語活動）に取り組み、平成27年度からは文部科学省の英語教育強化地域拠点事業指定を受け、1～4年生までの活動型と、5・6年生の教科型を総称して英語科とし、研究に取り組んできました。今年度からは、5・6年性の教科化に加え、3・4年生においても外国語を教科として先行的に実施しています。

そこでここでは、小学校英語科の研究や実践の取組から見えてきた小学校外国語科の評価の取組について振り返っていききたいと思います。

2 パフォーマンステストでの評価

平成27年度から本校では、児童の外国語の評価の一部として5・6年生の英語科において、パフォーマンステストを実施しています。パフォーマンステストでは、ALTと児童の一对一のやりとりを通して、質問されたことを理解し、相手に応じたやりとりを行うことや、自分の気持ちを伝えたり、

身近な事柄について伝えたりすることができていたかを見取り、主に児童の「思考力・判断力・表現力」を評価します。



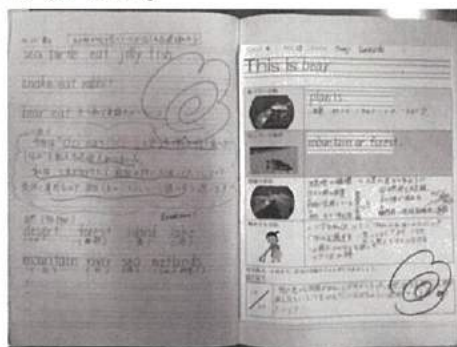
【パフォーマンステストの様子】

児童がパフォーマンステストにおいて、力を発揮できるよう、本校ではパフォーマンステストの在り方について検討を繰り返してきました。まず、パフォーマンステストを行うに当たって、テストではなくALTと楽しく会話することを児童に事前指導において心掛けさせるようにしました。また、児童の姿を評価する各担任が児童のどんな姿を評価するかの共通認識をもってパフォーマンステストに望めるようにしてきました。さらに、ALTも児童が緊張せず会話をすることができるよう、表現を補うなどの手助けをして、児童が英語を学習する意欲を高められ

るように実施してきました。その結果、ALTとのパフォーマンステストで児童がこれまでの学習で高めてきた「思考力・判断力・表現力」を教師が評価するとともに、児童はALTと一対一で英語を使ってやりとりをすることができた喜びや充実感を感じ、英語学習への意欲や自信にも繋げることができました。

3 ノートを活用した評価

本校では、昨年度から5・6年生の英語科において英語ノートを使用し、評価に活用してきました。使用するノートは、教科書で扱っている英語の字体に合わせたノートを使用し、児童が授業において必要な時に、ノートを活用して自主的に学習を進められるようにしてきました。



【児童の英語ノート】

ノート指導を開始してから、学習した表現を英語ノートに書き残したり、英語ノートに書いた表現を振り返ったりしながら学習を進める児童の姿が見られました。また、児童が学習したことを英語ノートにおいて振り返らせることで、

単元のゴールに向けた児童の取組を継続的に見取り、「主体的に取り組む態度」を評価することができました。英語ノートを活用したことで、ゴールに向けて学習に取り組む児童の姿を具体的に見取り、児童の日々の取組を評価することができました。

4 さいごに

5・6年のこの取組を通して、英語科における評価のよりよい在り方について考えることができました。

パフォーマンステストや英語ノートでの評価を通して、児童が英語を用いて自分の考えを伝える際に、よりよいコミュニケーションを目指したり、何をどのように学ぶのかを考え、学習を進めたりする姿を見ることができました。また、英語科における評価への取組を通して、教師がこれまでの指導を振り返り、よりよい指導に生かす必要性や、児童が自分の力を高め、伸ばしていくことができるような指導の在り方について改めて学ぶことができました。今後も英語科の評価の在り方について考えることで、主体的にコミュニケーションを図る児童を育成することができるよう、実践を積み重ねていきたいと思えます。

ESDの充実

各教科等との能力関連をどのように仕組んでいくか
～活用の自覚化～

宮城教育大学

名誉教授 見上一幸 先生



1. 学習指導要領とESD

AIの発達などスマート化の進む変化の激しい社会にあって、新型コロナウイルスのパンデミックや気候変動など、今、人類は持続不可能を思わせるさまざまな問題に直面している。このパラダイムシフトの時代を迎え新学習指導要領では、前文と総則において持続可能な社会づくりに関連する記載がなされた。つまり、「これからの学校には、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、“持続可能な社会の創り手”となることができるようにすること」が求められている。

この“持続可能な社会の創り手”を育成するESD (Education for Sustainable Development, 持続可能な開発のための教育) は、日本が中心となって世界に提唱した教育で、いわば日本発の教育といえる¹⁾。さらに国連ではMDGsの後継として2030年までに解決すべき「持続可能な開発目標 (SDGs)」が2015年に採択され、ESDへの理解が一層進んだ。

2. 社会に開かれた教育課程

変化の激しい社会において、子供たちが困難を乗り越え、未来に進む希望や力を得るには、社会と連携した教育活動が求められる。

新学習指導要領では、この理念の上に「資質・能力の三つの柱」や「カリキュラム・マネジメント」などが示されている。すなわち、学校教育を通じて「よりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、次世代を創る子供たちに必要な資質と能力を育成しようとするものである。そのためには地域との連携・協働が必要となる。

次世代を創る子供たちに必要な資質と能力を育成するには、地域社会との連携・協働のもとに「生活科」や「総合的な学習の時間」等を中心に、教科間あるいは学年間で、内容と育成すべき能力の両視点から、有機的なつながりを持たせるカリキュラム編成が重要になる。そのゴールは、子供たち自身が、何のために学ぶのか、“どう生きるか”を考え、行動の変容へとつながり、“持続可能な社会の創り手”としての資質・能力を獲得できると考える。

3. ESD推進拠点としてのユネスコスクール

これまで日本ではユネスコスクールが、ESDの推進拠点としての役割を果たしてきた²⁾。その理由は、ユネスコ (国際連合教育科学文化機関) がESDの主たる国連の担当機関であり、ユネスコ憲章の理念とESDに共通する部分が多いためである。現在、日本におけるユネスコスクールは、幼稚園から大学まで、全国で約1200校が登録

されており、世界で最も多い数である。

宮城教育大学附属小学校は、宮城県で最初にユネスコスクールへ登録申請(2007)し、総合的な学習の時間を中心にESDに取り組んできた。地元学としての「仙台学」をテーマに、福祉、防災、文化、環境の分野から地域について学んだ。この度の学習指導要領の改訂で全国の学校が「持続可能な社会の創り手」を育成することになり、ユネスコスクールにはさらに質の高いESD実践が期待されている。

4. ESDで培われる能力

ESDで培われる能力には、コミュニケーション能力、クリティカル・シンキング(批判的思考、得られた情報に対して批判的な思考を働かせて分析する習慣)、システム・シンキング(システム思考、“システム”という概念で対象全体を包括的にとらえる)、ディシジョン・メイキング(意思決定、その時点で最善の判断を行うことができる能力)、実践力・実行力、感謝する心の醸成などがあると考えられる。ESDで培われる能力については、国立教育政策研究所により詳細にまとめられている³⁾。大切なことは、ESDをテーマに掲げさえすれば、これらの能力が身に付くわけではなく、しっかりした教科の学習で培われた能力とも連動している。

コミュニケーション能力や表現力は、スキルを磨けばそれで済むものではない。人は感動した時に、それを近くの人に伝えたいと思うものであり、相手に伝えたいという強い気持ちがあつてこそ

ことである。授業通じて子供たちにどれだけの感動を与えたかということも表現力に通じる。

ESDの実践で陥り易い点として、イベントに流れ易いことである。イベントは子供にとって“ハレ”の時であり、動きも活発で教師にとっても生き生きとした姿を感じ易い。そのためイベントに頼りがちであるが、時宜にかなったイベントが各教科で培われた力を高めることにも有効と思われる。また、「総合的な学習の時間」などで、アクティブラーニングを活用し、よきファシリテータとして教師が機能するためには、論理的思考を深めるために展開の方法として「帰納法」「演繹法」「アブダクション」など論理的思考も念頭におくと良いかもしれない。

5. カリキュラム・マネジメントとESD

ESDでは、地域の課題をテーマとした豊かな体験を伴う活動を実施しており、「地域社会に関わった教育」を実施してきている。

「生活」や「総合的な学習の時間」を軸にした豊かな経験や考え方を、各教科間でどう生かすかも課題である。

例えば、宮城教育大学附属小学校では、ESDの視点から、1年生から6年生までの縦割り活動、仙台七夕などの行事と連動した活動、仙田野菜を使った学校給食を組み込んだ食や健康に配慮した活動などを教科に連動させた教育実践を行なってきた⁴⁾。

ESDでカリキュラム編成に、はじめて本格的に取り組んだのが手島利夫氏の「ESDカレンダー(ESD年間指導計画)」(2007)である⁵⁾。本附属小学校でも各教科と

「総合的な学習の時間」との関係
を、能力関連及び内容関連の双方
の視点に立って、ESDカレンダー
を作成し、PDCAサイクルを通じて
改善を続けている。

「生活」や「総合的な学習の
時間」では、豊かな体験を通して
疑問や驚き、発見などの感性を養
うことができる。「実体験を通し
て学ぶ」や「物事を経験すること」
は、自らが感じる事、疑問
に思うことなど、主体的な学びの
上で重要であり、教科の学習にも
反映される。探求の過程では、自
らの課題を設定し、情報の収集、
整理、分析、考察、まとめ・表現
というプロセスが含まれる。さら
にESDでは、行動の変容までが求
められる。

同時に教科の学習は、「総合
的な学習の時間」等の活動の質を
高めることにも貢献する。例えば
「国語科」での学習の成果は、言
葉（言語）の能力として思考過程
でも、表現する上でも重要である。
また、数の概念や数学的な思考も
「総合的な学習の時間」等の活動
に必要となる。逆に、小学校の算
数科での順序、個数、量などの数
の概念を、「生活科」や「総合的
な学習の時間」等の時間に体験で
きることになる。

また、美しいものを見て、
「美しい」という抽象的な言葉を
理解できたり、言葉に表現できな
い感動は、芸術の力、表現を借り
て表現しようとする音楽や図画工
作の教科にもつながる。

カリキュラム・マネジメント
では、教科等の授業を、単に“内
容的なつながり”だけではなく、
子供たちの“能力的つながり”の
視点にたったカリキュラム編成が

大切である。

6. ポスト・コロナの時代に向けて

現在学校では、ギガ・スкуль
ル構想が進み、ICT環境が整備さ
れている。コロナ禍の中で休校に
なったり、対面が制限された辛い
時期もあったが、オンライン教育
の可能性も見えた。小学校での英
語教育の充実も進んでいる。ユネ
スコスクールでは、日本の学校が
オンラインで海外の学校と交流し、
活発な交流が行われようとしてい
る。次代を担う子供たちが、持続
可能な社会の作り手として、グロ
ーバルな視野の育成も期待される
6)。

参考文献

- 1) 見上一幸 2015 論説 ESDの更
なる推進に向けて 中等教育資料
No.955, p.14-19, 文部科学省
- 2) 文部科学省国際統括官付・日本ユ
ネスコ国内委員会 ESD(持続可能
な開発のための教育)推進の手引
2018 平成30年改訂版
- 3) 国立教育政策研究所 2012 学校
における持続可能な開発のための
教育(ESD)に関する教育(最終報
告書) www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf
- 4) 見上一幸 2016 「持続可能な開
発のための教育」に寄せて 栄養
教論 p.6-13, 全国学校栄養士協
議会
- 5) 手島利夫 2007 小学校における
国際理解教育とESD 国際理解教
育シンポジウム in Miyagi
- 6) 見上一幸 2019 基調提案 「ES
D・学校教育における実践の展望」
p.12-15, 第11回ユネスコスкуль
ル全国大会報告書 文部科学省/
日本ユネスコ国内委員会

道徳教育の充実，道徳の授業と年間を通じた評価の在り方

宮城教育大学附属小学校
阿部 辰朗

1 はじめに

平成 28 年 3 月に新学習指導要領が告示され，小学校の道徳科は，新学習指導要領の趣旨を先取りして，平成 30 年度から「特別の教科道徳」が全面実施を迎えている。小学校の道徳科の授業では，これまでの道徳の時間の課題改善に向けた授業の質的転換が求められている。その学習指導改善の視点を道徳科では「考え，議論する道徳」と示し，道徳科の目標の中に示された「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」を目指す道徳科の学習活動と捉えることができる。この一連の学習活動は，道徳性を養うためにも欠かすことのできないものであり，道徳科の授業で，子供がこのような学習活動を行うためにも，教師はより効果的な学習指導過程や指導方法を工夫していくことが求められる。

2 道徳教育と道徳科の授業

本来，学校の全教育活動を通じて行うものであり，学校生活やすべての教科等にも道徳教育の要素があり，日常生活の一コマ一コマ全てが道徳教育である。道徳教育の目標，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とし，意図的，計画的に指導をしていく必要がある。

そのためにも本校では，

学校教育目標

「体も心もたくましく，
しかも，しなやかな子供」
・生命を大切にし，体を鍛える子供
・心の温かい，思いやりのある子供
・なぜと考え，真実を追求する子供
・互いに力を合わせ，自主的に行動できる子供

上記の学校教育目標の具現化を目指し，道徳教育目標を「自己を見つめ，よりよく生きる子供の育成」と設定している。また，22ある内容項目の中でどの内容項目を重点的に指導していけば，学校教育目標で目指す子供像が達成できるかを検討した上で，

本校の道徳教育重点指導項目

- ・生命を大切にする子供
【生命の尊さ】
- ・思いやりのある子供
【親切，思いやり】【友情，信頼】
- ・進んで行動する子供
【善悪の判断，自律，自由と責任】
【希望と勇気，努力と強い意志】

上記の五つの内容項目を重点指導項目として設定し，道徳教育を進めている。

この道徳教育の要となるのが，本校の道徳科の授業である。補充，深化，統合という働きの下に道徳科授業を道徳教育と関連付けて行っている。

道徳科が目指すものは，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。道徳性とは，人間としてよりよく生きようとする

る人格的特性であり，道德教育は道德性を構成する諸様相である道德的判断力，道德的心情，道德の実践意欲と態度を養うことを求めている。また，道德的価値とは，よりよく生きるために必要とされるものであり，人間としての在り方や生き方の礎となるものとされている。本校道德科では，その道德的価値について自他と対話しながら多面的・多角的に捉え，よりよい生き方を探究していくことこそが道德科における「本質に迫る授業」であると考えている。「本質に迫る授業」に近付き，学校教育目標の具現化に迫るために，本校道德科では「中心価値に向かう発問と問い返し」と「自己の生き方について考えさせる活動の設定」に焦点を当てて研究し実践を重ねている。



【道德的価値について対話しながら考える子供の姿】

3 評価の在り方

学習指導要領では，道德科における評価の意義について，「児童の学習状況や道德性に係る成長の様子を継続的に把握し，指導に生かすよう努める必要がある。ただし，数値などによる評価は行わないものとする。」と記されている。

本校では，平成27年度より全年で「道德ノート」を用いている。これは，「特別の教科 道德」の実施により使い始めたというわけで

はなく，道德の時間の中で考えたり学んだりしたことをいつでも振り返らせたい，そして，一定の時間が経過したときに自分の考えに変容があったか，広がりや深まりがあったかを捉えさせたいという思いから用いてきた。

この「道德ノート」が，子供たちにとって自己の成長を振り返り，生き方を考える契機となり，教師にとって日々の授業づくりや指導計画，指導方法を改善，工夫する手掛かりとなり，評価をする上で大きな役割を担っているのは間違いない。

子供たちの評価について，本校では，学習状況（横）と道德性に係る成長の様子（縦）を1年間の中でじっくりと見取っていくこと，校内研修等を通して道德教育の具体的な評価の仕方について職員間でしっかりと共通理解していくことという観点から，現在，年に1回，通信票に120字程度で記述している。学習状況においては，①道德的価値の理解を自分自身の関わりの中で深めているか。②他者の考えに触れ，思考する中で一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか。この二つの観点から，特に顕著な学習状況を記録する。また，成長の様子については，道德性を構成する諸様相である「判断力，心情，実践意欲と態度」は内面なので見取ることとはできないので，それが表出された発言，記述，会話，行動などの記録を蓄積して見取っている。

今後とも，児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め，励ますという観点から，具体的な姿やよさを見取っていききたい。

第Ⅶ章

本調査研究における

成果と課題と今後の展望



本調査研究における成果と課題と今後の展望

宮城教育大学附属小学校
教頭 佐藤 俊宏

1 本調査研究における成果と課題

本調査研究において掲げた3つのテーマから成果と課題について振り返る。

(1)「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」

各教科の学びがどのように学校教育目標の具現化につながっていくのかを明らかにしていくために、学校教育目標から5つの資質・能力（言語力・問題解決力・活用力・表現力・調整力）にブレイクダウンして、教科横断的な取組とリンクさせながら、学校教育目標の具現化を目指していくことができた。そして、校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ、授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指してきた。その結果、各教科等における「学ぶ意義」や「役割」とは何かを改めて明らかにし、教科等で目指す授業像を設定することができた。また、カリキュラムの見直しの観

点の一つとして、横断的な指導を掲げ、取り組むことで、資質・能力をベースとした系統立ったカリキュラムの作成の在り方を探ることができた。

しかし、各教科の学びと学校教育目標の具現化をつなぐところの不透明さが課題として挙げられ、学校教育目標具現化の具体的な検証にまでは至らず、今後の課題として挙げられる。

(2)「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」

学校教育目標の具現化を目指し、副題に掲げているように、各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。年間を通して研究授業を行い、互いに見合い、検討を重ねていくことで、各教科等及び教材のもつ本質を明確にすることができた。また、子供に各教科等における見方・考え方を働かせながら本質に触れさせていくことで、問い（課題意識）を明確にもたせ、主体的な学びを展開させ、深い学びの実現を目指すことができた。

しかし、授業研究におけるPDCAサイクルの確立が課題として挙げられる。特に、P（評価）からA（改善）に向けた取組を強化していくことで、更なる学習の基盤となる資質・能力の育成が図られると考える。そこで、授業の評価・改善の方法を検討し実施していく必要がある。

（3）「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」

① 小学校外国語教育における指導と評価の一体化

新しい3観点に基づく「主体的に取り組む態度」「知識・技能」「思考力、判断力、表現力」での指導と評価に取り組んだ。指導を行いながら、評価場面や評価の方法について検討を行ってきた結果、「知識・技能」は、Unitの前半部分で、「思考力、判断力、表現力」は、後半部分で評価が可能であることが明らかになった。また、主体的に取り組む態度については、複数のUnitで子供の取組の様子を見取ることが必要であることが明らかになった。学期の最後に取り組んでいるALTと1対1で行うパフォーマンステストでは、評価する観点を「思考力、判断力、表現力」に絞り、評価規準をもとに担任が評価を行うことで、子供の成長をじっくりと見取ることが

できた。また、高学年でノートを活用し、ノートを用いた指導の在り方について探ってきた。ノートを活用することで個人のレベルに合わせて書く活動に取り組ませることができ、有効に活用することができた。

本校は1年生から英語活動として、英語に親しんでいるため、中学年での教科化も可能であると考え。そのため、中学年での教科化の在り方について検討していく必要がある。

② CS（コンピュータ・サイエンス）のカリキュラム化

全学年10時間のCS（コンピュータ・サイエンス）の時間を設定し、カリキュラム化を図ってきた。その結果、コンピュータへの理解を深めさせるための授業について実践を重ね、コンピュータ・サイエンスの体系表を整備することができた。また、プログラミングだけではなくCSの授業が必要であることについて、公開研究会の場で提案し、多くの同意を得ることができた。さらに、CSの授業を作る上での方向性が明らかになった。CSでは、どの要素を扱う授業なのか、何を身に付けさせる授業なのか明確となった。

しかし、情報活用能力との関連性を明らかにする必要性や教科化に伴う根拠の必要性、5年後を見据えたときのハードウェア整備が

課題として明らかとなった。そこで、本校で育成したい情報活用能力の体系表を作成し、CS体系表と関連付け、今行っていることがどこに位置付くものなのか可視化していく。また、カリキュラム化に向けて教科学習の根拠となる指導要領を整備していく必要がある。

③ 道徳教育の充実

道徳の特質は何か、子供の実態はどうかを根拠にして考え、計画→実践→評価→再実践のサイクルにより日常の授業を重ねてきたことで、道徳科の特質、「本質に迫る授業」の具体像、価値に迫るための手立てが少しずつ明らかになってきた。また、p4cの取組を積み重ねてきたことで、安心安全に話し合える雰囲気醸成と聞く（聴く）力が高まり、道徳的価値について自分の生活経験を振り返りながら、自他と対話して考え、よりよい生き方を探究していこうとする姿が見えてきた。さらに、学習状況（横）と成長の様子（縦）を1年間の中でじっくりと見取ることを共通理解できた。

しかし、道徳科の授業が1時間の授業で終わってしまっている。道徳科の授業を、1時間で終えるのではなく、次の道徳科の授業や他教科、領域に関連させて継続的に指導していくことが必要である。また、評価するための「道徳ノート」であってはならない。道徳科

で評価するのは、学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子についてである。

「書いてあることが、子供の本音」だと決めつけるのではなく、「書いてある事実」のみを評価するのではなく、子供の記述の裏側を見ることがや、授業での発言、学校生活での子供の様子と関連付けて評価していくことを検討していく必要がある。

2 今後の展望

本調査研究をカリキュラム・マネジメントの3つの側面に即して、見直していく必要がある。その際、教育課程を意義あるものにするために、次の3つの視点からカリキュラム・マネジメントを評価していくことが重要である。

- ① 「学校教育目標」と「教育課程」はつながっているか。
- ② 「教育課程」と「授業」はつながっているか。
- ③ 「学校教育目標」「教育課程」「授業」は、児童生徒、地域、学校の実態に応じたものとなっているか。

その結果、全てが連動したものとなってこそ、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメント」が生きたものとなっていくと考える。



おわりに

副校長 佐々木 誠 道

令和元年度から本校では、文部科学省委託事業「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」を受け、取り組んできました。昨年度末から、コロナの休業期間が3か月間続き、今年度は6月からの授業再開となりました。休業期間中は、学びを止めないとオンラインで授業を行いました。その後に2年目の研究がスタートしています。

そんな中、昨年度実践を重ねてきた各教科部での「本質に迫る授業」を目指した取組や今年度教科の枠を超えてチームで育むべき資質・能力を「言語力」「表現力」「活用力」「調整力」「問題解決力」と捉え、これらの資質・能力を高めながら学校教育目標の具現化に迫ろうという取組、現代的諸課題に対応する資質・能力を育む取組等について指導案を含めて多くの実践を紹介する機会を得たことをうれしく思います。

カリキュラム・マネジメントのねらいは「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」と学習指導要領総則に記載されています。本校では、初年度、各教科で本質に迫る授業を追求してきた中で明らかになってきたことを基に、教科を超えて育成される学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力に目を向け、組織として研究を進めています。授業研究会や研究全体会の討議を通して職員の共通理解を図り、教育活動を見直し、質の向上を図っているのです。

このまとめを手にとっていただいた多くの皆様方に本校研究について忌憚のないご意見・ご助言をいただければ幸いです。

最後になりましたが、研究を進めるにあたってご指導・ご協力いただきました宮城教育大学の先生方、並びに関係各位に心より感謝申し上げます。

令和元年度(研究1年次) 研究同人一覽

校長	西城 潔
副校長	手代木吉之
教頭	佐々木孝徳
主幹教諭	佐藤 俊宏
教務主任	今野 ゆき
研究主任	佐藤 拓郎
国語科	◎小池 美幸, ○村上 和司, 加藤 千佳
社会科	◎三浦 秋司, ○前田かおり
算数科	◎三井 雅規, ○玉手 英敬, 平井 孝
理科	◎渡部 智喜, ○上杉 泰貴, 吉田 航也
生活科	◎柴生 彰, ○新田 佳忠
音楽科	◎早坂英里子, ○宮澤 莉奈
図画工作科	◎大久保達郎, ○奈須野かなえ
家庭科	◎高橋 大地, ○大村 奈央
体育科	◎黒田 栄彦, ○本郷 真哉
道徳科	◎阿部 辰朗, ○牧野 裕可
英語科	◎今野 ゆき, ○中元 千春, 尾形 尚子
特別活動	◎佐竹 達郎, ○鹿内 隆世
食と健康	◎齋藤 裕子(栄教), 村石 智美(養教)
講師	千葉 岬, 高橋いくみ, 芹澤 真由, 工藤 優子, 菊地 諒子, 佐々木裕美, 平山 遥香
支援員	長田 加奈, 齋藤 翼, 山本 美奈実, 手島 千咲
ALIT	檜森エリザ カウンセラー 高島 香織, 伊藤 亜綾
図書司書	下山 静江 事務補佐員 丹野 祐子, 加藤 恵実
特別支援室長	川村 修弘

令和2年度(研究2年次) 研究同人一覽

校長	西城 潔
副校長	佐々木 誠道
教頭	佐藤 俊宏
主幹教諭	今野 ゆき
教務主任	佐藤 拓郎
研究主任	三浦 秋司
国語科	◎小池 美幸, ○村上 和司, 加藤 千佳
社会科	◎前田かおり, ○千葉 廣
算数科	◎三井 雅規, ○玉手 英敬, 平井 孝
理科	◎渡部 智喜, ○吉田 航也
生活科	◎遠藤 宏紀, ○佐藤 俊宏
音楽科	◎早坂英里子, ○宮澤 莉奈
図画工作科	◎奈須野かなえ, ○日野 暢
家庭科	◎高橋 大地, ○大村 奈央
体育科	◎黒田 栄彦, ○本郷 真哉
道徳科	◎阿部 辰朗, ○牧野 裕可
英語科	◎尾形 尚子, ○阿部 一也
特別活動	◎鹿内 隆世, ○安倍 彰人
食と健康	◎齋藤 裕子(栄教), 大場 亜珠(養教)
講師	千葉 岬, 浅水 瞳, 佐藤 竜昆, 工藤 優子, 今野あきほ
支援員	関 貴子, 長田 加奈, 石垣 秋一, 手島 千咲
ALIT	檜森エリザ カウンセラー 高島 香織, 伊藤 亜綾
図書司書	下山 静江 事務補佐員 加藤 恵実
特別支援室長	川村 修弘

令和元年度(研究1年次)

カリキュラム・マネジメント検討委員一覧

宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		横須賀 薫	様
宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		数見 隆生	様
宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		見上 一幸	様
宮城教育大学社会科教育講座	教授	吉田 剛	様
宮城教育大学技術教育講座	教授	安藤 明伸	様
宮城教育大学英語教育講座	准教授	鈴木 涉	様
仙台市立片平丁小学校	校長	佐藤 哲郎	様
宮城教育大学附属学校課	課長	笹村 和雄	様
宮城教育大学附属幼稚園	園長	木下 英俊	様
宮城教育大学附属幼稚園	副園長	菅原 理恵	様
宮城教育大学附属中学校	校長	遠藤 仁	様
宮城教育大学附属中学校	副校長	橋本 牧	様
宮城教育大学附属特別支援学校	校長	高田 淑子	様
宮城教育大学附属特別支援学校	副校長	樫村 恵三	様
宮城教育大学附属小学校	校長	西城 潔	
宮城教育大学附属小学校	副校長	手代木吉之	
宮城教育大学附属小学校	教頭	佐々木孝徳	
宮城教育大学附属小学校	主幹教諭	佐藤 俊宏	
宮城教育大学附属小学校	教務主任	今野 ゆき	
宮城教育大学附属小学校	研究主任	佐藤 拓郎	
宮城教育大学附属小学校	研究副主任	三浦 秋司	
宮城教育大学附属小学校	研究副主任	村上 和司	

令和2年度(研究2年次)

カリキュラム・マネジメント検討委員一覧

宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		横須賀 薫	様
宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		数見 隆生	様
宮城教育大学名誉教授(元附属小学校長)		見上 一幸	様
宮城教育大学社会科教育講座	教授	吉田 剛	様
宮城教育大学技術教育講座	教授	安藤 明伸	様
宮城教育大学英語教育講座	准教授	鈴木 涉	様
仙台市立片平丁小学校	校長	佐藤 哲郎	様
宮城教育大学附属学校課	課長	笹村 和雄	様
宮城教育大学附属幼稚園	園長	木下 英俊	様
宮城教育大学附属幼稚園	副園長	佐々木真理	様
宮城教育大学附属中学校	校長	平垣内 清	様
宮城教育大学附属中学校	副校長	橋本 牧	様
宮城教育大学附属特別支援学校	校長	高田 淑子	様
宮城教育大学附属特別支援学校	副校長	門脇 恵	様
宮城教育大学附属小学校	校長	西城 潔	
宮城教育大学附属小学校	副校長	佐々木誠道	
宮城教育大学附属小学校	教頭	佐藤 俊宏	
宮城教育大学附属小学校	主幹教諭	今野 ゆき	
宮城教育大学附属小学校	教務主任	佐藤 拓郎	
宮城教育大学附属小学校	研究主任	三浦 秋司	
宮城教育大学附属小学校	研究副主任	村上 和司	
宮城教育大学附属小学校	研究副主任	渡部 智喜	

令和1・2年度 文部科学省委託事業

「これからの時代に求められる資質・能力を育むための

カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」

カリキュラム・マネジメントの手引き

発行日 令和3年1月8日

発行者 宮城教育大学附属小学校

校長 西城 潔

〒980-0011 仙台市青葉区上杉六丁目4番1号

TEL 022-234-0318

編集担当者 宮城教育大学附属小学校 カリキュラム・マネジメント検討委員会

印刷者 本田印刷株式会社

〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町3-5

TEL 022-288-5231